人とクジラのいる風景

ー 日本編 ー

桐生敏明

人とクジラのいる風景
― 日本編 ―

旅のはじまり　2　大宝の老人・田池先生

1.三重県　鳥羽　6　石鏡漁港とクジラ漁
2．山口県　長門　12　通くじら資料館とくじら墓
3．沖縄県　座間味　24　慶良間ブルーの海とエスコート号
4．長崎県　壱岐・辰の島　38　イルカ受難とケイトさんの決断
5．石川県　能登島　48　イルカのカップルとその冒険
6．熊本県　天草　52　ミナミバンドーイルカ
7．北海道　釧路　60　シャチ観測船に乗る
8．愛媛県　しまなみ海道　78　バンドーイルカのもも
9．沖縄県　美ら海水族館　96　空を飛んだフジ
10．東京都　小笠原　110　モッチーニと望月昭伸さん

旅のおわりに　134「いじか物語」と太地町

旅のはじまり／大宝の老人・田池先生

僕は「イルカ」や「クジラ」の研究者でも、マニアでもありません。

でも「イルカ」や「クジラ」が大好きです。

大好きになったのは、一人の老人の一言からです

この老人は、今からほぼ 10 年前の 2015 年 12 月に亡くなりました。90 歳でした。

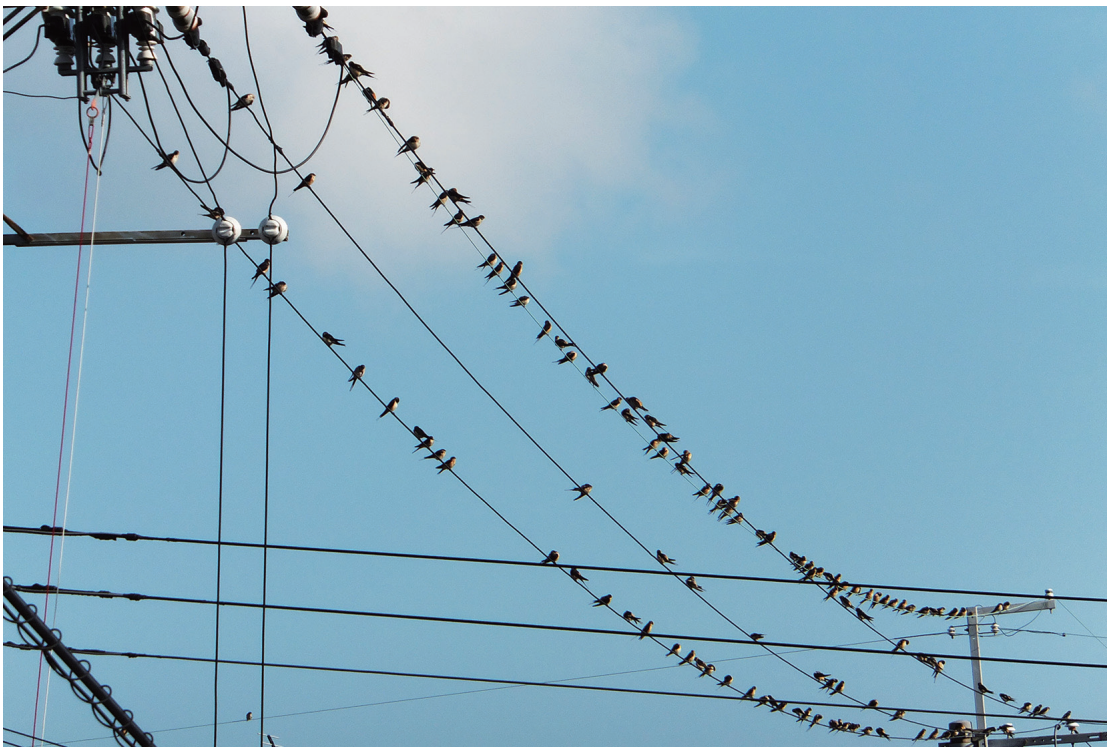
みんなから「先生」「先生」と慕われているおじいさんでした。

「あなたの先生は?」と、もし誰かに聞かれたら、あなたが思い浮かべるのはどんな先生でしょうか？

あなたが中学生や高校生なら、もちろん担任の先生か、クラブの先生か、それも若くて、ハンサムで、それとも美人なのかな――まあ、いやな先生の場合だってあるでしょうが。

ところが僕ときたら、「先生」という言葉にどんな思いを抱くかというと――自慢じゃありませんが、僕は今年で 78 歳を迎えた、歳だけは立派な老人なのであります。

友だちや知り合いの中にだって、「先生」と呼ばれる職業をしている人間だっている



訳であります。

だから「先生」などと聞いたって職業の一種ぐらいに考えていて、ビクとも心は動きません。それどころか「先生と呼ばれるほどのバカじゃなし」、そんな川柳（せんりゅう）が思い浮かぶほど、ねじれて成長してしまったわけであります。

そんな僕ですが、敬意を込めて「先生」と呼んでいるのが、この老人なのです。

「先生」と呼ぶのは、この老人が、大阪府立高校の校長先生をしていたためで、決して僕が、この先生の授業を受けたり、昔、担任の先生だったりとかいうわけではありません。

見かけは、はっきり言ってよくありません。コップの中に浮かべた入れ歯をはさんで向かい合って座ったりすると、やっぱり「先生」と思っていても、ゲンナリするものです。

では、どこが偉いのかって？

この僕が尊敬するのだから、何か不思議な超能力を持っていたりとか、ずばぬけた数学の天才だったりとか、政財界ににらみをきかす、実は日本の陰の実力者だったりとか――君はそんなことを思ったかも知れませんね。

――思わない？！

（思ってくれないと、話が前に進まないのですが――まあ、いいか。）

正解です。思わなくて正解なのです。

大宝の町で、ツバメの旅立ちを見守る田池先生とご近所の人たち

何の変哲もない老人ですが、言うこと、することが、少しおかしいのです。

「人は、みんながみんな、たとえば山田さんなら《山田さん》という名前を与えられた、その肉体こそが自分だと思っていますが、それはどうでしょうか?」と、そんなことを言いだすんです。本当の自分は、教育やら道徳やら習慣やらに縛られた《山田》という名前の肉体ではなく、何にも束縛されない「心」や「意識」こそが「あなた自身」だというんです。

現実の世界からみれば、「少しずれてるんじゃない」、そんな感想が出るかも知れませんね。

でも、その現実から外れた、そのおかしいところが、僕が敬意を込めて「先生」と呼ぶ所以(ゆえん)でもあります。スタンダールだって言ってるじゃないですか。「天才は、凡人の敷いたレールに自分の思想を乗せないことである」って。

まぁ、こなん話はさておき、その老先生から、亡くなる一年前だったと思いますが、まるで謎かけのように、こんなことを言われたのです。

「イルカやクジラは人間に近い存在です。自分も昔から注目していましたが、思いが通じる相手です。一度、試してみたらいいと思います。」

そんなことを言った後、急に砕けた調子で、「なぁ桐生さん、頼みましたよ。」

と、名指しで、こんな妙なことを頼まれたわけです。

ここから僕の、イルカやクジラをめぐる旅がはじまったというわけです。

最初はおもしろ半分、なんてったって好奇心にかけては、君たち若い人に引けを

とるものじゃありません。アマゾン検索で、1円から数百円程度の「イルカ」「クジラ」に関する中古本を買いあさりました。本って高いですから、集めるのが大変なんですよね。だと言って図書館へ行く時間もない。そこで「アマゾン・ジャパン」に生息する「イルカ・クジラ本」の捕獲・調査作戦が開始されたわけであります。

しかし、調べれば調べるほど、知れば知るほど、「イルカ」や「クジラ」というのは、魅力的な存在です。たちまち心を奪われ、「イルカ」や「クジラ」から心を離せなくなってしまいました。

こうして出来たのが、あなたが手にしている、この本です。

分類好きな方が見たら、

「いったい、この本はなんだ!」と怒りだすかも知れません。

「写真集なのか、絵本なのか、歴史紀行なのか、クジラ・イルカの解説書なのか、エッセーなのか、それとも今はやりのファンタジーなのか、ハッキリしろ!!」って。

すみません、元来からハチャメチャな性格で、あれもこれもと思ううち、こんな不思議な本が出来てしまいました。ここは何とかこらえて、なんとかおさえて、何とぞ何とぞ、一読、いや一覧、いや一感（こんな言葉はないか）、ともかく目を通してみてください。

と、いうことで、早速、話をはじめることにいたしましょう。

（誰ですか、「ちっとも早速じゃない」、なんて言ってるヒトは――）

1. 鳥羽市／石鏡漁港とクジラ漁

三重県の鳥羽市に「石鏡」という漁港があります。この「石鏡」という名前の起こりですが、石鏡漁港の沖合い１キロのところに「石鏡島」という小さな島があります。1959（昭和 34）年の伊勢湾台風までは、この島は、石鏡神社の絵馬にあるように、島の真ん中にポッカリ丸い穴が開いた「円鏡」のような形をした島でした。その丸い穴の部分を通してみる海の景色がまるで鏡に映された景色のようで、これが石鏡島の名前のいわれだと伝えられています。

ところが伊勢湾台風で、上部が高波に削り取られ、二本の柱のような島になり、それがさらに船の座礁によって、左柱部分が

欠損し、写真にあるような今の形になったと言われています。

さて、そんな石鏡の名前が付けられた「石鏡漁港」ですが、昔からこの場所にあったわけではありません。江戸時代後期になってこの場所へ移ってきたと言われているのです。

この石鏡漁港には、海に面して「漁業協同組合」の事務所がありますが、ここに「鯨船他もやい申定之事」という捕鯨に関する掟書が残されています。

「もやい」というのは、漢字では「舫い」と書きます。舟偏がついていますので、船をつないでおくようなことで、ここでは鯨漁をする上での決まりごとが書かれた掟書ということです。いつ書かれたかというと、江戸時代初期のものです。

つまり石鏡漁港は、江戸時代の捕鯨基地であり、その場所も岬を一つ回った

「大木浜（おんぎのはま）」というところにあったというのです。

　このあたり一帯は、弥生時代中期から海岸沿いに集落が営まれたところで、白浜海水浴場には集落遺跡のあとが残されており、シカやイノシシの骨とともに、イルカやクジラの骨も掘り出されていると言います。かといって、この頃からクジラやイルカを捕っていたわけではなく、流れ着いたイルカやクジラの死骸を食べていたのではないでしょうか。また湾に迷い込んだクジラやイルカを、石銛（いしもり）のような道具で殺していたとも考えられます。

　さて、この鳥羽地方で組織的な捕鯨（ほげい）がはじめられるのは、おそらく戦国時代も中期の頃ではなかったでしょうか。と言いますのは、蜷川親元（になかわちかもと）の日記である『親元日記（ちかもとにっき）』に、寛正六年（1465）に伊勢から「鯨荒巻（くじらあらまき）」が贈られたという記事があり、文明十三年（1481）二月には尾張の織田信長が年始の祝儀として「鯨荒巻」を献上したことが記されております。また「言継卿記（ときつぐきょうき）」にも天文十三年（1544）、伊勢から京都の貴族である山科言継（やましなときつぐ）に鯨荒巻が届いたという記事がありますので、この時期、すでに組

白浜海水浴場と弥生遺跡

織的な捕鯨業が、三重や愛知で始まっていたと考えて間違いないと思われます。

このことから見ても、この東海地方が組織的な捕鯨業発祥の地ではないかと思うのです。ここに登場するのが九鬼水軍（くきすいぐん）の存在。九鬼水軍という組織化された海賊の登場により、彼らが漁師たちを率い、これまでは個々に散発的に行われていた捕鯨を、水軍方式の捕鯨に組織化していったのが、尾張や三重での捕鯨業の始まりだと思われます。

尾張も三重も、ともに伊勢湾を挟んで向かい合っており、両者ともに、この伊勢湾を舞台に水軍仕立ての捕鯨を行っていたようなのです。

映画「ゴジラ」（1954 年）に登場した大木浜砂浜にゴジラが尾を引きずった跡と足跡が。

これに対し組織的な捕鯨は、和歌山の太地こそが最初だという説もあります。鎌倉時代、「和田の乱」に敗れた和田氏が、この地に落ち延び、その一族が捕鯨を組織化したのだとする伝承も、一方で残されているのです。

石鏡漁港の長老細木さんご夫妻と「海女のあいちゃん」こと写真家の大野愛子さん

いずれにせよ戦国期に登場した水軍の存在が、捕鯨業を組織化させたという事実は間違いのないところでしょう。

ところで、この「大木浜（おんぎのはま）」は、映画「ゴジラ」（第一作）が撮影された場所でもあり、その関係から「ゴジラ浜」とも呼ばれています。

「クジラ」と「ゴジラ」、語呂（ごろ）あわせではありませんが、双方ともに思い入れのあ

る私としましては、ぜひ、この大木浜に立ってみたいと思った次第。

そこで、漁港にある「西村食堂」の親爺さんに場所を尋ねると「すぐ行ける」と気軽に教えられたのですが、単独で出かけたものの、とても見つかるものではありませんでした。日は暮れてくるし、道を尋ねようにも人影もないしで、その日の探索は断念せざるを得ませんでした。

そこで、日を変え、今度は鳥羽市観光課に救いを求めたのです。

場所を教えてもらうだけでよかったのですが、「一人では無理です」と、鳥羽市観光課の〇〇さんが、海女（あま）修行中の写真家の女性「海女（あま）のあいちゃん」こと大野愛子さんと一緒になって案内してくださることになったのです。

まずは３人そろって、漁港の長老・細木さんに石鏡漁港についてお話を聞き、

山道を 30 分ほど下ると海女小屋が見えてきます。ここを過ぎるといよいよ大木浜です。

ついで問題の「旧石鏡漁港」のあった「大木浜」を目指します。その場所は、今は海女の聖地になっており、漁労権（ぎょろうけん）や密漁（みつりょう）

大木浜（宝永津波までの石鏡漁港）

鯨漁のための勢子船（鳥羽市海の博物館蔵）と相差の町で見かけた「鯨まつり」の案内表示

の問題もあって、詳しく紹介することはできませんが、山道を小一時間ちかく下った隠れ浜のようなところ。この地を掘ったとき、たくさんの鯨の骨が見つかったと言われています。

この隠れ浜から岬を一つ隔てたところに白浜海水浴場があります。

さていよいよ本題ですが、この石鏡漁港が、なぜ、今の地に移ったのかというと、それは江戸時代中期に起こった「東南海地震」に起因しています。俗に「宝永大地震」（1707年10月）と呼ばれていますが、この地震に伴う大津波で、志摩、鳥羽は言うに及ばず、東海、近畿、四国、山陽の海岸部が壊滅状態になりました。この結果、三重、和歌山（太地）、四国（高知）の捕鯨業が壊滅するに至ったのです。

太地や高知については、大阪の穢多村

現在の石鏡漁港

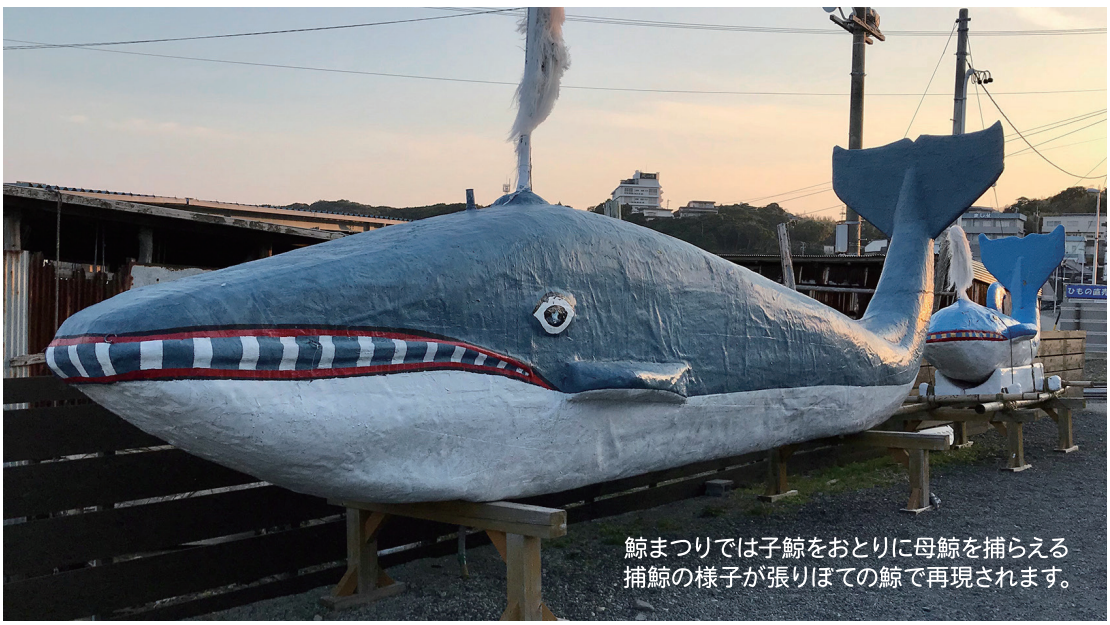
―― 当時、穢多・非人と呼ばれた被差別民の集落との結びつきがあり、その頭である太鼓屋又兵衛の資金提供で復興が可能となりましたが、三重の捕鯨業については、この宝永地震以後、少なくとも石鏡では、かつてのような捕鯨基地としては復興しなかったようです。

こうして捕鯨業で栄えた石鏡漁港および石鏡の集落は壊滅し、今の石鏡漁港へと移動してきたと言われています。

鳥羽から志摩にかけての捕鯨業の名残りは、今も相差（おうさつ）という村の「鯨まつり」として残されてり、毎年７月14日になると、相差の魚港には「張りぼて」の鯨の親子が担ぎ込まれ、祭りのクライマックスには、若い衆にかつがれ海へと入っていきます。ここでは子鯨を囮（おとり）に母鯨を捕らえる捕鯨法が祭りのイベントとして紹介されて

いますが、幾分の後ろめたさが、母鯨の母性愛に対する驚きの思いと共に残されているように感じました。そして、この後ろめたさは、次章で紹介する、山口県長門市通（とおり）の「鯨墓（くじらばか）」に、より鮮明に現れているように思います。

そんなことを思いながら、大木（おんぎ）の隠れ浜に立っていると、かつて刃刺しと呼ばれたクジラ獲りの若者・銑吉（せんきち）の苦渋（くじゅう）に満ちた思いが湧き上がってまいりました。



鯨まつりでは子鯨をおとりに母鯨を捕らえる捕鯨の様子が張りぼての鯨で再現されます。

2. 長門市通（かよい）／くじら資料館とくじら墓

1. くじら資料館

ところで、この銑吉（せんきち）と言いますのは、この本の最後の章が「いじか物語と太地町」になっていますが、その物語の主人公の一人なのです。

鳥羽でまだ捕鯨業が盛んだったころ、子クジラをおとりに母親のザトウクジラを仕留めた刃刺しの銑吉です。不漁続きで、見逃してほしいという母親クジラの夢だのみを無視して、泣く泣く母クジラを仕留めた銑吉でした。そして、その直後に起こったのが宝永の大津波です。この大津波のため、銑吉の住む浦は壊滅状態。

漁師仲間をはじめ、銑吉の大事にしていたすべてが失われてしまいました。

この銑吉にかかわらず、クジラ捕りの男たちは、ある種の後ろめたさを抱えています。特に母クジラを殺した後、残された子クジラたちは、このままではどうせ死んでいくだけ、それなら、人間の血となり肉となって、ともに成仏してくれという寸法。

肥前国産物図考（佐賀県立名護屋城博物館）

長門市通にある「くじら資料館」

しかし、いくら自分に言い聞かせてみても、ある種の後ろめたさというか後悔というものがついてまわります。

子クジラだけではありません。成獣となったクジラでも、いよいよの断末魔の吠え声は、熟練の刃刺（はざし）でさえ耳をふさぎたくなるほど切ないものだといいます。

このためでしょうか、クジラを供養する墓は、他の動物のものと比べ比較にならないほど多く、日本全国で約 100 か所に及ぶと言われています。

今回訪れたのは山口県長門市の青海島（おうみじま）にある通（かよい）というところ。毎年７月に「通（かよい）クジラまつり」があることで有名ですが、この時ばかりはにぎわうものの、それ以外は辺鄙（へんぴ）な漁師町。この辺鄙な漁師町の中心に目的の「くじら資料館」はありました。

長門市駅からバスで揺られること30分近く、「通漁協前」で降りると、目の前に「くじら資料館」の建物があり、その建物の陰に巨大なザトウクジラの姿が見え隠れするように姿を現します。

クジラ資料館の広場に置かれたクジラの張りぼてです。クジラ祭りに使われるのでしょうが、その前にはザトウクジラの尾びれのオブジェが台座の上に据え付けられ、その台座にはめ込まれた銘板には次のような一文が記されていました。

「有情／通浦では延宝元年（1673）頃から網取法によって捕鯨が始められ、明治末期まで長州捕鯨の中心をなしていました。

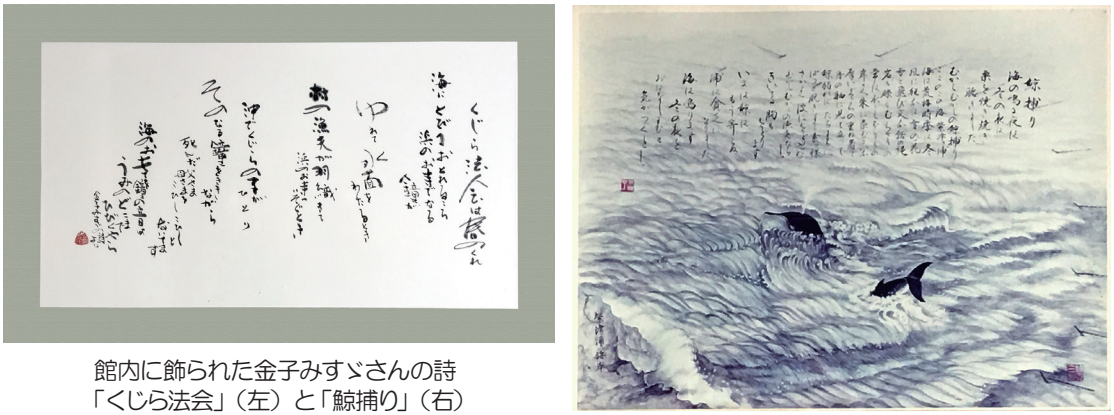
捕獲した鯨に対する報恩感謝を願う人情厚い浦人たちによって、鯨墓を元禄五年（1692）に左山手の清月庵に建立しました。墓地には七十数体の鯨の胎児がまだ見ぬ大海の夢を抱いたまま、地中に永眠しています。

平成三年三月　長門市教育委員会」

館内に入ってまず目につくのが金子みすゞさんのクジラを歌った詩二編「くじら法会」と「鯨捕り」。

「くじら法会」は館内に入ったホールに飾られており、入り口の「有情」の銘板と共にクジラ捕りの切なさがヒシヒシと伝わってきます。

くじら資料館前の広場に置かれたクジラの張りぼてと「有情」と題されたモニュメント



館内に飾られた金子みすゞさんの詩
「くじら法会」（左）と「鯨捕り」（右）

◎ くじら法会

くじら法会は春のくれ、
海に飛魚採れるころ。

浜のお寺で鳴る鐘が、
ゆれて水面をわたるとき、

村の漁師が羽織着て、
浜のお寺へいそぐとき、

沖で鯨の子がひとり、
その鳴る鐘をききながら、

死んだ父さま、母さまを、
こいし、こいしと泣いてます。

海のおもてを、鐘の音は、
海のどこまで、ひびくやら。

みすゞの詩にしんみりしていると、「説明しましょうか」と、中肉中背ながら、がっしりとした老人が声をかけてくれました。それが、この長門市くじら資料館の館長・早川さんだったのです。

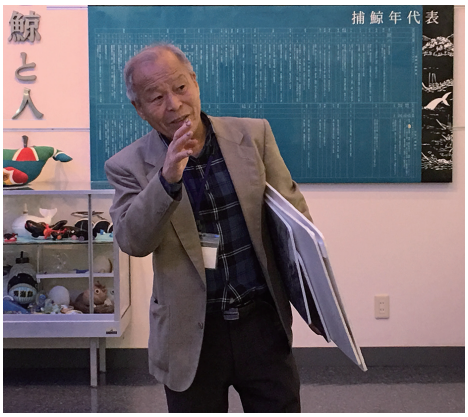
早川さんといえば、つい今しがた見て回っていた館内資料の中に「早川家」という古式捕鯨の元網本の屋敷が紹介されていました。この資料館に来る前にも、開館時間もまだだったため、漁協前でバスを降りた後、資料館とは反対側に海辺の突堤沿いに歩いていくと、「早川家住宅」の案内表示が道沿いの駐車場の中にぽつんと立っていました。案内表示に従い訪ねていくと、海沿いの道から一すじ奥に入った道に白壁の玄関口があり、そこに「早川家住宅」の説明書きが大きく出ていました。

声をかけてみますが、留守のようです。裏側へまわってみて声をかけますが、やはり誰もいないようです。

「ひょっとして、早川館長は、元網本の……？」

思った通り「そうです」という答えが返ってきました。くじら資料館館長・早川義勝さんは、この地の古式捕鯨の網本早川家 18 代目の当主だったのです。

「さきほどご自宅を訪ねたのですがお留



丁寧に館内を説明してくださる早川館長（左）と「通鯨唄」保存会、結成当時のメンバー（昭和 23 年）

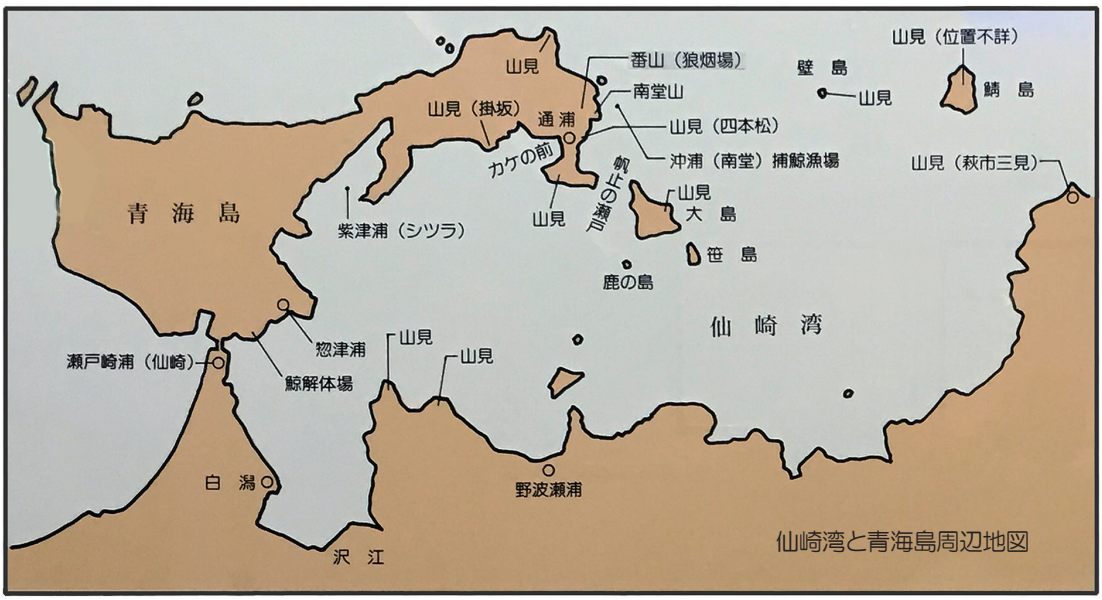
守でした」と伝えると、

「では、受付の女性が昼の休憩から帰ってきたら一緒に行きましょう」、屋敷の中をみんな見せてくれると言うのです。

待っている間、館長の「通鯨唄（かよいくじらうた）」を聞かせていただくことになりました。くじら祭りでは必ず歌われる祝い唄だそうで、長門市の無形文化財になっているそうです。歌う間、かならず手拍子でなく、もみ手をして歌うことになっています。これは命をささげてくれたクジラに、また共に幼いいのちを絶った子クジラや胎児のクジラに追悼（ついとう）の意を表しているのだというのです。

2．早川家住宅と鯨墓

刃刺（はさ）しの銑吉（せんきち）には不思議な特技がありました。



ご存知のようにクジラは哺乳類で、呼吸のために頭の上に鼻がついており、それを水面に出しています。どんなに長く深く海中に潜ろうと、呼吸のために、いつかは海面に頭を出さなければなりません。

ホエールウォッチングをしたことがある人なら分かるでしょうが、クジラが出てくる場所を探すには「潮吹き（ブロー）」が目当てとなります。クジラが水面に上がるや、「ブオーッ」という音ともに、鼻から溜まった海水を一気に噴き出すのです。

ところが仙吉は、見たり聞いたりばかりでなく、クジラを感じることができるのです。今、海中のどのあたりにいるのか、どのあたりに上がってくるのか、まるで海の中にいるクジラの様子が手に取るようにわかってしまうらしいのです。

くじら資料館に残されたクジラの胎児

そんな次第ですから、鳥羽のクジラ捕り仲間では一目置かれる存在になっていました。でもその半面、この力が災いして、どうにもやるせない思いに追い込まれるこ

とがあります。

南の海で生まれた子クジラを連れ、北の海にかえるメスのザトウクジラを見つけた時のことです。クジラは母性愛が強く、子連れの時は常より猛々しくなるため、普段は子連れのクジラは見逃すようにしているのです。しかも給餌のために北へ帰る下りクジラは、子育て期間中、ほとんど餌を口にしていません。つまり栄養不良状態なのです。そのうえ北へ流れる黒潮に乗っているため、泳ぐ速度も速く捕らえるのが難しいという訳です。

普段なら見送るところなのですが、どうしたわけか、ここしばらく、まったくクジラが姿を見せず、浦の生活自体も苦しくなってきていました。そこへ母親からはぐれた子クジラが浦へ迷い込んできたという次第です。

クジラの中でもザトウクジラは特に母性愛が強く、子供をおとりに捕まえてしまえば、決して母親はその子のそばを離れることはありません。いやなやり方ですが、浦の生活を思えば、なんとしても見逃すことはできませんでした。

これが「いじか物語」発端のお話です。

「今回は見逃してほしい、子供を北の海へ連れて帰ったあと、この沖を通るときは、この命をささげよう！」

銑吉は、伝わってきたそんな母親クジラの思いを無視し、「浦のためだ、しかたねえ！」と、子供をおとりに母親クジラを追い込み、ついに母子ともどもにとどめを刺したのです。

銑吉は、とどめを刺すとき、まるで自分の母親を殺しているような後ろめたさに襲われたのでした。

そして宝永の大地震、このときの大津波によって石鏡は壊滅します。

生き残った銑吉は、殺した母クジラの断末魔の吠え声に苛まれ、壊滅した浦や村を彷徨いつづけます。そんなとき、赤子に乳を含ませながら死んでいる母親に呼び止められました。

最初は死んでいるとは思わなかったのですが、確かめれば、すでに息の切れた骸にちがいありません。

その骸のおっぱいにしがみつき、その子は元気に泣き叫んでいました。

勢子舟をはじめとする長門地方のクジラ船

魚霊観音とクジラ

死んだ母親から「この娘を、この娘を……」という思いが伝わってきます。

このシチュエーションの元となるお話が、この仙崎に伝えられています。

昔、仙崎の白潟というところに「鯨組」を営んでいる分限者（金持ち）がおりました。ある夜のこと、夢枕に観音様が立たれ、「明日は、安産祈願のお礼に子クジラを連れてこの沖を通るが、どうかどうか捕らえないでほしい。代わりに帰り道には必ずこの夫婦がおまえの網にかかって果てるから」と、お告げをされたというのです。

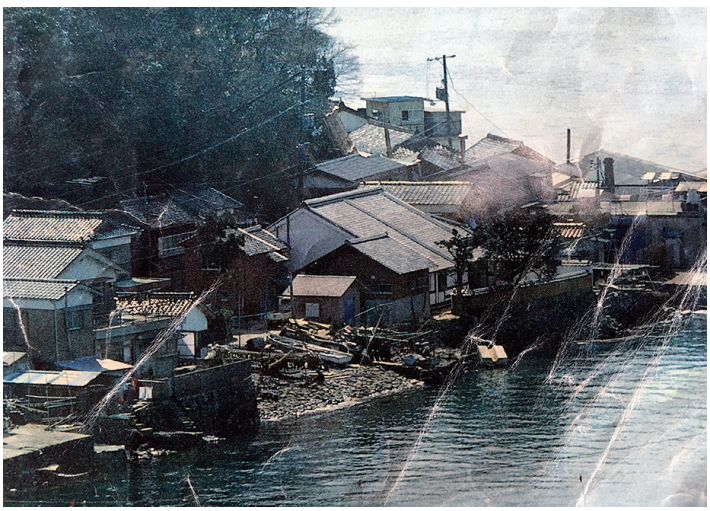
しかし、ここしばらく不漁が続き、「どうしたものか」と困っていた矢先のことでしたので、親子三頭のクジラが沖を通るのを見て、夢のお告げも忘れ、このクジラの家族を親子ともども補殺してしまったのです。

以来、この家は急速に家運が傾き、今では跡形もなくなったと伝えられています。

また地方によって、頼みを無視した浦が津波で滅んでしまうという伝説も残されていたりもします。

「いじか物語」の話はさておき、私はいま、石鏡からは遠く離れた、山口県長門市の青海島にある「早川家」住宅にお邪魔しています。江戸時代には、代々「古式捕鯨」の網本として存続し、現在、建物は重要文化財に指定された建物です。

写真は、「重要文化財　早川家修理報告書」に掲載されていた写真をコピーさせていただいたもの（下の写真）ですが、船着き場が往時より随分小さくなっています。往時は江戸時代の浜の絵図（下の写真）を見ても分かるように、鯨三頭が悠々並ぶ、かなりな規模のものだったようです。この同じ浜から、勢子舟、樽舟、網船、



早川家住宅の内部と庭

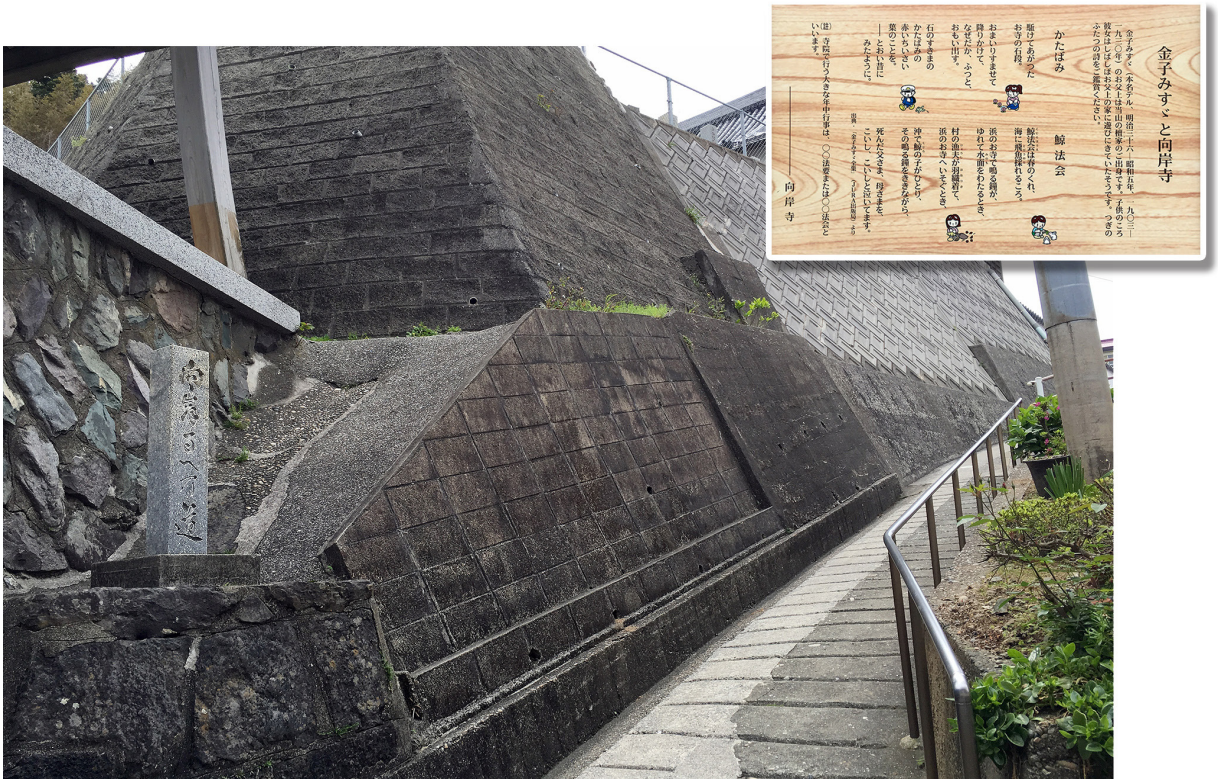
持左右舟（もっそうぶね）など十数艘からなる鯨船の船団が漕ぎ出していきました。

ちなみに早川家住宅は、江戸時代、通（かよい）に五軒あったといわれる鯨組の網本で、鯨屋敷と呼ばれ、全国でも数少ないとされる鯨漁家の遺構だといいます。この元鯨屋敷で、お茶とお菓子をいただきながら早川館長自ら通にある鯨墓や鯨の過去帳についてお話ししていただきました。

早川館長の話によると、通の漁師たちは、捕れた鯨の一頭一頭に人間同様「戒名」をつけ、手厚く祀ったと言います。また鯨墓は小高い丘の上に、未だ海を見ることなく亡くなった鯨の胎児、その思いが海に届くようにという計らいから建てられたとも、また、はるばる訪れた鯨の子孫たちが、先祖の墓参りができるよう、海から見える小高い丘に作られたとも言います。

いずれにせよ、通の漁師たちは、命のやり取りをする鯨たちを、人間に近い存在としてとらえていたようです。

早川家住宅を後にし、鯨墓へと向かい、そのあと鯨の過去帳があるという向岸寺を訪ねますが、この向岸寺で不思議な体験をしました。話せば不思議でも何でもないと笑われそうですが、まずは話を聞いてください。



向岸寺への坂道と金子みすゞの詩「かたばみ」

駆けてあがったお寺の石段。
おまいりすませて降りかけて、
なぜだか、ふっと、おもい出す。
石のすきまのかたばみの
赤いちいさい葉のことを。
――とおい昔にみたように。

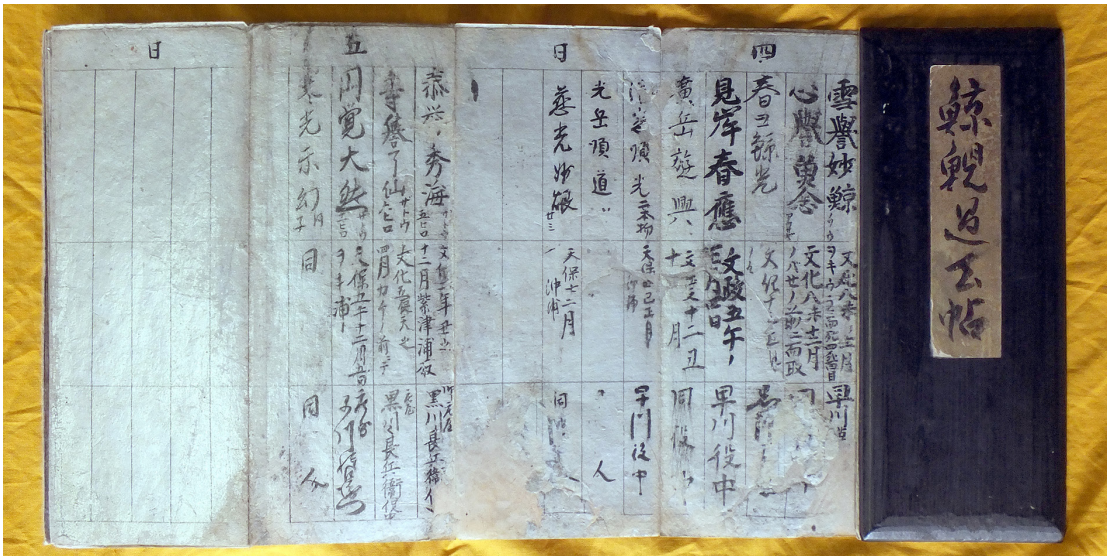
向岸寺への近道とされる石段の坂道。その坂道を上り詰めた左手のお寺の壁に、金子みすゞの詩が掲げられてありました。その詩の書かれたわきに、金子みすゞの父親は、この向岸寺の旦那だったことが紹介されていました。みすゞが、まだ小さなころは、この向岸寺にもよく遊びにきたことが、この詩からも窺えます。

今、上ってきたこの石段を、みすゞも幼少時に上り下りしていたのでしょう。

そんなことを考えながらお寺の門をくぐったときです。墓参りでしょうか、いきなり着物姿の上品な老女と出会いました。

「なにかお寺にご用?」

「鯨の過去帳が、このお寺にあると聞いてきたのですが……」



向岸寺に残された鯨児過去帖 (上)　鯨児の位牌／鯨墓のある清月庵 (下)

老婆というにはあまりに上品で、というより生活感がなく、浦で出会い話を交わしたおばさんたちとはあきらかに違った存在がそこにありました。お歳には違いないのですが、強いて言えば老婦人とでもいうのでしょうか、歳を感じさせない不思議なオーラを漂わせています。

「和尚さんは、もうすぐ出かけられるから急いだほうがいいわ。ついて行ってあげましょうか?」

私はお礼を言うと「一人で行ってみます」と、思いとは逆のことを口にしていました。

そのあと、彼女がどこへ行ったのか、お寺のほうへ向かったのか、出ていかれたのか、さっぱりと思い出せないのです。覚えているのは、住職から、「これから急ぎの用があるので、またにしてほしい」と断られたこと。「いきなり来ず前もって連絡してほしい」と言われたこと。

確かにこちらの落ち度には違いありません。仕方なく帰ろうとしたとき、どうしたわけか、住職が追いかけてきて「20 分だけ」と制限付きで「鯨の過去帳」の写真を撮らせてもらえることになりました。住職は「ライトはダメだからね」と念押しすると、本堂へ上がって待っているように言いのこし、勝手口へと消えていきました。

こうして、何とか写真は撮れたものの、どう考えても住職の心を変えさせたのは、先の老婦人が口をきいてくれたに違いありません。それにしても住職の心を変えさせるには、よほど力のある檀家か、それとも、今の住職は養子として迎えられたと聞いているので、養い親の婦人なのかもしれません?

答えが出ぬままに青海島を離れることになりましたが、バスが仙崎の町へ入ったとき、「金子みすゞ記念館」がオープンしたという案内が目に入り、次いで、その記念館の看板がバスの車窓に飛び込んできました。

ひょっとして――― ?!

そんなわけないよな、そんなバカな話は考えられないよな。

そう思いつつも、向岸寺で出会った夫人は、金子みすゞさんとつながりの深い人に違いない、お孫さんか、縁続きの人か?それとも本人?!

一瞬、そんな途方もない思いに落ち込んでいました。

次章では、沖縄は慶良間諸島の座間味に住む素敵なご夫婦を紹介します。

鯨墓のある清月庵から通の港を見下ろす。

長門市通で見られるマンホールの蓋（上）
青海島「鯨墓」への入り口（右）

バスの車窓から見た「金子みすゞ記念館」の案内表示

清月庵に飾られていた親子のくじら像

3. 座間味／慶良間ブルーの海とエスコート号

1. 古式捕鯨のあらまし

最近、金子みすゞさんの詩が英訳された本と出会いました。タイトルも、みすゞさんの「こだまかな」が英訳された「Are you an Echo? 」。

みすゞさんの心地よい言葉の響きが英語に置き換えられ、英語がからっきしダメな私ですが、そんな私でさえ声に出して読んでみたい本に仕上がっていました。その本の中に、「くじら法会」も掲載されていました。残念ながら「鯨捕り」については掲載されていませんでした。

「海の鳴る夜は　冬の夜は、栗を焼き焼き　聴きました。むかし、むかしの鯨捕り、ここのこの海、紫津(しづ)が浦。海は荒海、時季(とき)は冬、風に狂うは雪の花、雪と飛び交う銛の縄。岩も礫(こいし)もむらさきの、常は水さえむらさきの、岸さえ朱(あけ)に染むといふ。厚いどてらの重ね着で、舟の舳(みよし)に見て立つて、鯨弱ればたちまちに、ぱつと脱ぎすて素つ裸、さかまく波にをどり込む、むかし、むかしの漁師たち……」

あのワクワクするような語り口、英語ではどんな響きになるのだろうと、聞こえぬ英語の響きにもどかしさを覚えます。

英語はともかく「鯨捕り」に語られる昔の捕鯨とはどんなものだったのでしょう?

前章に紹介した長門市の「くじら資料館」に古式捕鯨の様子をビジュアル化したものが展示されています（16 ページ参照）。右

鯨の種類や動きを幟で知らせ指示します

（Chin Music Pr 発行「Are You an Echo?: The Lost Poetry of Misuzu Kaneko」から転載）

上および左下に幟(のぼり)が翻っているのがおわかりでしょうか。ここが「山見(やまみ)」と言われ、古式捕鯨の見張り台および司令塔になります。鯨が発見されるや、この「山見(やまみ)（見張り台)」に山旦那(やまだんな)（総司令官）や山見番の人たちが詰め、船団に幟で鯨の種類や、鯨の進路を伝え、網船(あみぶね)に網を張る位置を指図します。その張られた網へ目指して、舟べりを叩き、クジラの嫌う音を立てながら、勢子舟の船団が鯨を追い込んでいきます。網をかぶったクジラは動きが封じられますが、一度ではとてもかなわず、何度も何度も網が張られ、追い込みをかけ、銛(もり)を打ち込みクジラを弱らせていくのです。

弱り切っていよいよと見切ると、刃刺(はざ)しが、勢子舟(せこぶね)から海に飛び込み、絡めた網を手がかり足がかりに鯨の背によじ登ります。そして鼻切りをし、クジラが二度と海に潜れないようにしたうえで、鼻腔(びこう)に綱を通し、二艘の持左右舟(もっそうぶね)が鯨をはさみ、その綱に棒をわたしてクジラを港まで曳航することになります。

これが水軍方式による古式捕鯨のあらましです。捕鯨は舟軍(ふないくさ)です。水軍の末裔が、生活の糧に捕鯨を始めたところがほとんどです。

ところで、このような古式捕鯨のやり方をホエールウォッチングに取り入れているところがあります。

2．座間味のホエールウォッチング

本州から遠く離れた沖縄の慶良間諸島。その中心となる島が座間味島ですが、この座間味の海に 12 月から３月にかけてザトウクジラの群れが繁殖に訪れるのです。

下の写真の左端に見える船着きが座間味港です。那覇からの高速船やフェリーが入ってくる座間味島の玄関口になります。そして、この港の待合に座間味島ホエール

稲崎展望台でクジラの監視を続ける青年

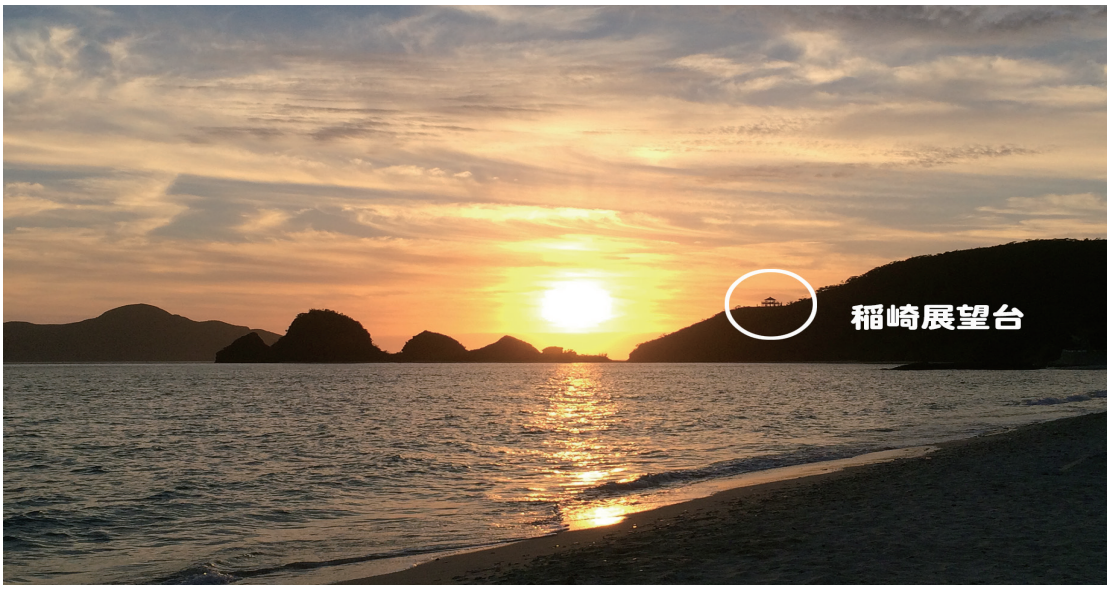
ウォッチング協会があり、ホエールウオッチングの際の司令所になります。

座間味島には、高月山展望台、チシ展望台、稲崎展望台の三つの展望台があり、この展望台がホエールウォッチングの季節にはクジラの見張り台になるわけです。その最も主要な見張り台が、この写真の「稲崎展望台」です。この見張り台から、監視員がクジラの動きを無線で司令所に知らせ、司令所からホーエールウォッチングの船に指示が出されるという寸法です。

港近くのレンタサイクルの店で、電動アシストの自転車を借り、稲崎展望台に見学にやってきました。展望台には若い青年が二人詰めていました。展望台に着いてしばらくするや、バケツの底が抜けたような大雨になりいっこうに止む気配がありません。鯨の見張りもこれまでとばかり、黄色のパーカーを着た青年を一人残し、見張り員の一人が引き上げていきました。

こちらも雨に降り込められ、身動きがとれず、黄色のパーカーの青年と二人きりになってしまいました。

青年はマグロの遠洋漁業の船に乗っていたと言います。それが、腰を痛め、船を下りることになり、その際、鯨の監視員にスカウトされたのだそうです。身の上



阿真ビーチから眺める夕陽と稲崎展望台

高月山展望台から座間味の海を眺める

話は止みましたが、雨は止む気配がなく、無線で今日の監視作業は中止の連絡が入りました。

青年は車に乗っていくようにすすめてくれましたが、自転車を置いていくわけにも行かず、「雨上がりを待って帰ります」と断りました。でも、この判断は間違っていました。雨はひどくなる一方、夕暮れも近づいてきます。山道に灯りもなく、切り立った崖のところもあります。濡れる心配より、命の心配です。結局、暗くなる前にと、雨の中を自転車を走らせる結果になりました。稲崎の岬を下りきって港に着いたときはずぶ濡れ状態。通りがかりの観光客にじろじろ見られながら、なんとかホテルへ帰り着いた次第です。

ところで座間味島には大きなホテルやリゾートがありません。個人経営のレストハウスやゲストハウス、民宿がほとんどです。エレベーターがあるホテルは慶良間ビーチホテルのみ。というのも座間味島民の生活を支えるのは、夏はマリンスポーツ、冬はザトウクジラのホエールウォッチングと、観光客だけが座間味島の支えなのです。

リゾートホテルの計画があっても、島民の反対で実現には漕ぎ着けません。それだけに泊まり客に対しても人情深いところがあって、毎年、同じ宿泊先を使うという旅行者も多いようです。

私などは、いろんな所を体験したいものですから、三度、座間味を訪問しましたが、それぞれ違う場所に泊まりました。最初の訪問時は、レストハウスあさぎ。このオーナーと厨房のシェフは、夕食時、料理ばかりでなく沖縄の歌や三線まで振る舞ってくれ、あげくはこちらまで踊らされる始末。

レストハウス「あさぎ」での夕食風景

楽しい思い出を作ってくれました。

二度目は、島でただ一つのエレベーターがあるという慶良間ビーチホテル。三度目は、素泊まりで安く泊まれるゲストハウスなかやまぐあ。どれも楽しい思い出です。

さて肝心の鯨の話に戻りますが、最初のホエールウォッチングで乗せてもらった船が、佐野船長が操船する「エスコート号」でした。ガイドは、佐野船長の奥さん佐野優美さんとバイトの回遊くん（僕が付けたニックネームです）。いずれも座間味島の出身ではないのです。佐野船長は鹿児島出身。奥さんの佐野優美さんは名古屋出身、バイトの回遊君は神奈川の出身。実にユニークな人たちなのです。

特に佐野船長にはお世話をかけっぱなしで、彼に無理を言って、三度目の座間味訪問で、ついにザトウクジラのメーティングポットを体験することができました。

座間味でのウォッチングは二年にわたって三度挑戦しましたが、最初の二回はザトウクジラは見ることが出来たものの、遠望するという感じで、クジラを体感するまでには至りませんでした。

3. 佐野船長夫妻

佐野船長の奥さん優美さんは言います。

「私たちはホエールウォッチングをご案内する上で、座間味を訪れた方々に、ありのままを見てほしいと思っています。ウォッチングの船を出していると、どうしてもお客様に、派手なクジラのアクションを見せてあげたいと思ってしまい無理をしがちになります。

でもクジラは自然です。いつもいつも、派手な動きに出あえるとは限らないのです。クジラを見られないときだってあります。自然を演出するのでなく、ありのままを見てほしい、ありのままを感じてほしい、そう思って皆様をご案内しています。」

佐野船長夫妻の経営する「ネイチャーランド・カヤック」と佐野優美さん

たしかにホエールウォッチングという時間は、クジラに出会えようが出会えまいが、茫々（ぼうぼう）たる海原に船をはしらせ、太陽を感じ、風を感じ、海を感じ、自然と一体になる、そんな至福感に包まれる。何よりの贅沢（ぜいたく）な時間だと思います。

しかしです。僕は、クジラやイルカに取材した「ものがたり」を生み出したいので

左からエスコート号の佐野船長、同クルーの回遊君、右がホエールウォッチング協会の大坪さん

す。クジラを間近に見、クジラの息吹きを感じ、クジラを体感したいのです。

こんな次第ですから、佐野船長には無理を言って、三回目のウォッチングのときは、前日が土砂降りの雨で当日もウォッチングがあるかどうかも分からない状態でしたが、佐野船長は、通常のウォッチングよりも早い時間帯に、乗客は僕一人という状態で船を出してくれました。

乗組員は、佐野船長のほかに「回遊くん」も乗り組んでくれました。

ところで、僕が彼に「回遊くん」と名付けた経緯ですが、彼は神奈川の出身なんですが、クジラが大好きで、冬はこの座間味へ来てホエールウォッチングの船に乗り組み、シーズンが終わると、ザトウクジラと同じように北の海を目指し沖縄を離れます。

北の海ってどこかって？

―――― 知床です。

冬は沖縄の座間味でウォッチング船に乗り組みザトウクジラを追いかけ、夏は知床でヒグマやマッコウクジラのガイドをしているという寸法です。まるでザトウクジラの回遊そのものです。

これが、僕が彼を「回遊くん」と呼ぶ所以であります。

先に座間味の宿泊事情についてお話し

佐野船長が発見したザトウクジラ「あゆみ」ちゃん (0 歳) のテール

しましたように、座間味島では土地者以外が島で働くのをいやがります。にもかかわらずです。僕が座間味へ来て関わった人たちは、全部が全部と言っていいほど、内地の人間が多いのです。

慶良間ブルーの海とザトウクジラ
（写真提供 Nature Land KAYAKS）

見るからに沖縄の人って感じの佐野船長ですが、実は鹿児島県人であります。琉球大学を出て一般会社へ就職しましたが、大学時代、シーカヤックにはまり、会社を辞めて座間味の「ハートランド」というマリンショップで働き出しました。そこへ同じく奥さんの優美さんが、この店の募集に応募してやってきたという次第です。

優美さんは名古屋でバスガイドのお仕事をされていましたが、慶良間の海にあこがれ、ダイビングの資格を取って座間味に渡ってきたと言います。そこで佐野さんと知り合い結婚の運びとなりました。

その後、お二人で独立し「ネーチャーランド・カヤックス」のお店を持たれるようになり、ホエールウォッチングのための船「エスコート号」も持つことができるようになったと言います。

優美さんに、ザトウクジラに関し、何かおもしろい話題がないかせっついてみました。すると言ってみるものですね。とてつもなく素敵なエピソードをお聞かせいただくことになりました。

お二人には「あゆみちゃん」というお子さんがおられますが、そのあゆみちゃんが生まれるのと前後して、ご主人の佐野船長が、座間味の海で、ザトウクジラの赤ちゃん誕生を目撃されたのです。

このクジラの赤ちゃんにも「あゆみ」という名前が付けられました。

ところで、このクジラの「あゆみちゃん」には大きな特徴がありました。背びれがなくツルンとしているのです。ですから、「あゆみ」が北の海から座間味の海に帰ってくるとすぐに分かるわけです。

でも、なぜか３年続けて帰らないときがありました。それがひょっこり帰ってきたときは、座間味の人たちが「あゆみが帰っ

てきた」と大喜びになったということです。

座間味の人たちがザトウクジラに向ける温かい思いが感じられる、本当に素敵なエピソードです。

さて座間味にもうひとり、忘れてならない名古屋人がいます。

座間味ホエールウォッチング協会立ち上げ時からの猛者、大坪弘和さん。彼はクジラ好きが昂じて座間味島に渡り、ここで様々な仕事を経ながら、ホエールウォッチング協会の立ち上げに参画した人物です。座間味ホエールウォッチング協会の責任者であるとともに、日本クジライルカウォッチング協議会の副会長でもあります。

役者が出そろったところで、いよいよ僕の座間味での三度目のウォッチングについて話させていただきます。

もったいつけるなって――!?

4．メイティングポッド

三度目の座間味、今日が最終日となります。

昨日はレンタサイクルで稲崎の展望台まで出かけたものの、午後からの大雨でずぶ濡れ状態。

実は、あんな大雨にならなければ、昨夕４時出船のエスコート号に乗せてもらうことになっていたのですが、昨夕のホエールウォッチングは中止となり、僕は今日の10 時に出るクィーン座間味に乗船して那覇へ帰ることになっています。それを佐野船長の計らいで、早朝7時に、臨時でエスコート号を出してもらえることになりました。これならホエールウォッチング終了後、予定通り、座間味 10 時発のクイーン座間味で、そのまま那覇港を目指すことができ

ます。何ともお礼の言いようがありません。

とはいえ、昨夜の荒天でウォッチング船が出せるのかどうかが、まず心配の種。さらにエスコート号が無事出船できたとしても、ザトウクジラと出会えるかも、これまた心配の種。

港で佐野船長と落ち合うや、船長からのゴーサイン！　しかも早朝から回遊くんが稲崎展望台へ出張りザトウクジラの位置を確認してくれているといいます。

その回遊くんが稲崎から車で駆けつけ、いよいよ出船の運びとなりました。

港を出て 10 分近く走ったでしょうか、早くもザトウクジラのブロー（潮吹き）発見！　現場へ駆けつけます。エンジンを止めるや、クジラの「キリキリキリッ」というクリック音や「ウォーンッ、ウォーンッ」という啼き声が海中から響いてきます。

一頭ではありません。船長の話では二頭のオスと一頭のメス、それに子クジラのあわせて四頭がいるといいます。

ザトウクジラは、一夫一婦制ではありません。一頭のメスがめでたく出産を終えると、続いて、そのメスの二番手のハズバンド（エスコートという）の座をめぐってオス通しの争いが起こります。その争いの現場をメイティングポッドと呼ぶのですが、めでたくエスコートの座を獲得したオスクジラは、このメスと結ばれるまで、この親子を助けていく役割を担うことになる訳です。

メイティングポッドでは、船がそばにいようが関係なしで、オス同士、何も目に入らないかのように争いに夢中となります。派手なアクションが続くので、ホエールウォッチングの最大の見せ場なのですが、こんな現場に出くわすのは稀（まれ）と言ってもよ

メイティングポッドのただ中へ入ったエスコート号

新しいカップル誕生

負けた一頭が遠ざかっていきます

いらしいのです。

「桐生さんの思いの強さが呼び寄せたんでしょうね！」

佐野船長がうれしいことを言ってくれますが、こちらはそれどころではありません。吠え声、ブロー、船の揺れ。騒然とした中でクジラがどこへ上がってくるのか。右に出たかと思うと、次は左にと、間断なくクジラが荒れ回り動き回ります。この際、言葉は不要で、まずは写真を見ていただくことにしましょう。

写真でも何が何だか分かりませんが、ともかく激しいことだけはお分かりいただけたかと思います。

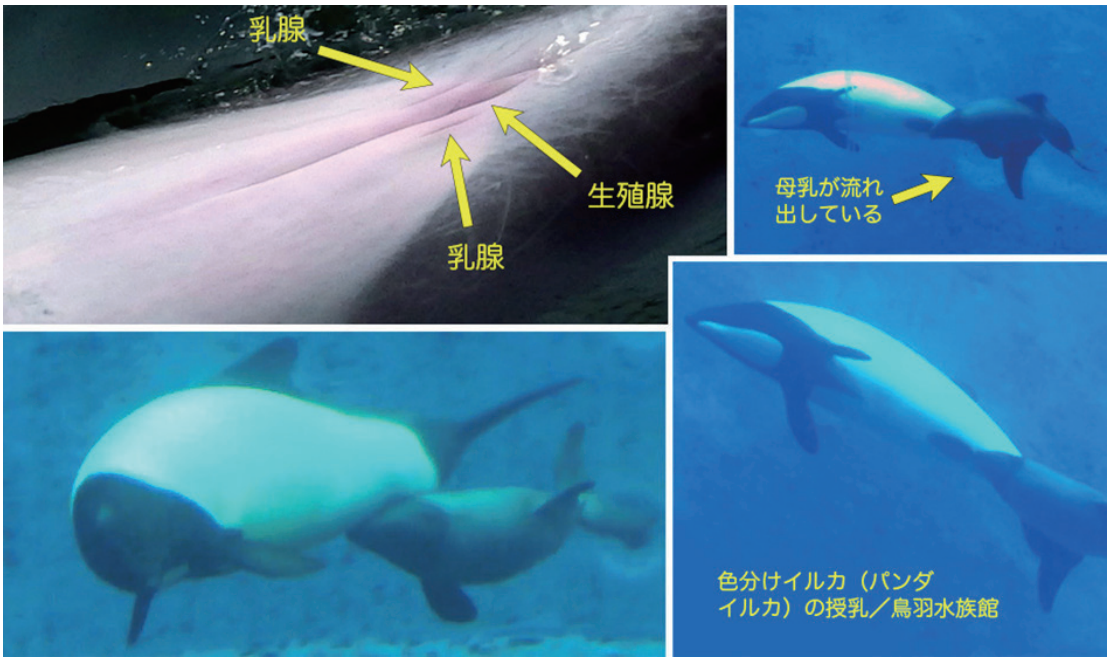
最後の写真は、負けた一頭が遠ざかっていくところですが、僕も、この航海を終えて那覇へ帰り、そこからさらに大阪へと帰ることになります。

三度の座間味滞在中、出会った方々にはご迷惑のかけっぱなしでお礼の言葉もありません。次はいつ座間味へ訪問できるか分かりませんが、またよろしくお願いいたします。

最後に、僕のわがままに最後まで付き合い、ザトウクジラを体感するという大きな機会を作っていただいた佐野船長および奥さん、クルーの回遊くん、本当にありがとうございました。

Nature Land Kayaks（佐野船長夫妻）提供の、座間味のザトウクジラ

4. 壱岐辰の島／イルカ受難とケイトさんの決断



鳥羽水族館でたまたま見かけた色分けイルカの授乳風景

動物に育てられたり、動物と一緒に暮らしたりした人間の子供の話をよく耳にします。実話だったり、お話しだったりしますが、そのいずれもが猿だったり、オオカミだったり、ヒョウだったりと陸上のほ乳類に限られています。変わったところではニワトリ小屋に閉じ込められ、ニワトリと一緒に育った子供の話が紹介されたりもしました。

しかし、海洋生物となるとなかなか難しいものがあります。ザトウクジラやイルカは「母性愛」が人間以上に強い動物だと言われています。以前にも紹介しましたように、子クジラをおとりに母クジラを仕留めるという捕鯨の方法があるくらいで、母親クジラは自分の生命が危険にさらされても、決して子供のそばを離れようとしません。母性愛ではありませんが、ザトウクジラは、危険に陥った違った種類の生きものさえ助けようとします。タイガーシャークに囲まれた水中カメラマンを、ザトウクジラが助けた話。シャチに狙われたコククジラの子供を、ザトウクジラが助けた話。シャチに襲われたアザラシをザトウクジラが助け、胸びれに乗せて海岸まで運んだ話。

しかし、如何に同じ「ほ乳類」とはいえ、

水中で暮らす彼らが人間の子供を育てられるはずはありません。

「イルカは人間の赤ちゃんにおっぱいをあげられるか？」

最終章に掲載しています「石鏡ものがたり」では、刃刺しの銛吉が、自ら定めた禁を破り、子クジラをおとりに母親クジラを仕留めます。その直後に起こった宝永地震と大津波によって石鏡（いじか）の浦は壊滅しますが、母親クジラを殺した後悔に苛まれていた刃刺しの銛吉には、この地震も、津波も、自分の過ちにあたえられた罰のように感じてしまいます。その矢先に子供をかばって死んだ母親の遺がいを見つけてしまうのです。津波で崩壊した浦で、自分には育てられないと分かっていながら、銛吉は、母親の遺がいが発する思いに呼び止められ、その思いに背けず、子供を拾い上げてしまいます。自分が殺した母クジラに、この子どもを託されたように感じたからなのです。

乳児を連れ、小舟で石鏡の浦を離れる銛吉。小舟の上で腹をすかせ泣き叫ぶ子供。そして、その声に惹かれるようにしてイルカの母親があらわれ小舟の周りを回り出します。

イルカは海で暮らすほ乳類です。したがって、えら呼吸でなく、肺呼吸をするわけで、酸素の取り入れ口である鼻が頭の上に着いています。

イルカは水中で出産しますが、子供を産むと、すぐに、その子を下から持ち上げ海面へ押し上げます。呼吸することを教えるのです。授乳は水の中です。左上の写真は、和歌山マリンランドのバンドーイルカさんに、おなかを見せてもらったときのものです。下腹のあたりに中央に生殖腺があり性器が納められています。メスの場合は、その左右横手に乳腺があり、おっぱいが納められています。速く泳ぐため、邪魔なものはみんな内部に納められています。

子どもにおっぱいを飲ませるときは、子どもが舌先を丸め、お母さんイルカの先ほどの溝に突っ込み、おっぱいを、その舌先にとらえます。するとお母さんイルカは、ミルクを搾るように押しだすという寸法です。

冒頭の写真は、鳥羽の水族館でたまたま見かけた色分けイルカの授乳風景です。泳ぎながら子どもイルカが上手におっぱいを飲んでいます。そのとき、勢いよく出たおっぱいが口からあふれ、白いもやのように水中を漂っています。

◇

さて銛吉と母性愛の強いお母さんイルカが、いかにしてお腹をすかせた人間の赤ちゃんにおっぱいを与えるかは「石鏡ものがたり」を読んでいただくとして、そのイ

ルカと人間との関係が悪化し、1000 頭近いイルカが、一時に殺戮されるという事件が壱岐で起こりました。

俗に「壱岐イルカ事件」と呼ばれる一件です。では、その事件の起こった「壱岐郡・辰の島」という無人島へ、皆さんをご案内させていただきましょう。

事件の顛末（てんまつ）はこうです。

今手元に勝本漁港の石井敏夫さんが書かれた「勝本港の『みなと文化』」という小冊子があります。勝本漁港と言えば、まさに「壱岐イルカ事件」の当事者そのものといった存在。右の写真も、その「勝本港の『みなと文化』」から転載させていただきました。

まずは事件の顛末を、この小冊子から一部抜粋させていただきます。

「イルカが壱岐海区で急増し、漁業被害が続発したのは昭和 40 年頃からである。当時イルカの生態調査が行なわれ、その結果２月～３月にかけて壱岐近海には 30 万頭のイルカが回遊していると発表された。イルカの被害というのは、漁船が操業している漁場にイルカが回遊して来ると魚群は逃げてしまい、釣り上げ途中の魚は横取りされ、漁具は傷められ、イルカが漁場に滞在している間は漁獲ゼロの毎日が続く。

そこで漁業者は団結して、イルカが多量

【昭和 53 年壱岐対馬漁民決起大会】

【昭和 53 年イルカ大量捕獲風景】

に勝本近海に近づいた時には、約 500 隻の漁船が操業中止して円陣を幾重にも描き、船腹に取り付けた鉄筒の発音器をハンマーで叩きながら、海岸に追い込む捕獲作戦を行なうが、当初は途中で逃げられて失敗の連続であった。その後、水中花火が考案されイルカの群れの一部を追い込むことに成功した。

昭和 53 年１回で約 1,000 頭のイルカを追い込んだ時、動物愛護団体の外国人がきてイルカ囲い網を切断し、一部のイルカを逃がした事件もあった。

現在では、極少量のイルカが現れる程度で、あれ程いたイルカが何処で回遊しているのか七不思議の現象である。」

イルカ事件のあった無人島・辰の島の砂浜。夏は海水浴場としてにぎわっている。

文中、「動物愛護団体の外国人」というのが、もう一方の当事者「デクスター・ロンドン・ケイト」さん。彼はハワイのヒロ市から、「動物の権利擁護」という新しい倫理観をひっさげてやってきました。

「動物愛護」とは違います。「動物愛護」には人間優位の姿勢が示されています。しかし「動物の権利擁護」とくると、動物に対しても人間と同じ権利を認め、それを擁護していくという姿勢となり、当時は（今も）あまり知られていない概念でした。それだけにケイト氏の言い分は、勝本漁民には、突拍子もない言いがかりに聞こえたことでしょう。

「ああ、あいつね、あの時、オレは漁協の青年部長だったんだ。あいつのおかげで大迷惑だ。まったく気でも違っていたんじゃないのかね。」（川端裕人「イルカと泳ぎ、イルカを食べる」）

当時、壱岐の勝本町ではブリ漁、イカ漁が盛んでしたが、イルカの回遊時期になると、イルカがやってくるだけで、イカもブリも漁場から姿を消してしまいます。それればかりか夜中に仕掛けたイカ釣りの仕掛け、そこにかかった獲物を、人間が回収するより早く、イルカの群れが食い散らかしてしまいます。

これでは勝本の漁民の生活が成り立たなくなります。そこでイルカを駆除すべく、和歌山県の太地や静岡県の富戸（ふと）の漁民に教えを請い、追い込み漁が開始されるに至りました。

湾がくびれ一番狭くなっている箇所。イルカを追い込んだ後、ここから対岸まで網が張られた。

ではケイトさんの言い分に耳を傾けてみましょう。

①壱岐の漁師たちが自分のものだとする漁場は、何千年もの間、イルカのエサとり場だった。人間が後からやってきて、イルカを邪魔者扱いすることはおかしい。

②漁獲量の減少はイルカのせいではなく、漁場自体が乱獲により貧しい海域になってきている。

③イルカは利口な動物で、人間と共生することが可能。うまくリードすれば、イルカも人間も、モーリタニア沿岸の例にあるように共同作業をして、ともに獲物を得ることが可能となる。

一時は漁師たちもケイトの熱意に動かされ、イルカとの共同作業に臨むべく船を出しましたが、当のイルカたちがその時はおらず、二度の試みも結局は失敗に終わりました。

残された最後の手段とばかり、ケイトは、イカ漁、ブリ漁に代わる「養殖漁業の育成計画」や、痩せた漁場を復活させるため「ブリ資源の増殖計画」などを提言しますが、こと既に遅く、最後に壱岐を訪問したときは、すでにイルカの追い込み漁が開始されていたのです。

辰の島の浜辺には 2000 万円以上する巨大なイルカ粉砕機が据え付けられ、既に稼働を始め、壱岐の海はイルカの血で真っ赤に染まったといわれています。

デクスター・ロンドン・ケイトさんについては、グリーンピースの運動家というこ

デクスター・ケイト氏が壱岐に滞在中、宿泊した「ふくや荘」

と以外、あまり分かっていません。

壱岐イルカ事件当時（1980 年）は 36 才と言いますから、生きておられれば、今年で 74 才になられるのでしょうが、事件後、ダイビングの事故で亡くなられたと聞いています。

ケイトさんが最後に壱岐へ来られたときは、奥さん子供連れで、壱岐の「ふくや荘」に泊まられたようです。僕も、壱岐の辰の島取材のおり、辰の島への渡船や遊覧船のガイドをしておられるMさんから、ケイトさんが泊まられたのが「ふくや荘」だということを教えていただきました。

辰の島取材の後、その足でふくや荘を訪問させていただいたのですが、あいにく、この日は島をあげての運動会の日、旅館はもぬけのカラという状態。近所の方が見かねて「呼んできてあげましょうか?」と、親切に声をかけていただいたのですが、せっかくのお孫さんの運動会を邪魔する訳にもいかずお断りした次第です。

ところで、辰の島取材に当たっては、壱岐市役所観光課を通して「当時の模様を知る人に」ということで取材の申込みをしていました。取材当日は、今は勝本町漁港で観光船の船長をしておられる方が話してくださることになっていたのですが、やはりお孫さんの運動会ということで、辰の島へ渡る船が出るまでの時間、大急ぎで次のようなことを話してくれました。

「イルカを追い込んだのは昭和 52 年と 53 年のことで、2000 頭ちかくを辰の島

辰の島へは、壱岐の勝本漁港を出港して 10 分あまりで到着。

海水浴場に追い込んで網で囲ったんですよ。それを聞いた愛護団体のケイトという人が夜中に網を切って約 300 頭ほどを逃がし、それが裁判沙汰になったんですよね。

でも、これが爆発したのは一日や二日のことではないんですよ。何年も何年もかかって、あげくの果ての爆発なんですよ。

ここ勝本はイカやブリを獲って生活しておったんですよ。それをイルカが食べに来るんですよね。だから何年も何年も、どうしたらよいか、どうしたらよいかと悩んだあげく、仕方なく、昭和 52 年と昭和 53 年に追い込みに踏み切ったわけです。

殺生は、しとうなかとですもん、どうしても生活がかかっとりますもんね。

イカ漁というのは、油代が一日何万もかかるんですよ。イルカは頭が良いけん、集魚灯を焚いて、高い燃料代つこうて、イカが寄ってきたと思う時分にやってくるですもんね。そうなると、その日はまるまる赤字――それが一年や二年やないんです。何年も何年も続いてきたとですよ。悩んだあげくに殺すことになったとです。」

――――――――――

「お客さん、辰の島へ渡る船が出るけん……」

女性の受付けの方が、船の出航を知らせに来てくれた。このあとは、船のガイドをしている M さんという男性が、船長に引き続き、当時の話や案内をしてくれることになった。

辰の島へは、壱岐の勝本漁港を出港し

上の写真はケイトさんが舟を出した波止場／下の写真は追い込み網の張られた場所

て10分あまりで到着。

イルカの大量屠殺で問題となった壱岐の無人島、辰の島へ到着です。

Mさんは、事件当時は中学生で、イルカの屠殺にアルバイトとして駆り出された一人です。今から40年近く前の話ですが、このアルバイト、時給800円の高額バイトだったそうです。

そのMさんの言うには、

「浜辺に並べられたイルカが涙を流すんよ。」

さらに聞くと、涙を流すだけでなく、声を上げて泣くのだともいいます。

「叫ぶような、助けを求めているような、あの声を聞くと切のうてたまらん……」

Mさんの話では、今もときどき沖から2～3マイルの所にイルカの群れがあらわれるときがあるそうです。

「そのときはどうするのですか」と聞いてみると、「爆弾で追い払うんよ！　殺すんやないよ、追っ払うんじゃ」との答えが返ってきました。

あとで調べたところでは、これは「爆弾」ではなく「爆竹」で追っ払っているということらしいです。

このあと、迎えの船は、辰の島周辺の蒼く澄み切った海を遊覧し、勝本漁港へと帰ることとなりました。

さて、辰の島の取材を終えるに当たって、最後に、デクスター・ケイトさんの人となりを「ふくや荘」のご主人や奥さんの証言を紹介しておきたいと思います。僕自

事件現場で、当時のことをつらそうに話してくれるMさん

身は、ふくや荘の方々とは、ついにお会いすることができませんでしたが、川端裕人さんの著書「イルカと泳ぎ、イルカを食べる」（2010 年刊）から引用させていただきます。

デクスター・ケイトはひょろりとした長身の白人で、髪を後ろに束ねたヒッピー風の風貌だった。物腰が柔らかく優しい目をしていた。肉食をきらい、魚を喜んで食べた。「動物好きで、穏やかな人だった。子どもにも人気があった。息子ともよく遊んでくれた。」

ケイトの最後の壱岐訪問の際、例の事件が起こるまでの一週間、彼は毎日何をするでもなく過ごしていた。つれづれなるままに、近所の子どもたちとよく遊んだ。イルカが出てくる映画を見せてくれて、子どもたちが喜んだり、宿の主人もおばさんも、動物が好きでわざわざここまでやってきた人として、好意すら抱いていたという。

ある朝、漁協から電話がかかってきた。「そっちのガイジンさんどうなってる。いるか?」と聞かれ、「ああ、いるよ」と答えた。朝食前の時間である。当然、いると思ったのだという。

ところが部屋を訪ねてみると、奥さんと子どもしかいない。言葉が通じないから分からないが、奥さんもなにか慌てている。そうこうするうちに、刑事がやってくるやら、漁協の幹部がやってくるやらで、大変なことになった。

前夜のうちにケイトは単身、辰ノ島に渡ってイルカの囲い網を切ってしまったというのだ。

ケイトは、今までの努力がすべて無駄だったと悟りました。

後は実力行使あるのみ。ケイトは、せめて今囲い込まれているイルカだけでも救おうと、皆が寝静まるのを待ってゴムボートで辰の島を目指したのです。

ケイトは、無事、囲い込みの網は切ったものの、折からの春の嵐に遭遇しゴムボートでは勝本へ戻れなくなってしまいました。そこでケイトは、網を切り、イルカたちを逃がすだけでなく、今度は浜にあげられたイルカたちを、一頭一頭引きずり、海へ戻す作業を始めたのです。

夜が明けて、イルカの処理作業に戻ってきた漁師たちは、網を切り、浜のイルカを引きずるようにして海へ戻しているケイトを見つけたのでした。

ケイトは「威力業務妨害」の罪で逮捕され、これより6回にわたって「動物の権利」が法廷で論議されることになりました。しかし、ケイトの思いは無視され、結局、ケイトの国外追放で、壱岐イルカ事件は幕を閉じたのです。

後日談ですが、漁獲量減少の張本人とされたイルカも、この海域には来なくなったのですが、それでも漁獲量が回復することはありませんでした。イルカの食害があったには違いありませんが、それ以上に乱獲による資源の枯渇が、問題の根本にあったようです。

5. 石川県　能登島／イルカのカップルとその冒険

NHK「ニッポンの里山 イルカが暮らす里の入江」

NHK の朝の番組に全国各地の里山を紹介する「ニッポンの里山」という長寿番組があります（本シリーズは 2019 年に一旦終了しましたが、2020 年度より『ニッポンの里山　ふるさとの絶景に出会う旅』としてアンコール放送され、今も放送中）。そのシリーズの中で「海の里山」として紹介された二つの場所、それが熊本県の天草と石川県の能登島です。

2013 年 1 月 28 日に放送された「イルカと生きる里の海」（熊本県天草市）と、2014 年 9 月 29 日放送された「イルカが暮らす里の入り江」（石川県七尾市）が、それです。

そして、この二つの地域をつないでいるのが、実は、天草のミナミバンドウイルカなのです。

ところで、石川県の能登島にイルカが住み着いていると言えば、本来は「カマイルカ」のことだと思ってしまいます。

ところが、この北の海に住み着いているのは意外なことに「ミナミバンドーイルカ」の群れなのです。

ミナミバンドーイルカについては、従来、バンドーイルカの亜種であるとされていましたが、2000 年の国際捕鯨委員会（IWC）科学委員会により別の種とされました。

そして、その生息地の北限が、石川県七尾市能登島の七尾湾ということになるそうです。

大克丸と大橋克礼船長（石川県七尾市能登島）

さらに驚くことには、この七尾湾のイルカ、もとは天草沖合に 2000 頭以上のミナミバンドーイルカが暮らしていますが、その中の 2 頭のつがいが移り住んだものだといわれています。

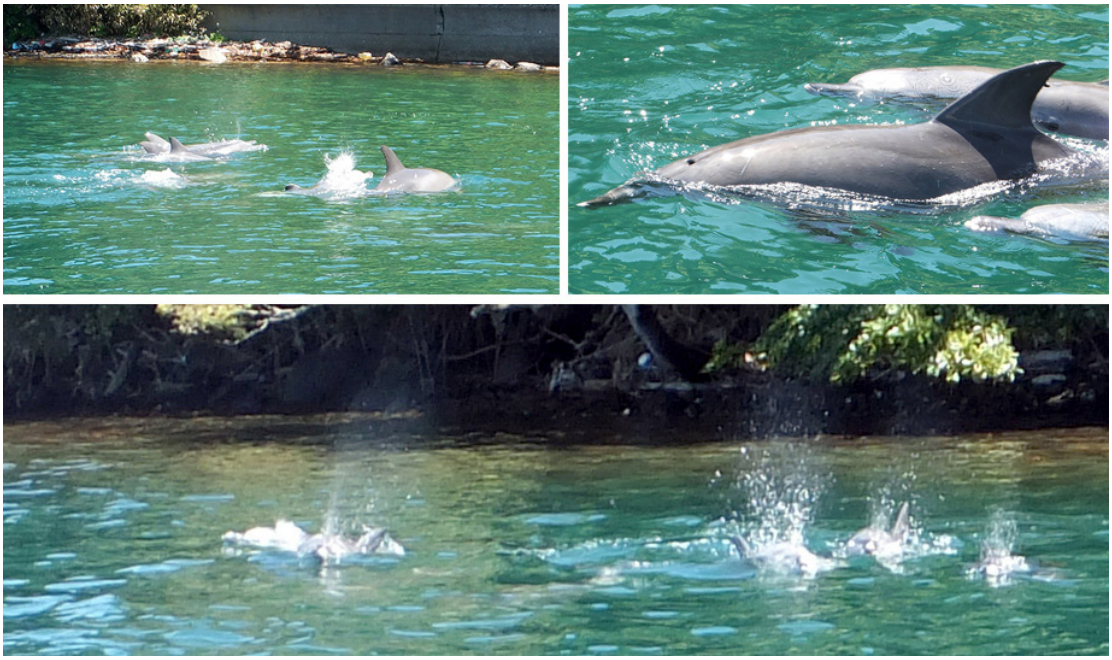
ちなみに天草市五和町から七尾市能登島まで、およそ 1000 キロメートル。その距離を 2 頭のイルカ夫婦が北上し、能登島で新たな群れの始祖となったという次第です。上の写真は、僕が能登島に、南バンドーイルカの取材に訪れた際（2015 年）、ウォッチングの船を出してくれた大橋克礼船長と、その持ち舟・大克丸です。大橋船長は、もともとはこの能登島で郵便局に勤めておられました。それが定年退職後、退職金で、この大克丸を手に入れ、

遥かに月山を望む

イルカのウォッチングと釣りイカダのレンタルを生業とするようになりました。大橋船長は、ミナミバンドーイルカが、この七尾湾に住み着くようになってこのかた、イルカ夫婦が新たな群れをつくっていく変遷を垣間見てこられた方なのです。

その大橋船長に、「本当に天草のバンドーイルカなのですか」と尋ねてみました。

船長が言うには、七尾湾にイルカが住み



沖合でなく沿岸部まできて遊ぶミナミバンドーイルカの群れ

着くようになって騒がれ出した頃、長崎大学の水産学部の先生が調べに来られ、間違いなく天草のイルカだと断定したというのです。というのも、長崎大学水産学部では、長年、天草のミナミバンドーイルカの個体識別をおこなっており、背びれや尾びれの形、胴体の傷や特徴から、天草のイルカは、ほぼ特定できるようになっているのだと言うことです。

さて、このイルカのことで、「まだ面白いことが……」というか、わからないことがあります。

それはイルカ社会がメス社会で、一夫一婦制ではないということです。イルカのオスは種付けをするだけで群れには残りません。そうして生まれてくる子も、メスならグループに残りますが、オスの子は成長すると群れを離れていきます。

こうしてイルカグループは、大お婆さんをリーダーとして、その娘、そのまた娘とが連なりグループを形成していくというわけです。グループに子供が生まれると、メス同士が助け合って育てていきます。もし子育て中の親子イルカを見ることがあっても、二頭のイルカは夫婦でなく、お母さんイルカとそれを助けるおばさんイルカというわけです。

それが意外なことに、天草から遠く離れ、石川県は能登島の七尾湾まで旅をしたイルカ夫婦なのですが、大橋船長が言うに、今も夫婦で、オスはグループに残っていると言うのです。七尾湾で新たに生まれ

能登島の沖合にミナミバンドーイルカの新しい群れが育ちつつある

た子供たちは、ルール通りオスの子は群れを離れていっているようです。ところが、群れの始原の二頭は、今もオスがグループにとどまっていると言うことです。

ことの真偽を確かめるべく、長崎大学水産学部の天野教授へ電話を入れたところ、大橋船長の話は間違いなさそうです。不思議に思い「どうしてこんなことが起こるんですか？　イルカ社会はメス社会で、オスは離れていくと、どのイルカの解説書にも書かれてあるんですが……」

「そんなことを言うても、現にあるんやからしょうがないやろ！」

電話口の向こうから響いてくる生きのいい関西弁。なんでも、この先生、関西出身だということでした。

関西弁の詮索はともかく、まさに「現にあるんやからしょうがない」訳で、これは当事者である能登島のミナミバンドーイルカ夫婦に訊いてみるより仕方がなさそうです。

でも、イルカが話せたら、いったいどんなロマンスを語ってくれるのでしょう？

さて次の章は、この七尾湾のイルカ夫婦のふるさと「天草」を紹介させていただきます。

「石川」と「熊本」、1000 キロ離れた北と南の二つの海域には、いったい、どのような共通点があるのでしょうか？　人間と自然、その関係に新たな視点を見つけることが出来るのかも知れません。

6. 熊本県　天草／ミナミバンドーイルカ

天草通詞島沿岸部を泳ぐミナミバンドーイルカ

私たちが普通イルカと言って、水族館やレジャー施設で出会う種類はバンドーイルカが圧倒的に多いのです。というのも、バンドーイルカが、もっとも頭が良く人にも良く慣れる性質があると言われているからです。一頃、映画「ザ・コーブ」が日本でも公開され、これによって和歌山県太地のイルカ追い込み漁が問題になりましたが、その中で、入江に追い込まれたイルカを、水族館やレジャー施設の学芸員の方が選んで買い付けていくシーンがありました。 これは何を選んでいるかというと、バンドーイルカのメスを選んでいるのです。これもバンドーイルカ、特にメスのバンドーイルカが、頭が良く、人にも良く慣れ、調教しやすいと言われているためです。

イルカブームの火付け役となったアメリカのテレビドラマ「わんぱくフリッパー」（1966 年～ 1968 年にかけて放映）の主人公もバンドーイルカでした。

このようにバンドーイルカは、我々にもっともなじみの深いイルカなのですが、では、今ここで取り上げているミナミバンドーイルカとはどう違うのでしょうか？

前回でも触れましたように、2000 年までは、ミナミバンドーイルカもバンドーイルカの亜種と思われていました。それほどよく似ているわけで、我々素人には見分

産交バス旧二江小学校前を海のほうへ下っていくとイルカウォッチング発着所に着く

けがつきませんし、どちらでも良いようにも思えてしまいます。

でも、もうちょっと頑張って、その違いを勉強しておきましょう。

まず大きさですが、バンドーイルカは成長して約４m前後になると言われていますが、ミナミバンドーイルカは約 2.5 m前後、つまりバンドーイルカよりも小ぶりな訳です。

ついで吻（ふん）――これは動物の体において、口あるいはその周辺が前方へ突出している部分を指して言う言葉ですが――これが、どちらも突き出しているのですが、バンドーイルカのほうが丸っぽくてぽっちゃりしている感じがあります。これに対しミナミバンドーイルカは、ほっそり長く突き出しているような感じなのです。

ほかに外面的な特徴として、ミナミバンドーイルカは、成長すると腹部にまだら模様ができると言われています。これは僕も見たことがないし、船からのウォッチングでは確認することが難しいと思います。ただ背びれが、バンドーイルカが丸みを帯びた三角形なのに対し、ミナミバンドーイルカはとがった三角形に近いと言われています。うーん、これも個体差があって、実際には背びれだけで判断は難しいと思います。総合的に判断するしかないと思います。

（ミナミバンドーイルカの群れが沿岸部にいることがよく分かる）

さて最後に、これが最も重要な違いなのですが、住む場所が違うのです。

バンドーイルカが沖合を長距離移動しているのに対し、ミナミバンドーイルカは、沿岸部に群れをなして住み着く性質があります。

日本での分布は、伊豆諸島、なかでも御蔵島の野生イルカ、それに石川県の七尾湾、そして今回行く天草の五和町通詞島の沿岸が最も有名ということになるでしょうか。

さて、今回は熊本から天草までを長距離バスで向かうことにしました。海辺の景色を楽しみながら約２時間半、バスはやがて、終点の本渡バスセンターへと到着します。ここからは富岡港行き路線バスに乗り換えますが、本数が少ないので事前に調べておいた方がよいでしょう。無事バスに乗れましたら「旧二江小学校前」で下車し、ここから海を目指して下っていくと約５分でイルカウォッチング発着所に着きます。

発着所には、「平成 27 年度イルカの絵コンクール」の入賞作品が展示されていま

（入江船長と天神丸／出船準備のクルーたち）

出船するや、たちまち現れたミナミバンドーイルカの群れ

した。幼稚園、保育園の子供たちが描いたイルカの絵ばかり。ウォチング船が出るまでの待ち時間、一枚一枚の絵を眺めていますと、天草の「イルカ」と「人」の関係が端的に表れているように感じました。

イルカ（自然）と獲物を取り合うのでなく、イルカ（自然）と共に生きている、そんな感じを受けるのです。

そうこうするうち、もう一人、ウォッチング船に乗る若い女性が発着所の待合に入ってきました。さわやかな感じの女性で、見れば、モータードライブのすごいカメラを抱えています。

受付の男性に紹介され、彼女が長崎大学水産学部の研究室の学生さんで、定期的にミナミバンドーイルカを観察しに来られているのだと知りました。

出発の時間です。

乗船する船は、入江一徳船長の操船する「天神丸」。ほかにも「大潮丸」「久栄丸」の2船がともに出船することになっています。乗船客を観察していますと、何組みかの親子連れのほかに、車椅子の障害者の方もおられ、同じ車椅子の方でも、ご老人の方もおられるようで、クルーの方たちが車椅子の積み込みに精を出しておられました。いよいよ出船となり、船長や長崎大学の学生さんと話すうち、早くもイルカの群れと出会いました。

いくつかの群れが次々と現れ、船の舳先や舷側をブロー（潮吹き）しながら泳ぎ回り、たちまち海を覆っていきます。これ

ウォッチング船を追いかけるミナミバンドーイルカの群れ

がバンドーイルカのウォッチングや、クジラのウォッチング、はたまたシャチ（オルカ）のウォッチングであれば、こう簡単にはいきません。まるで出会えないときもありますし、出会えても、遠くからブローが見えただけというときもあります。沿岸部を拠点に群れで生息するミナミバンドーイルカならではの壮観です。

石川の能登島では、一つの群れでしたが、ここでは無数の群れが生息しているため、ウォッチングでイルカと遭遇できる確率は、ほぼ100%と言っても過言ではありません。

僕の横手ではモータードライブのカメラが、シャッターを押すたび「ウォーン、ウォーン」と、小気味よい音を立て続け、僕も負けじとHDムービーカメラを回します。

もう話を聞いている間もありません。いったん海が静かになったと思っても、すぐ横に「ブオッ」という音とともにイルカが群れで顔を出す。船の先頭を行ったかと思うと、船の下をくぐり横切っていく。子供たちのはしゃぐ声。ブローの音、イルカの声。ウォッチング船も含め、周囲一帯が、一つの興奮状態に包まれている、そんな感じです。イルカたちも、そんな雰囲気を楽しんでいるかのようで、人とイルカと海が、まるで一つになったような時間が連続していきます。

イルカの群れとの出会いは夢のようで

エンジン音・波の音・イルカのブロー・子供たちの歓声・イルカのクリック音が一つになって‥

すが、でも、そろそろ話をまとめなければなりません。

そこで、NHKの番組「ニッポンの里山 イルカと生きる里の海」（熊本県天草市）に話を戻しましょう。

そこには天草の漁師たちの思いが隠されていました。彼らは海を豊かにするため、一日の漁獲量を制限し、さらに手の空いた時間には海へ潜り海藻を植えて回っていたのです。

海が豊かになれば、イルカたちも住み着く。漁師さんたちは言います。

「イルカが泳ぎまわる海は、海が豊かになってきた証し」だと。

前々回、壱岐のイルカ事件を紹介しました。そこで言われるように、イルカたちが漁師さんたちの獲物を横取りする、いわゆる「食害」になっていたことは間違いありません。しかし、イルカが来なくなっても、漁獲量は回復せず減少する一方だと聞いています。イルカの食害は、表面的な問題で、実は海が豊かでなくなってきている、それが根本的な原因だったように感じられます。

海の豊かさを取り戻そうとする天草の漁師の人たち、同様に1000キロ離れた能登島の漁師の人たちも、糸もずくの採集を通して、海藻を大事にすることで海の豊かさを守ろうとしています。

海藻が茂ることにより、小さな海の生

天草エアラインの新しいプロペラ機 MIZOKA ATR2-600

きものが集まり、それをエサとするイルカたちも集まってくる。

海を豊かにしようとする能登島の漁師の人たちの思いが、はるか南のイルカたちを呼び寄せたのではないでしょうか。能登島ではミナミバンドーイルカの新たなポッド（群れ）が成長しつつあります。それと平行するように、能登島の海も豊かになっていく。「やさしい思いが豊かな海を育てる」、その優しさに導かれ、南のイルカが北の海へとやってきた、そんな印象を、天草通詞島と石川能登島の取材で感じた次第です。

行きはバスでしたが、帰途は天草空港から、イルカさんの飛行機に乗って天草を離れることにいたします。

7. 北海道　釧路／シャチ観測船に乗る

北海道にある新得共働学舎とその農場

1. 共働学舎の子どもたち

イルカやクジラの話から少し外れますが、まずは僕が、北海道の新得共働学舎へ出向くようになった経緯から聞いてください。

今から３年前のことになりますが、僕は、仕事の事務所を、大阪からもとの古巣である奈良県の広陵町へ移すようになりました。広陵町といえば、靴下の町ということ、それに日本で古墳が一番多い市町村ということで有名です。

ますますクジラの話から遠ざかってきましたが、その広陵町で、「編集工房ＤＥＰ」兼「自遊空間ゼロ」というフリースペースを運営するようになったのです。

このフリースペースというのは、子どもが自由に時間を過ごせる、子どもと親が、ともに陶芸をしたり、お話を読み聞かせたり、ともに遊んだりと、親と子が時間を共有できる、そんな場所であります。サラリーマン時代からの長年の夢である、子どもが自由に創作活動が出来る「子ども工房」をつくりたいと、その思いが一歩を踏み出した、大げさに言えばそういう場所でもあります。

まず、活動のシンボルになるような、子どものための本作りを考えました。何を作

留萌線を走る「SLすずらん号」

ろうかと考えたとき、思い浮かんだのが、北海道の「寧楽（ねいらく）共働学舎」の子どもたちのことです。

サラリーマン時代、ボスが自由学園の理事を兼務していた関係で、これから紹介する北海道の共働学舎ともつながりがありました。自由学園とは、「真の自由人を育てる」ことを目的に、女性思想家、羽仁もと子さんと羽仁吉一さん夫婦によって1921年に創設されたキリスト教系の学校です。その関係で、僕も在職中、社員旅行で北海道を訪れたおり（これはボスが企んだことですが）、この寧楽共働学舎に滞在することになりました。

その滞在中の日曜日のことです。

当時、この寧楽共働学舎には、不登校の子どもたちが10人近くおり、その子どもたちと日曜日を利用して、留萌（るもい）駅へSL「すずらん号」を見学に行くことになったのです。

当時、NHKの朝の連続ドラマ「すずらん」の放映が終了したばかりで、ドラマに登場した蒸気機関車「すずらん号」が留萌線で不定期運行されるようになっていました。これを見学しようというのです。

寧楽から留萌駅までは車で約40分の道のり。学舎のマイクロバスに子どもたちと乗り込み、ピクニック気分で、ワイワイ

北海道にある寧楽共働学舎の冬

言いながら留萌駅を目しました。

子どもたちといっても、小学生から中学生、高校生ぐらいの幅広い子どもたちが一台のマイクロバスに乗り合わせています。中にはロもとにピアスをした、いかにも不良然とした男の子も混じっていました。

車中では、年長の女の子がリーダー役をつとめていましたが、雑談も、いつしか身の上話的になり、僕にも何か話すように促してきます。

僕としては、あまり話したくないことでしたが、若い頃、映画を志し、PR映画やコマーシャルフィルムの製作進行の仕事をしていたことを話しました。そして、なぜ映画の仕事を辞め、志を捨てたのかも話さざるを得なくなりました。才能がないからとか――そんな格好の良いものではありません。北軽井沢の長期ロケで、突然、訳の分からない不安感に襲われ、撮影現場から蒸発してしまったのです。取り返しのつかないことをしてしまい、その後、プロダクションに帰ったものの、みんなの目がいたたまれず、プロダクションを辞め、大学へ入学することになりました。当時は、自分のしたことの原因がつかめておらず、「誰でも出来ることが、なぜ、自分に出来ないのか」、そんな自問自答を繰り返している毎日でした。

この話をし終えた途端、子どもたちみんなが「話したくないだろうに、話してくれてありがとう」と泣いてくれるのです。こんなにやさしい子どもたちがいるのかと

新得共働学舎の朝／右上の写真はゲストルーム内部

思いました。ピアスの男の子まで、僕を慰めてくれる始末です。そうこうするうち、バスは留萌駅に着きましたが、すずらん号は発車した後でした。

みんなのがっかりした顔――。

突然、運転手をしてくれている木工工芸のお兄さんが、車内のみんなのほうを振り向くや、「追いかけるぞ」の一声。その号令一下、次の停車駅を目指して、マイクロバスが発進します。そして、途中、留萌川に沿って走るすずらん号を見つけたときは、車中が喚声に湧きたちました。

子どものための本を作りたい、そう思ったとき、まず思い浮かんだのが、そんな寧楽共働学舎の子どもたちの喚声でした。

とりあえず寧楽共働学舎に電話しましたが、当然のことながら、あの頃の子どもたちは、みんな元気になって巣立っていったということです。今は、在籍している子どもたちもいないとのことです。そこで、「一度、新得共働学舎へ行ってみては」と、提案を受けました。

早速、新得へも電話を入れますが、ここも似たような状況でした。

ところがです。数日して、新得共働学舎から連絡が入りました。

私が電話がした後、札幌の女子中学生から電話が入り、共働学舎に置いてほしいというのです。

その子が、今、新得共働学舎におり、僕の話をしたところ、ぜひ会いたいと言っているという次第です。

新得共働学舎の朝／牧場の散歩

翌週、早速、ジェットスターで新千歳空港へ飛び、南千歳から釧路行き「スーパーおおぞら」で新得を目指しました。その列車の中で、車内誌「The JR Hokkaido」に目が行きました。

そこには、釧路で、「しゃちの観測船」に、はじめて一般の乗船希望者を受け入れるという記事が出ておりました。早速、電話番号をメモした次第です。

シャチの話はひとまず置くとして、新得共働学舎に着くや、オーナーの奥さんが出迎えてくれ、

「桐生さんから電話があって、すぐ、あの娘から連絡があったんです。不思議なものですねえ。今、呼んできますから待っててくださいね。」

やがて事務室の一角で、彼女と出会いました。

彼女の提案で、翌朝、彼女の好きな牧場の散歩を一緒にすることになり、そこで話したいというこ

「僕のナゼ、私のナゼ」表紙と本文から

南千歳駅でスーパーおおぞらに乗り新得を目指す／右上の写真は、トマムの駅を過ぎた辺りの景

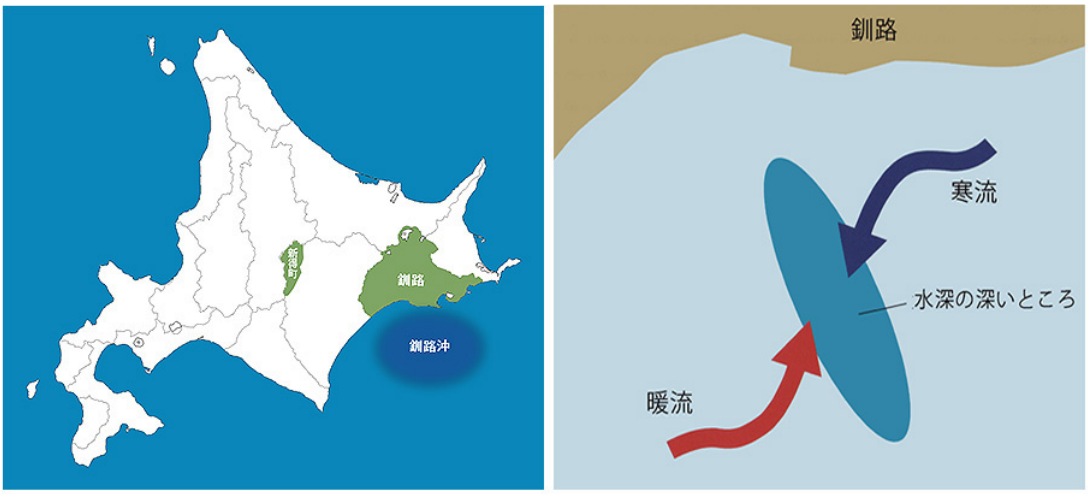
とになったのです。その日は、共働学舎のゲストルームに泊めてもらい、翌早朝６時、朝食前に二人で牧場が見渡される丘へと散歩することになりました。

この朝、「どうして自分は学校へ行けないのか」「どうしてみんなとうまくやっていけないのか」等々、彼女が抱える疑問の数々を聞かせてもらいましたが、最後に、「ほかにも、いろんな疑問を抱えている子どもたちがいるのかなあ、いたら話してみたい、会ってみたい」――彼女のその問いかけから、自遊空間ゼロの出版第一作「僕のナゼ、私のナゼ」が生まれることになりました。

北海道から帰るなり、早速、協力してくれる子どもたちを探しました。結局、北海道の彼女以外に、岐阜大垣の子どもが３人、大阪の子どもが3人、あわせて7人の子どもが協力してくれ、自分の中に抱えている「ナゼ」と向かいあってくれることになりました。

こうして出てきた「ナゼ」は、子どもたちの「本音」が詰まっており、想像以上にシリアスなものでした。このまま公開するより、イルカの子どもたちに置き換えたストーリーを作ろうということになりました。

「僕のナゼ、私のナゼ」制作中も、スーパー大空の車中で知った釧路のシャチ観測船のことが忘れられず、新得へ彼女の様子を見に行きたいということもあって、11月初旬、「新得」から更に先の「釧路」を目指すことになったという次第です。



右図は北海道釧路総合振興局商工労働観光課発行の小冊子「シャチが来る海」から転載

2. 釧路でシャチ観測船に乗る

新得へ行く途中のことです。私は、JR北海道の社内広報誌で、「さかまた組」が釧路沖のシャチ観測船に、はじめて一般市民の乗船を受け入れることを知りました。そこで大阪へ帰るなり、早速、受付の窓口になっているJTBと連絡を取り、スケジュールを検討し、11月5日の観測船に乗せていただくことになりました。

こうして10月初めの新得行きに引き続き、11月4日、再度、北海道を訪れることになった次第です。もちろん、北のイルカさんのその後の様子も気になり、釧路からの帰りには新得共働学舎へ立ち寄るよう計画していました。

さて、ここで話を進める前に、シャチ観測船ツアーを主催する「さかまた組」と、

「釧路沖」の環境について少し勉強しておきましょう。

上の写真は、参加者全員に配られたシャチが来る海～くしろ沖の魅力～」というA5判20ページの小冊子です。これが釧路沖の魅力と特異性について非常に分かりやすく説明してくれています。そこで、これによって釧路沖について予備知識を身につけておきましょう。

毎年9月下旬から11月上旬にかけて、釧路沖にはたくさんの海洋生物が姿を見せます。というのは、釧路沖の海底は、沖合

JR 釧路駅／日没時の釧路川とホテル「La Vista 釧路川」

15 キロメートルあたりから急激に深い谷のようになっています。

これを釧路海底谷（くしろかいていこく）と言うそうです。最も深いところで、水深は 5000 メートルにも達すると言います。

秋口になると、流れが変わった「寒流（親潮）」と「暖流（黒潮）」が、この海底谷でぶつかります。その結果、海水が湧き上がる湧昇流（ゆうしょうりゅう）が発生し、深い海底に生息していたプランクトンなどの豊富な栄養が、この湧昇流にのって海面近くまで昇ってくるというわけです。

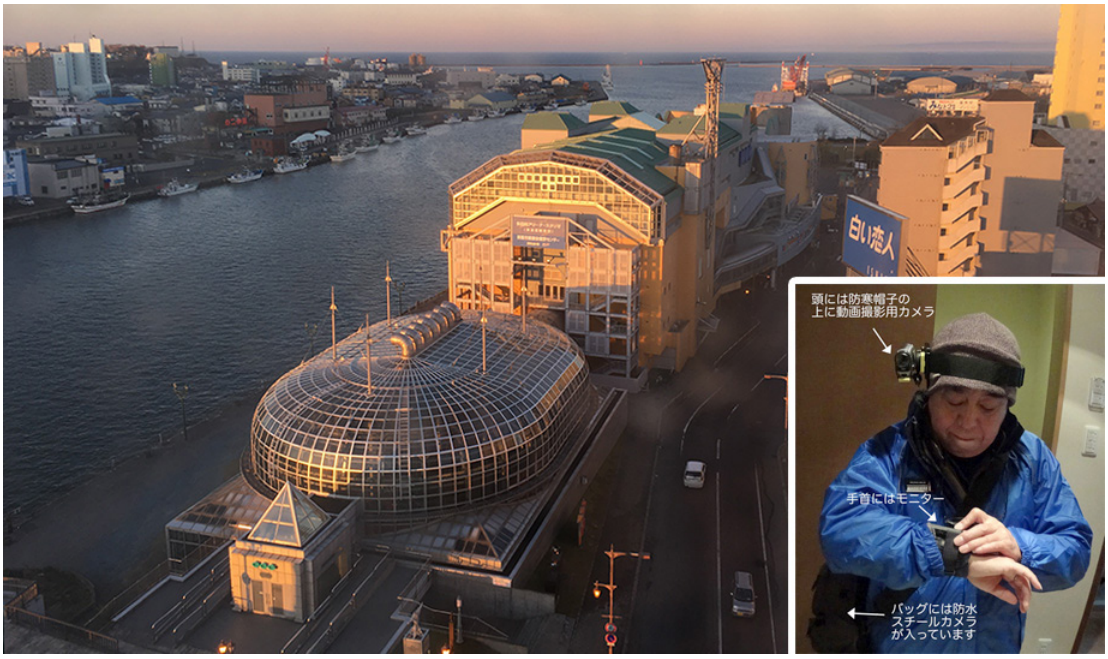
このプランクトンを餌とする小魚が集まり、小魚を餌とするイルカやクジラや海鳥が集まり、そして、イルカやクジラを餌とするシャチがやってくるという次第です。

この時期、釧路沖は「食物連鎖」の一大舞台となるわけです。

この釧路沖を中心に、海洋環境や生態系に関する研究成果を一般に普及し、自然の貴重さを伝えることを目的に「さかまた組」が結成されました。「さかまた」とは、漁師が使う「シャチ」の別名だそうです。そして、今回 2015 年秋、この目的達成の一環として、「さかまた組」が、釧路沖の海洋生物と生態系を調査する観測船に、釧路市民をはじめ一般の乗船希望者を募ったということです。

さて私ですが、乗船の前日、2015 年 11 月 4 日 PM 4:00、スーパーおおぞら 5 号で釧路駅に到着しました。

この日は、釧路港を見下ろすホテル「La



ホテルの部屋から見るフィッシャーマンズワーフ MOO／乗船準備を済ませ待機する私

Vista 釧路川」で一泊し、翌早朝の乗船に備えることにします。ここなら観測船が出船する港まで歩いて５分で行けるというわけです。

ホテルでチェックインを済ませ、夕食を兼ねて、明日の集合場所である「釧路フィッシャーマンズワーフ MOO」を下見に出かけることにしました。MOOで夕食を済ませたあと、河畔に出て、釧路へと帰ってくる漁船を眺めて時を過ごそうというわけです。

親爺が船乗りだった関係で、幼い頃から船に乗せられ、そのおかげでしょうか、船酔いというものを知りません。しかし、明日の海は荒れそうです。MOO で夕食をとっているとき、店のマスターと明日の天候について話しましたが、マスターも「明日は荒れそうだ」と同意見。最後には「船が出ればいいのだが……」と言葉を濁す始末です。

てきめんホテルに帰るなり、JTB の担当者から電話が入りました。明日は欠航の可能性もある、船が出るとしても時間が遅れそうなので、明日の朝は連絡するまで、ホテルで待機してほしいということです。

釧路まで来て、観測船にも乗れずに帰るなんて最悪です！

そう思う尻から、今度は、船が出ても、かなりの揺れが予想され、「これが初めての船酔い」なんてことにならなければいいが……そんな不安まで湧き上がってきます。ホテルのフロントで聞いても「酔い止め」

知床を出船し釧路川河口へと入ってきたシャチ観測船

は置いていないということ。仕方なく、夜の釧路の町に出かけ薬局を探す始末です。

そんなこんなで、いろいろとありましたが、翌朝、予定より約1時間遅れで船が出ることになりました。

支度を済ませ、我ながら物々しい出で立ちと思いましたが、仕方がありません。ぎこちない足取りで集合場所へ向かいます。カメラを抱えた一般客やスタッフの人たちも既に集まっておられました。

さかまた組の代表・笹森琴絵さんから乗船時の注意事項や、釧路沖の生物について説明があります。

笹森さんは、室蘭市に住まいされ、さかまた組代表として、はたまた海洋生物調査員として、大学の非常勤講師をされたり、海洋生物の写真家として活躍しておられますが、かつては学校の教員をしておられたことがありました。それが交通事故が元で重い膵臓炎となり、教員生活を辞めざるを得なくなりました。そんなとき、室蘭沖のイルカの群れと遭遇し、以来、彼女の第二の人生がはじまったと言います。

動物好きの笹森さん、これ以降、室蘭沖のイルカガイドとなり、さらに海洋生物調査や環境教育など、海の専門家の道を進むことになるのです。

そうこうするうち、我々を釧路沖の海洋へと運んでくれる船が、知床を出船し釧路川河口へと入ってきました。

いよいよ出船です。

予想どおり、風が強く、揺れはかなりな

船首に仁王立ちする若い女性クルー　頼もしい限りです

ものです。高速走行しているときはいいのですが、速度を緩めたり停船したときは、手すりにしがみついていないと立っていられないほどです。そんなときもクルーの若い女性が、何に動じることもなく船首に仁王立ちしているのを見ると、妙に安心感が湧いてきます。彼女が船首に立っているだけで安心感があり、彼女の存在自体が、この船そのものにさえ感じられます。船主の娘さんだと聞いていますが、実に頼もしい女性です。

船首には彼女のほか、さかまた組のスタッフでしょうか、若い男性や女性が、長い竿の先にカメラを付け、これから現れる海洋生物の撮影の準備を進めています。

船の司令塔となる２階の操舵室には船長のほか笹森さんが詰め、船内放送で現れた動物の解説をしてくれています。ただ船の進行に伴い移っていく景色に目をとられているのと、船の揺れに自分をなじませるのに気を取られ、せっかくの解説の声も、なかなか頭には入ってきませんが……。

まず目についたのは海鳥です。僕にはカモメやアホウドリとしか分かりませんでしたが、このほかにも「クロアシアホウドリ」や「コアホウドリ」「ウミネコ」「ミツユビカモメ」などが、この航海で観測されていました。

また荒れた海をものともせず、アザラシなのかオットセイなのか、愛嬌たっぷりにプカプカ浮かんでいる姿を見つけました。水族館で見るのとは違い、自然の中で、

この航海で観測された海鳥たち

まるで見る人間を意識しているかのように愛嬌を振りまいてくれる姿は、一見の価値があります。

シャチの群が遠望されました！　船が群れを目指しスピードをあげます。

シャッターを切る音、乗客の喚声、船全体が一つの思いに包まれたかのように、シャチの群にと集中していきます。

すると、笹森さんのアナウンスが船内に響きます。

「普通は、こんなに簡単にシャチの群れを見られるとは思わないでください。一航海で、まったく逢えないこともありますし、遠くにブロー（潮吹き）しか見えないことだってあります。きょうはラッキーでした。」

シャチのポッド（群れ）と遭遇したこと、この体験については言葉が役に立ちません。その時に撮った写真を並べておくことにします。

シャチとの遭遇の中で、もっとも印象的だったのは、子どもを守るように泳ぐシャチの家族の姿でした。

シャチは海のギャングのように言われています。たしかに、シャチのハンティングは、狡猾と言えるほどに巧みでチームプレーに長けています。子連れのクジラを狙い、親子を分離させた上で、子クジラの両サイドをかため、上からもう一匹のシャチがのしかかるようにして子クジラを窒息死させる、そんな様子をテレビで見たりすると、シャチが狡猾な悪者のように思われてしまいます。

釧路沖で出会ったシャチのポッド

しかし反面、家族思いということでは、シャチの右に出る者はいないでしょう。クジラの仲間の中で、一夫一婦制で最後まで添い遂げるのはシャチだけです。シャチは、仲間の痛みを共有できる存在とも言われます。

映画オルカ（1977）では、シャチを「本能で行動する獰猛な野生動物」ではなく、家族愛にあふれ、妻を人間に殺されたシャチが、その人間に復讐するという設定になっていました。

またその後 1993 年に作られた「フリーウイリー」では、母親に捨てられた少年と、家族から引き離されたシャチが心を通わせるというストーリーになっていました。

「フリーウイリー」映画化に当たって、主役のウイリーを演じたのはメキシコの水族館に所属する「ケイコ」というオスのシャチでしたが、映画が公開されるや、世界中の子どもたちから、「ケイコを海に返して！」という運動が起こりました。撮影終了後、狭い水槽の中で、皮膚病にかかり苦しむケイコの姿を、世界中の子どもたちが知ってしまったためです。

といって、そのまま海に返しては死ぬしかありません。野生のイルカやシャチは水族館に連れてこられても、死んだエサは食べません。まず最初にするトレーニングは、人間があたえる死んだエサを食べられるようにすることです。こうして訓練されたイ

この航海で観測された海鳥たち

ルカやシャチは、今度は自分でエサを採れなくなってしまいます。イルカやシャチは、水分をエサから採るため、エサを食べないと脱水症状になって死んでしまうのです。

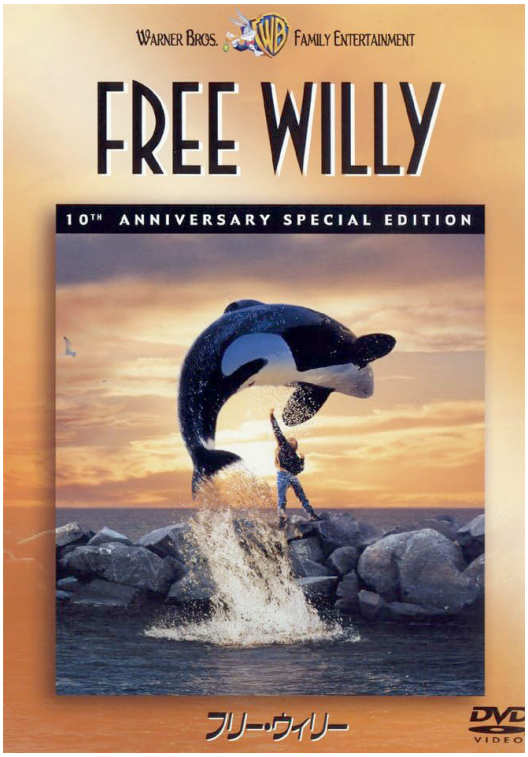
ケイコのために巨大なプールが用意され、ここで皮膚病を治療し、エサを自分で採れるようにして海へ返すのです。子どもたちの声が一頭のシャチを救うという奇跡が、今度は映画の中ではなく、実社会の中で起こりました。

こうしてケイコは、世界で最も有名なシャチになりました。ただ結末を言うと、ケイコは野生の群れに入れず、何度も人間のもとに帰ってきました。それでも、あきらめず野生へ戻そうとする人たち。結局、ケイコは 2003 年 12 月 12 日、急性肺炎にかかり、野生にも戻れず、人間のもとへもかえってこれず、ノルウェーの海で命を落としました。ケイコの遺骸は海岸に引き上

この航海で観測された海鳥たち

げられて埋められ、ノルウェーの子供たちの手で葬られたと聞いています。

こんなことを考えると、イルカやシャチを水族館やレジャー施設に置くこと自体、人間の奢りのように感じてしまいます。かといって一度人間のもとに置いたイルカやシャチを、野性に返れないと分かっていながら無責任に海へ返してしまうのもどうかと思います。



人間は「食物連鎖」の輪から飛び出し、今や自然の管理者になった気でいます。でも人間の関わった自然は、いつか歪みを見せ、崩壊へと転がっていくのではないでしょうか。

本当に救うべきは、自然や野生動物ではなく、文明という袋小路にはまり込んだ自分たちではないでしょうか？

野生のシャチとの遭遇、その感動の後に、自然に対しての後ろめたさが襲ってき

新得共働学舎の北のイルカさんと彼女が焼いてくれたクッキー

ました。そんな思いを抱えながら、新得の共働学舎へ立ち寄りました。

「僕のナゼ、私のナゼ」制作にあたって、共働学舎で出会った少女とは手紙でのやり取りが続いており、彼女はいつしか、自分のことを「北のイルカ」と呼ぶようになっていました。

途中、北のイルカさんに到着した旨、電話を入れました。

まもなくして学舎の入り口あたりにきた時です。向こうから北のイルカさんが、笑顔いっぱいで走ってきます。そして差し出されたクッキー。自分で焼いたのだと言います。

僕は焼き菓子があまり好きではないのですが、あのクッキーの美味しかったこと。

イルカさんの笑顔とクッキーの味が忘れられません。

北のイルカさんとの出版打ち合わせも無事に終了。

大阪へ帰れば、いよいよ「僕のナゼ、私のナゼ」の追い込みです。

次の章では、僕が勝手に友人と決めてしまった、「南あわじ・じゃのひれ」のイルカさんたち、かえでちゃん、さくらちゃん、ゆずちゃん、それにももちゃんを紹介します。

「僕のナゼ、私のナゼ」に登場するイルカたちの名前のもとになったイルカさんたちです。

ももでーす！

（みなみあわじ、じゃのひれの
「ドルフィンファーム」にて）

8. 愛媛県　しまなみ海道／バンドーイルカのもも

南あわじ市にある「じゃのひれ　ドルフィンファーム」。下は「ふれあいコース」プール前の表示。

1. 田池留吉という校長先生

上の写真は、兵庫県南あわじ市阿万塩屋町にあるレジャー施設「ドルフィンファーム」のイルカプールです。

この「ドルフィンファーム」は湾の一角をイカダと網で仕切ることで、巨大なプールを作り、その海水プールで、イルカと人が一緒に泳いだり触れあうことができるようにしたというレジャー施設です。

本来は、「陸」と「海」という違った環境で暮らし、漁師の方やダイビングを趣味とされる方は別として、ふれ合うことのなかった二種の「陸」と「海」の」ほ乳類が出会える場所でもあります。それは人間の「癒やし」や「楽しみ」のために、一方的にイルカに犠牲を強いる結果となるわけですが……。

しかし、そんな環境でも、いや、そんな環境だからこそなのかも知れませんが、「イルカ」とその世話をする「人」の間には、友情や信頼が育まれているように感じます。

実は、僕が、イルカと初めて接触したのも、このドルフィンファームなのです。以来、ここでの強烈な体験がイルカやクジラにどっぷりはまり込んでしまう結果となりました。

大阪府南河内郡河南町大宝に住む田池留吉というお爺さん

でもその体験に触れる前に、まずは、泳げない僕が、なぜ、イルカと一緒に泳ごうなどと思うようになったのか、その辺の経緯（いきさつ）から話させてください。

これについては、冒頭「旅のはじまり」に既に書いたことなのですが、僕にとって、とても大事なことであり、僕の来世にも関わってくることなので、面倒くさい奴だと思われるでしょうが、なにとぞ、もう一度おさらいさをせてください。

写真の人物は、大阪府南河内郡河南町大宝に住む田池留吉というお爺さんです。

住むというよりか住んでいたと言うべきでしょうか。この田池先生、2015 年 12 月、90 才でお亡くなりになりました。若い頃は、大変な秀才だったようで、家が貧しかったため、大阪府立市岡中学校（旧制）卒業後は、経済的な理由で陸軍士官学校に入学されたといいます。正確に言うと「陸軍予科士官学校 60 期」に入学し、卒業後、「陸軍航空士官学校」に配属されたということになります。終戦が近づくや特攻隊を率いて出撃するはずでしたが、そのための訓練もままならないまま、終戦となってしまいました。

価値観が一変したと言っておられました。一時は特攻隊を率い死を覚悟し、「何のために死ぬのか」を自分に問い続けた

取り壊される前の大阪高等学校（大阪大学）校舎と移設前の「青春の像」

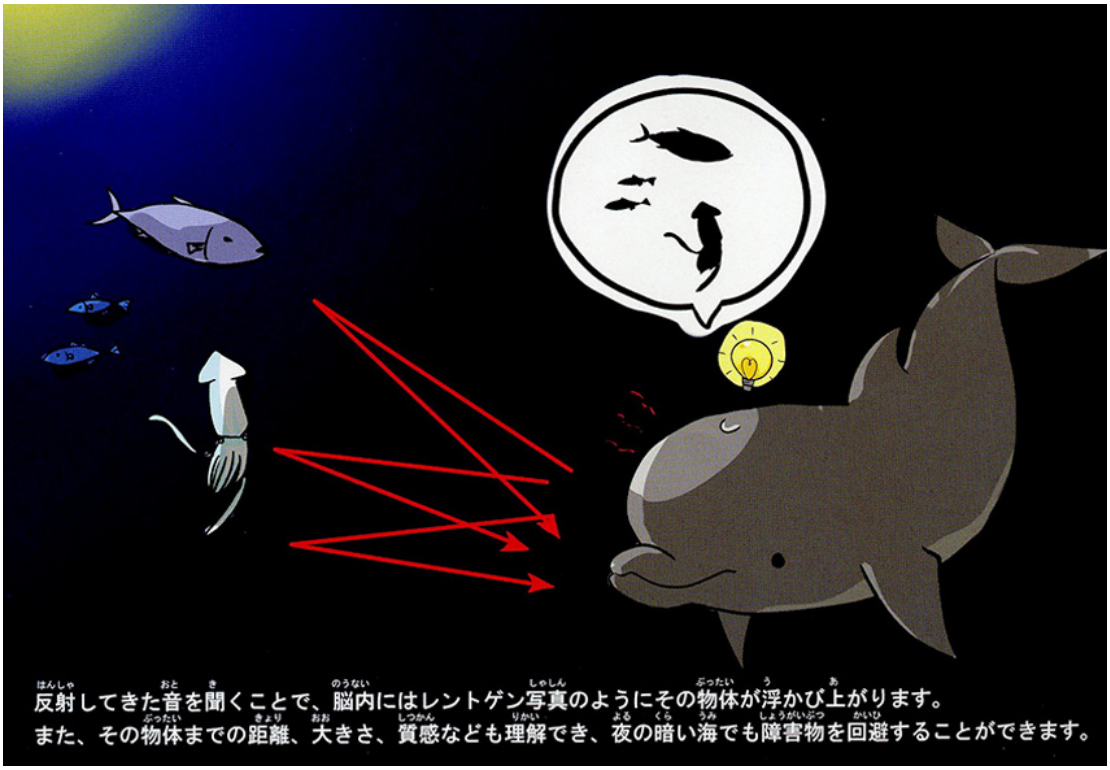
青春時代だったそうです。それが終戦の詔勅（しょうちょく）以降、まったく価値観が変わってしまいました。そんな中、田池さんは大阪高等学校（今の大阪大学）へ再入学され、教師の道を歩き出すことになったのです。

大阪市立西中学校の補欠要員を皮切りに、母校である大阪府立市岡高校で数学を教え、やがて教頭となり、大阪府立東百舌高等学校の校長職を辞し教職生活にピリオドを打たれました。

僕が田池先生を知ったのは、この東百舌高等学校の校長先生だった頃です。こんな関係で「先生」が代名詞みたいになってしまいましたが、その田池先生、出会った翌年、定年まであと一年を残して校長職を依願退職されてしまったのです。

僕が出会った頃には、まだ校長職をしながら「人間はなぜ生まれてくるのか」「人間の本質は肉体ではなく心」「他人や社会を変えるのでなく、自分が抱えている闇に気づき、自分を変えていこうとしないかぎり何も変わらない」……、それらのことを手弁当で伝え続けておられました。

そんな田池先生のもとへ、お子さんや家族のことで相談に来られたり、話を聞きに来られたりする方が次第に増え、田池先生も、たくさんの方に本当のことを知ってもらおうと、定年を待たず校長職を辞された



エコロケーションのために発する音をクリック音と言います（ドルフィンファームの案内書から転載）。

次第です。

僕も最初は反発していましたが、否定できないことが次々と自分の中で起こり、以来、お亡くなりになるまで、三十年以上、勝手に「師」と決め、お付き合いすることになりました。その辺の経緯は、拙著「時を越えて伝えたいこと」（2007 年6月刊絶版のため PDF で無料公開しています）の中に詳述していますので、興味のある方はお読みください。

その田池さんがお亡くなりになる前年だったと思うのですが、「イルカ」や「クジラ」について「人間に近い存在で私も興味を持っている」と話されたことがあり、「言葉でなく意識で通じ合える存在だ」とも言われました。

まあ、すべての生き物がそうなのだと思うのですが、特にイルカやクジラにはそう感じさせる「何か」があるようです。このときは、たくさんの人の前で話されていたのですが、いきなり「なあ桐生さん、頼んだで……」と、なぜか名指しで頼まれてしまうことになりました。

長くなりましたが、これが、僕が「イルカ」や「クジラ」に」興味を持つようになった最初です。

ところで、人間は言葉を使います。だから言葉を信じがちです。でも、言葉で「あ

岩重慶一さんの書かれた絵本「おでこちゃんとイルカのねがい」

なたは良い人だ」と言っても、心では「おまえは嫌なやつだ」と思っているかもしれません。そうだとすれば、どちらが本当の姿でしょう。「良い人だ」という言葉とは裏腹に、その人からは「嫌なやつだ」という思いが流れています。思いはエネルギーですから、表面うまく行っているように見えても、いつか破綻を来すという事態が起こってきたりします。

これに対し、動物は言葉でなく、鳴き声や吠え声に、喜びや怒り、悲しみの波動を乗せます。その最たるものがイルカやクジラたちのように感じます。高度に発達した知能を持ちながらも、鳴き声に何とも言えない優しい波動を感じさせます。

僕の知人に「イルカの学校」を主催されている岩重慶一さんと言われる方がおられます。この方は、不定期ですが、子供たちを御蔵島で野生のイルカと遊ばせるということをされています。

この岩重さんの体験ですが、イルカの発するクリック音（超音波）を正面から受けたことがあるそうです。そのときは、水中めがねがビリビリ震えたかと思うと、お腹のあたりがカーッと温かくなり、次には何とも言えない充足感に包まれ、胎児に戻ったかのような安心感に包まれたと言います。

クリック音というのは、イルカがエコロ

「ドルフィンファーム」で配られている手作りの案内書の一部

ケーション（反響定位と訳され、つまり超優秀なソナーのようなものです）のために超音波を発しますが、その時に出す音のことです。イルカの目を見てみると身体の両サイドに付いていて前を見ることが出来ないのが分かります。

しかも暗い海の中で、前方のものを確認する方法がエコロケーションということです。人間がイルカの出す超音波の直撃を受けたとき、なぜ、このような現象が起こるのか、僕にはその原因を説明できるような知識を持ち合わせません。

これ以外にも、須磨水族館と京都大学が共同で行ったテストでは、これも理由はわかりませんが、イルカの画像を見た被験者の脳波は、多の動物の画像を見た、あるいは何の画像も見なかった被験者より、情緒の安定度が非常に高くなっているというテスト結果があります。アニマルケアという言葉がありますが、イルカは、犬や猫など、他の動物と比べ、ダントツにケア度が高いと言われています。

誤解しないでください。だからといって、イルカは人間のケアのために存在している訳ではないのです。

ただ近年、イルカやクジラが人間と接触する機会が増えていることは事実です。タイガーシャークに囲まれた水中カメラマン

ドルフィンファームのバンドーイルカ

をザトウクジラが救った話、網に絡まったイルカ、クジラを人間が網を切って助けた話、そのほかネットを検索すれば、たくさんの事例がこれでもかと言うほどヒットしてきます。

前置きがずいぶんと長くなってしまいました。

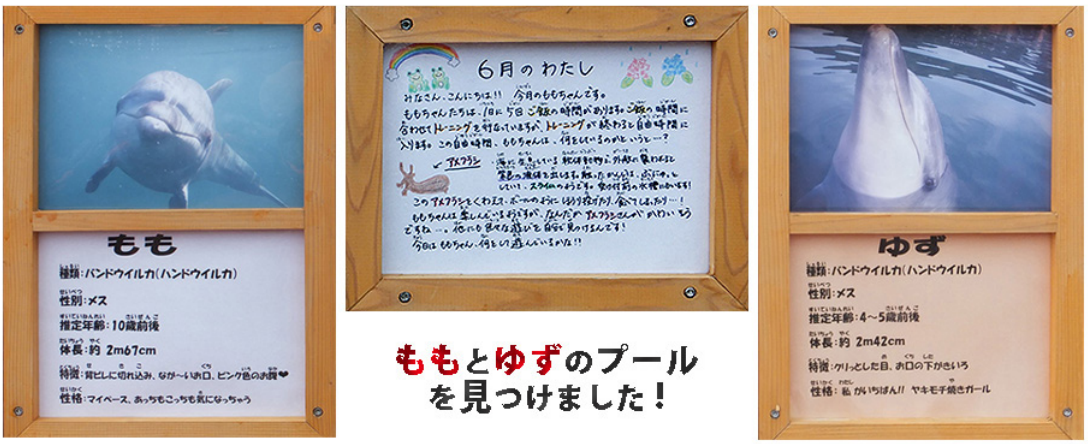
2. 南あわじドルフィンファーム

さてと、前ページの写真は、ドルフィンファームで、スイムコースに参加した人に配られる手作りの案内書の一部です。所属するイルカさんたちが、その性格を表す一言ともに紹介されています。僕の姪っ子がドルフィン・スイム（イルカと泳ぐプログラム）に参加し、もらってきたものです。それを、また僕が借り受けたという次第です。

この紹介ページを使って、僕の実験がスタートしました。まだ見ぬイルカさんと思いを通じ合えるのかという実験です。まずターゲットとなる特定の一頭を選びます。選ぶ根拠はありません。若い頃、ミヒャエル・エンデという作家にのめり込んだことがあります。彼の作品の中でも特に好きだったのが「モモ」。そこで選んだのが「もも」というイルカです。写真の下には「性格:食いしん坊、頑張り屋」さんとあります。

「もも」の写真を携帯に取り込み、ことあるごとに開いては、その「もも」の写真に心の中で語りかけました。「こんにちわ」にはじまり、自己紹介をしてみたり、「今度、会いに行きますので、よろしく」だったり、写真を開かなくても、「もも」と、ただ思ってみたり、そんな他愛もない繰り返しを２週間近くもやったでしょうか。

そうする一方で、スイミングスクールの個人レッスンを申込み、イルカと自由自在



ドルフィンファーム／「もも」と「ゆず」のプールの前に２頭の紹介が書かれていました

に泳げるようになろうとしました。

……が、これは失敗でした。水に対する恐怖心が抜けず、身体が硬くなり、あげくは頭がガンガン痛みだす始末。ともかく浮いて前へ進むぐらいはできるようになりましたが、イルカさんと自由自在に泳ぎ回るなんて、夢のまた夢のことです。

でも、めげてはいられません。泳げないイルカの学者さんだっているんだからと……そう、自分に言い聞かせ、女房と二人、ドルフィンファームのスイムコースに予約を取った次第です。

スイミングスクールで個人指導を受けたものの、水への恐怖心から挫折、イルカと自由自在に泳ぐという計画は、ものの見事に失敗に終わりました。でも、ものは考えようです。浮くようになったわけだし、まして、イルカさんと泳ぐときはライフジャケットを着けているわけですから、おぼれる心配はまずありません。自分にしては上出来です。

こんなわけで女房と二人して「淡路じゃのひれアウトドアリゾート」へとやってきました。まずは予約の確認と「ドルフィンスイム」の申込みを済ませ、時間まで海水プールを見学します。何より大事な実験結果はどうなっているでしょう。ここ２週間というもの、まだ見ぬ「もも」に思いを寄せ続け、ひたすら語り続けてきました。

とはいうものの、この場に臨んで、期待は、「そんなわけないよなぁ」「思うだけで通じるわけないよなぁ」と、そんなあきらめムードに変わっていました。

期待半分あきらめ半分、そんな感じで「もも」のプールを探していると、

「ありました！」

中ほどのプールの前に案内表示が出ています。「もも」と、もう一頭「ゆず」と表示

「もも」と「ゆず」のプールを見つけたと思ったとたん

いきなりはじまった「もも」と「ゆず」のジャンプが止まりません。

されています。

ここが「もも」のプールか！

そう思った瞬間です。背後で「バシャーン」という水しぶき。頭に冷たい水滴が降りかかります。

あわてて振り返ると――！！

「もも」と「ゆず」が、二頭でジャンプをはじめ、それが、なかなか終わらないのです。あわててカメラを取り出しますが、連写モードになっていなかったため、なかなかジャンプのスピードに追いつけず、パチリパチリとシャッターを切り続けます。それでもジャンプは終わりません。

ついには係の方が驚いて飛び出してくる始末です。

ジャンプするのは、餌をほしいときとか、遊んでほしいときらしいのですが、普通は二、三回もすれば終わると言います。それが十回どころか、あわてて数えだしたときからでも二十回以上もジャンプが続いているのです。

とても威嚇のようには思えません。

「思いが伝わったんだ！」 とっさにそう思ってしまいました。

思い込みかも知れませんが、それでも、シャッターを切っていて訳もなく涙が止まりません。大の男が恥ずかしい話ですが、水しぶきと一緒になっているので泣いているのは、何とかごまかせそうです。

係の人が飛び出してきた頃にはジャンプも下火になり、やがて海面も静かになっていきました。

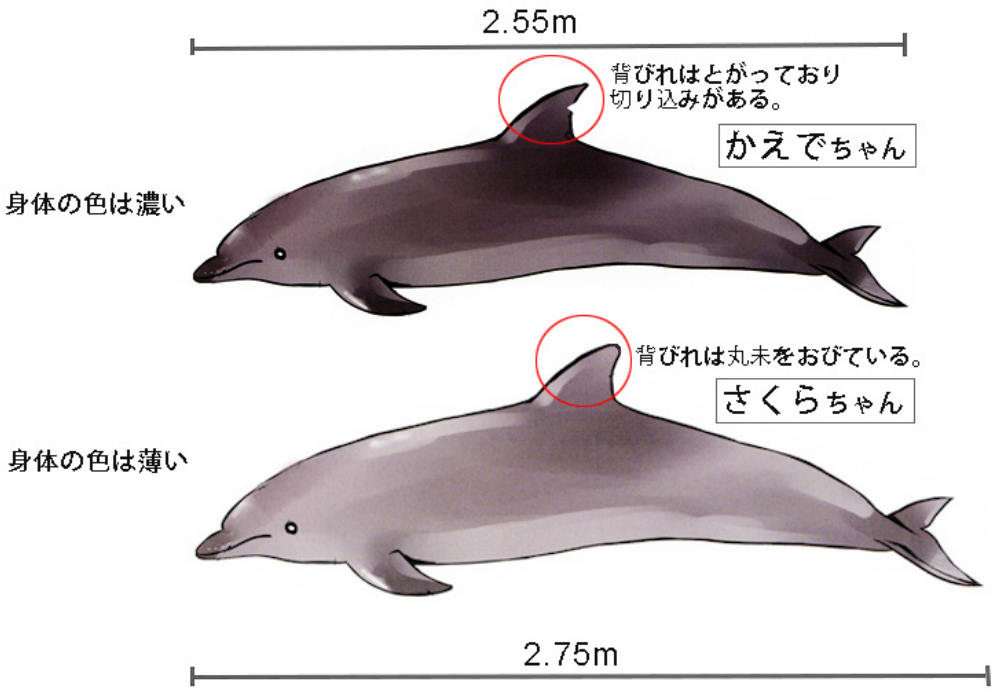
ひょっとして何かの偶然かも、そうも思いましたが、この一年後、しまなみ海道にドルフィンファームが新たにオープンしたときのことです。「もも」がしまなみ海道に移されることになり、それを知った僕も、取材という名目で「もも」を訪ねることにしました。

そのとき、「もも」の対応が偶然ではなかったと確信しました。一度しか会っていない僕を、「もも」はしっかりと覚えてくれていたのです。

さて、この話は締めくくりのところで取り上げるとして、まずは人生初めての体験、ドルフィン・スイムについて話しを続けていきたいと思います。

ここでイルカさんについて、少し基本的なことを勉強しておきましょう。

魚と違い、イルカは尾びれが飛行機の尾翼のように左右に広がっています。魚の場合は尾びれが縦についており、これを左右に振ることで泳ぎます。これに対し、イルカは左右に広がった尾びれを上下に振ることで推進力を作り出します。この違いは、イルカがほ乳類で肺呼吸をするため、頭の上に開いた呼吸孔をすばやく海面に出すためではないかと言われています。その尾び



一緒に泳いでくれる「かえで」と「さくら」の見分け方です

れの強さは並大抵ではなく、いやがる野生のイルカを追い回し、尾びれの一撃で肋骨を折られた人間もいるぐらいです。

エコロケーションについては前回触れましたので、変わったところで「半球睡眠」について触れておきましょう。イルカの脳は、左右で二つに分かれて活動します。左が眠っているときは右が活動しており、右が眠るときには左が活動している、つまり眠らずに泳ぎ続けることができるという寸法です。

また代謝が活発で、人間が 24 時間で肌が再生されるのに対し、イルカは 2 時間で新しい肌が再生されるということになります。これは早く泳げるよう、いつでも肌をすべすべにしておく必要があるためです。

スイミングの前には、調教師のやさしくて陽気なお姉さんが、イルカについて、いろいろと勉強させてくれます。ただ残念なことに、今日一緒に泳いでくれるのは「もも」と「ゆず」ではなく、「さくら」と「かえで」という二頭の雌のバンドーイルカということでした。「もも」たちは、まだ人と一緒に泳ぐまでにはトレーニングが進んでいないのだと言います。

上の図は、その「かえで」と「さくら」の見分け方です。「かえで」は小ぶりで、身体の色は濃く、背びれがとがっており、

胸ビレにつかまらせてもらってのスイミング。これが本当の胸を借りる?なーんて

上部に切れ目があります。これに対し、「さくら」は大柄で、色も浅く、背びれは丸みを帯びています。このようにイルカたちはそれぞれ特徴があり、この特徴を早くつかんで個体差を知ることで、イルカたちとの距離がぐっと縮まると思います。

一緒に泳いでくれるパートナーのことを知らないなんて失礼ですものね。

さあ、いよいよです。

まずは「かえで」の背びれにつかまってのスイミング。調教師のお姉さんが言います。

「背びれを左手で軽く持ち、後は浮かんいるだけでいいですからねぇ。」

言われたように、背びれを軽くつかむと、それが合図であるかのように「かえで」が、かなりのスピードで泳ぎだしました。

すべて、うまくいくはずでした。ライフジャケットは着けているし、おぼれるはずがありませんでした。

でも、おぼれてしまいました。

水に浸かったまま顔を上げられないのです。

水に浮かび、かえでに引っ張ってもらい確かに進んでいるのですが、顔を水面に上げることができません。

苦しまみれに、とうとう「かえで」の背びれを放してしまいました。

ゴボゴボゴボゴボッ!

この状況は間違いなくおぼれていることになるのでしょう。

しかし、スイミングスクールで個人指導

頭に付けたアクションカメラが、かえでの心配そうな顔を捉えてくれていました

を受けた成果は間違いなくあったと言えるでしょう。水の中で、息が苦しいながらも僕は泳いでいました。そばでば「かえで」が、僕の回りを心配そうに付き添ってくれています。あの姿にどれだけ励まされたことでしょうか。僕は彼女に導かれるようにして、プールの縁へたどりつきました。

ほんの数分のことでしたが、僕の中では一生分の思い出が紡ぎ出されていました。

みんなの心配そうな顔が笑顔に変わり、「ドルフィンスイムもここまで」と思った瞬間、あのかわいい調教師のお姉さんが、

「次は、かえでちゃんに胸ビレを貸してもらいます。」

「……もういいです！」

「ダメでーす！　やってもらいます。」

笑顔こそ素敵ですが、そこには、てこでも動こうとしない気構えがありました。

「今度は、かえでちゃんにひっくり返ってもらい、その上に乗る格好ですから顔は水に浸かりません。今度は大丈夫です、うまくいきます！」

今度は大成功！

かえでに続いて、さくらまでが胸ビレにつかまらせてくれ、広いプールを一周させてくれました。

先ほどの強烈な体験と相まって、自分の中では、イルカさんに対する絶大な友情と信頼が生まれていました。

さあ、いよいよラストプログラムです。水中のイルカさんとふれ合います。

かえでの胸ビレにつかまってのスイミングです

「水の中はもう充分です」と言いましたが、先ほどの調教師のお姉さんが「ダメです！　やってもらいます」と、何にもひるまない笑顔で応じてくれました。

これも大成功！　泳ぎに自信がない分、水の中でも浮いているしか能がないのですが、それが反って良かったのだと言います。変に泳ぎに自信があって、イルカを追い回したりすると、逆にイルカにいやがられるようです。イルカがこちらに興味を持って近づいてくるまで、ただ浮かんでいるだけでよいそうです。これは野生のイルカさんの場合、特に言えることだそうです。

今回の体験で、イルカさんへの絶大な友情と信頼を感じたわけですが、同じように、若い調教師の方のイルカさんに向ける友情や信頼をヒシヒシと感じさせてもらいました。

このことは、新しくできた「しまなみドルフィンファーム」へ、「もも」と「ゆず」が移動させられることになり、その取材させていただいたとき、よりいっそう感じさせてもらった次第です。

3. ももを追ってしまなみへ

2016 年 5 月 6 日、まだオープンして間もない「ドルフィンファームしまなみ」に、淡路から移された「もも」の様子を見に行ってきました。

なんと、あのやさしくも、言い出したらテコでも動かない調教師のお姉さんがいる

水中での「かえで」や「さくら」とのふれ合いも大成功 !!

ではないですか！　一度しか会っていないのに、旧知の友に出会えたようで、うれしくてなつかしくて、僕がアメリカ人なら、さしずめハグしていることでしょう。そこは日本男児のはしくれですから、そんな浅ましい誤解されるようなまねはいたしませんでしたが……。

彼女にこんな思いを抱いたのは、僕だけでなく、「もも」こそ、彼女が頼りだったに違いありません。陸送の模様は、ほかのイルカの例ですが、アミール動物病院さんが「獣医さんのお仕事―イルカの輸送」として写真を公開されています。それを転載させていただきましたが、こんな感じで「もも」や「ゆず」も運ばれてきたのだと思います。

調教師のお姉さんに聞くと、「もも」はいやがって暴れ、おかげで到着したときは傷だらけだったと言います。

事前に電話で「もも」の移動の話を聞いていましたので、しまなみドルフィンパークに到着するなり、「ももはどこだろう、元気だろうか」と思った瞬間、遠くでジャンプするイルカがいます。まさに、そのイルカが「もも」だったのです。顔をあわせるなり、「大変だったねえ」と心の中で語りかけました。すると「もも」の何とも言えない温もりが伝わってきました。「思い込み」だとか「思い入れ強すぎ」だとか「錯覚」だとか、なんと言われようが、間違いなく「もも」は僕を覚えてくれていて喜んでくれています。

調教師の方々の愛情に包まれて元気を取り戻しつつある「もも」

くだんの調教のおねえさんと、新しく知り合った、ここ「しまなみ」のリーダーのお姉さんと、お二人から「もも」の話を聞きました。「ゆず」が比較的おとなしかったのに、「もも」はいやがって傷だらけになった話。到着したとき、「もも」は弱り切っていて、この方たちが付きっきりで面倒を見てくれた話。

今日の「もも」は、とっても元気だと言います。

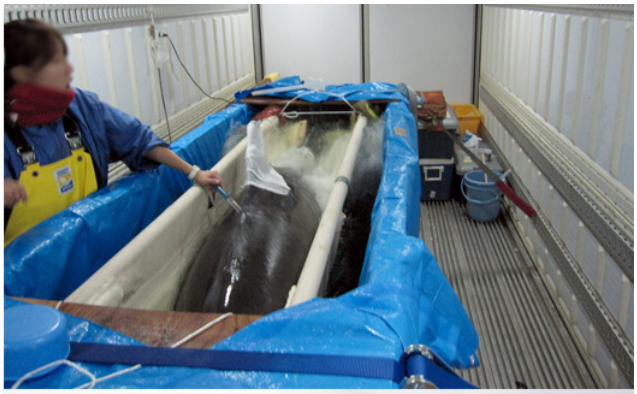
今、イルカを水族館やレジャー施設に置くことの是非が問われています。

インドでは、イルカを「Non human Person」、つまり「他の動物と比べて非常に稀なその知的能力の高さは『ヒト科以外の人間』としてみなされるべきであり、彼らには特別の権利を付与すべきである」とし、水族館やレジャー施設からイルカを解放することが義務づけられるようになりました。

日本でも遠からず、水族館やレジャー施設から「イルカ」が消える日が来るのかも知れません。

ただ、今現在の日本では、水族館で生まれたイルカやシャチがおり、この子たちや、もとは野生であっても、今は人間と深い絆で結ばれるようになったイルカやシャチがいます。

以前に触れたシャチのケイコのことを考えると、「種」として考えるのでなく、「個」として考えたとき、何が彼らの幸せなのかを考えて判断してほしいものです。



アミール動物病院さんのブログ「獣医さんのお仕事―イルカの輸送―」から転載

水族館やレジャー施設にいるイルカたちは、今は少なくとも、彼らをお世話する人間と友情や信頼関係を築いています。

イルカを「人」として扱うのであれば、個人としての幸せを無視してほしくないと切に思います。

今回の実験で感じたのは、イルカは海へ帰ったほ乳類として独自の進化を遂げたという点です。ある意味、人間以上に優れた生きものだと思います。特に、言葉に頼らず「思い」を「波動」として伝え、感じることができる能力――人間が、はるか昔に放棄した能力を進化させ続けてきた生物だと強く感じました。

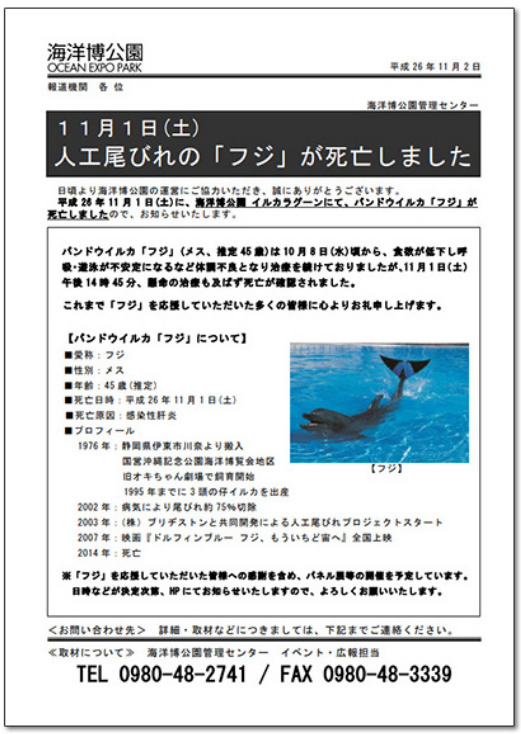
この「もも」「ゆず」「かえで」「さくら」に出会って、また、そのお世話をする若い方々と出会って、今、僕は、イルカやその他のクジラの仲間のことが忘れられなくなりました。

9. 沖縄県　美ら海水族館／空を飛んだフジ

1. 尾びれのないイルカ

上の写真はすべて、「フジ」という一頭のイルカのためにつくられた「人工尾ビレ」です。失敗しては改造し、壊れてはまた改造し、飽きることなく造り続け、改造し続けられた人工の尾ビレ。この尾ビレを付けて元気に泳いでいた「フジ」も、2014 年 11 月 1 日、感染性肝炎のため、45 才（推定年齢）で亡くなりました。

ところで、じゃのひれドルフィンファームで、バンドーイルカの「もも」や「かえで」と知り合って以来、イルカやクジラに――と言ってもイルカもクジラの仲間なのですが――のめり込んでしまった私は、「本」



海洋博公園
OCEAN EXPO PARK

平成 26 年 11 月 2 日

報道機関　各 位

海洋博公園管理センター

１１月１日（土）
人工尾びれの「フジ」が死亡しました

日頃より海洋博公園の運営にご協力いただき、誠にありがとうございます。
平成 26 年 11 月 1 日（土）に、海洋博公園 イルカラグーンにて、バンドウイルカ「フジ」が死亡しましたので、お知らせいたします。

バンドウイルカ「フジ」（メス、推定 45 歳）は 10 月 8 日（水）頃から、食欲が低下し呼吸・遊泳が不安定になるなど体調不良となり治療を続けておりましたが、11 月 1 日（土）午後 14 時 45 分、懸命の治療も及ばず死亡が確認されました。

これまで「フジ」を応援していただいた多くの皆様に心よりお礼申し上げます。

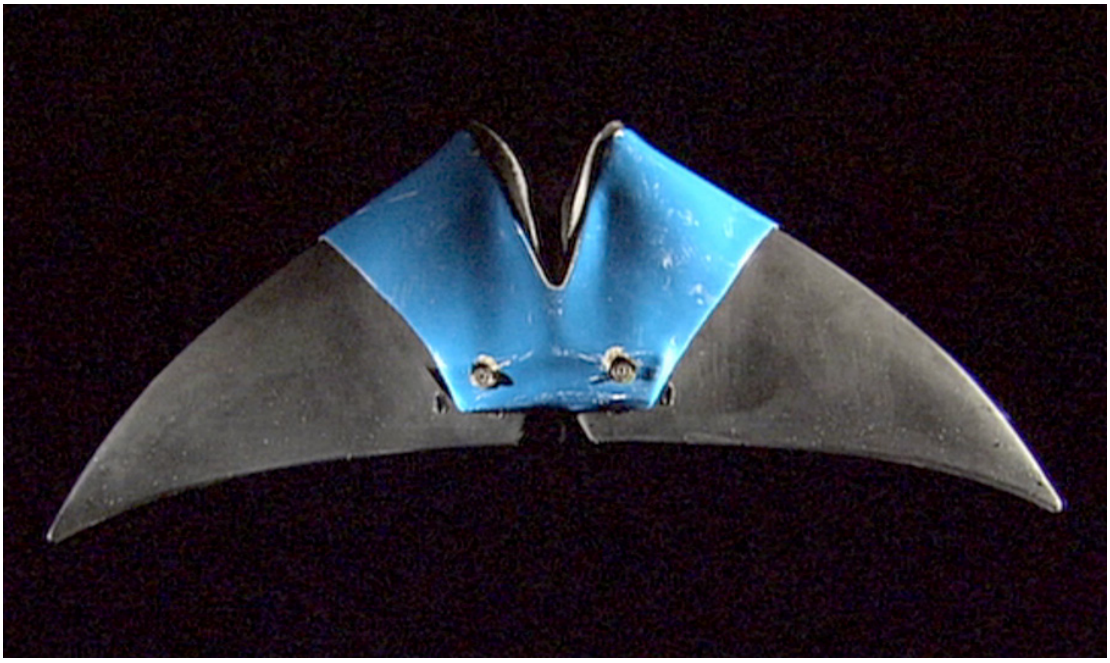
【バンドウイルカ「フジ」について】
■愛称：フジ
■性別：メス
■年齢：45 歳（推定）
■死亡日時：平成 26 年 11 月 1 日（土）
■死亡原因：感染性肝炎
■プロフィール
1976 年：静岡県伊東市川奈より搬入
国営沖縄記念公園海洋博覧会地区
旧オキちゃん劇場で飼育開始
1995 年までに 3 頭の仔イルカを出産
2002 年：病気により尾びれ約 75%切除
2003 年：（株）ブリヂストンと共同開発による人工尾びれプロジェクトスタート
2007 年：映画『ドルフィンブルー　フジ、もういちど空へ』全国上映
2014 年：死亡

【フジ】

※「フジ」を応援していただいた皆様への感謝を込め、パネル展等の開催を予定しています。日時などが決定次第、HP にてお知らせいたしますので、よろしくお願いいたします。

＜お問い合わせ先＞　詳細・取材などにつきましては、下記までご連絡ください。
≪取材について≫　海洋博公園管理センター　イベント・広報担当
TEL 0980-48-2741 / FAX 0980-48-3339

2024 年 11 月 1 日、人口尾びれの「フジ」が亡くなったという「海洋博公園」の通知



フジの人工尾ビレの最終的な形。素人が見ても実にきれいなフォルムです。

やら「DVD」やら、「グッズ」やら、ともかくクジラやイルカと名の付くものは、手に入る範囲で集め回っていました。

その収集品の中に、「イルカと少年」（アメリカ）という2011年に映画化された作品のDVDがありました。

カニを捕らえる罠にかかり、尾ビレを失ったバンドーイルカの「ウインター」と、父親に蒸発された「孤独な少年」が心を通い合わせるというストーリーです。これは実際にあった話しをもとに組み立てられており、映画の中のウインターも彼女自身が演じています。そのウインターは、今も、クリアウォーター水族館で元気に暮らしており、彼女の姿を見ようと思えば、クリアウォーター水族館のホームページを開けば、ライブ映像だって見ることができてしまいます。

ところが、もっと驚いたことには、日本にも同じように人工尾ビレのバンドーイルカがいたのです。それが「美ら海水族館」の「フジ」です。しかも、ウインターが尾ビレを失う事故を起こしたのが2005年のことですから、それより３年も早く「フジ」の事故が起こっています。

早ければ良いという話しではありませんが、重要なのは「フジ」が世界で初めて「人工尾ビレ」を付けたイルカとなったということです。つまり、参考にできる事例がまったくなく、すべてが手探りで進められたということなのです。冒頭の写真に掲げた人工尾ビレの試作品、そのおびただし

美ら海水族館内で放映されているビデオ動画より

い数が、このプロジェクトに関わった人たちの苦労を物語っています。素材、形、取り付け方法、すべて試行錯誤で、問題点をつぶしながら、ついには「フジ」にピッタリの人口尾ビレを完成させたのです。

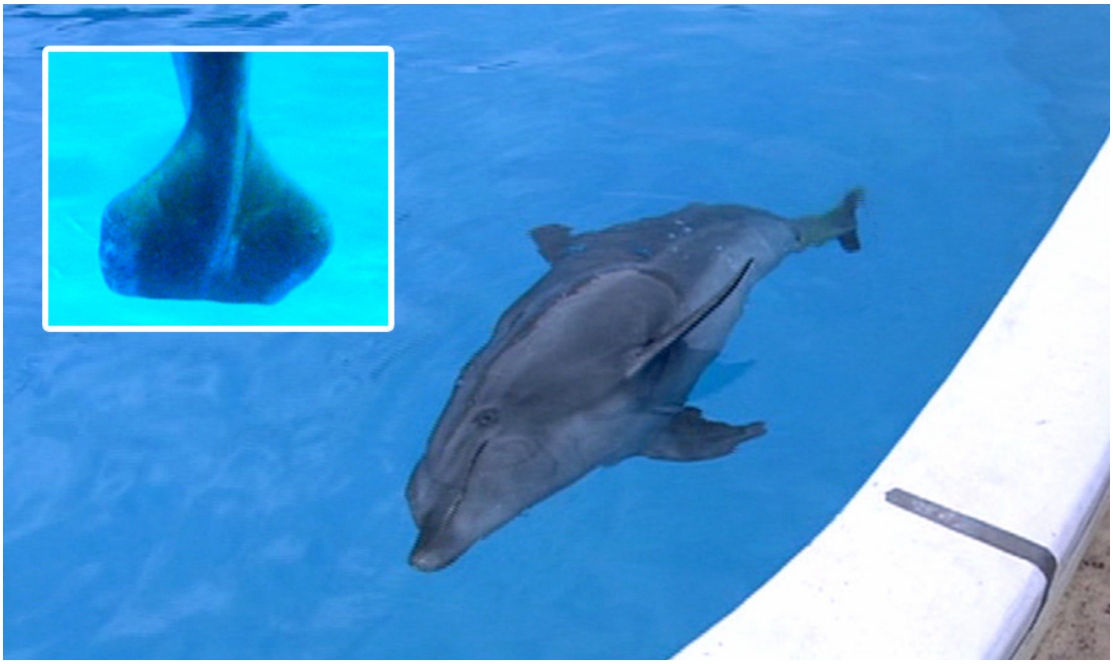
「フジ」に人口尾ビレをプレゼントするため、ブリヂストンタイヤの研究チーム、造形家、飼育スタッフ、獣医の人たちが知恵を絞り合いました。その詳細は、松山ケンイチさん主演で映画化された「ドルフィンブルー」をはじめ、NHK 制作のドキュメンタリー「ひれをもらったイルカ」、さらには映像作品ばかりでなく、「しっぽをなくしたイルカ」（岩貞るみこ）、「とべ！人口尾ビレのイルカ『フジ』」（真鍋和子）などの子供用ノンフィクションにも詳しく描かれています。

かくいう私も、これらの情報を得て、はじめて「フジ」の存在を知ったという次第です。

2016 年２月、沖縄の座間味へ「エスコート号」（ホエールウォッチング船）と、そのオーナー佐野さんご夫婦の取材にうかがった私は、その足で「美ら海水族館」と連絡を取り訪問することにしました。

ところが、「フジ」は昨年の 11 月１日に亡くなったと言います。

４ヶ月早くフジのことを知っていれば、彼女の姿だけでも見ることができたと思うのですが、未練がましく「フジ」のことを聞いていると、電話に出られた方が、「しばらくお待ちください」と、獣医の植田啓



人口尾びれを装着する前の状態（美ら海水族館ビデオ動画より）

ーさんに繋いでくれることになりました。

植田さんは、壊死していく「フジ」の尾ビレを手術された医師で、その後、落ち込んで浮いているだけの「フジ」に人工尾ビレをつくろうと、ブリヂストンタイヤに働きかけた人物です。

人工尾ビレの話はあとに譲るとして、ここでは、「フジ」というバンドーイルカについて、また、どのようにして尾ビレを失ったのか、その辺の話を紹介していきたいと思います。

1975 年7月 20 日から開催された沖縄海洋博は、183 日間の会期を経て、翌年1月 18 日にその幕を閉じました。海洋博の会期終了に伴い、海洋生物の展示館は「国営沖縄記念公園水族館」として海洋博公園内の敷地で再出発することになります。そして、その再出発に伴い、内田詮三館長のふるさとである伊豆の海から、7才（推定）雌のイルカが移されてくることになったのです。

それが「フジ」—— 富士山の見える海から来たので「フジ」と名付けられたバンドーイルカです。

フジは 2 年後の 1978 年、長男の「リュウ」を出産しました。その 11 年後の 1989 年には、長女「コニー」を、1995 年には次男「チャオ」を出産し、3頭のお母さんとなったのです。

フジは水族館では、結構、気ままでへそ曲がりのイルカだったようです。これも人間から見ての話しですが、新米飼育員な

美ら海水族館のある国営沖縄記念公園

どは「フジ」にからかわれ、言うことを聞いてもらえないこともしばしばだったようです。したがって芸をするには向いていませんでした。ところが子育ての面では、しっかり者の母さんという感じで、いつも子どもたちのそばに付き添って泳ぎ、狭い水族館の壁に子どもたちがぶつからないようガードしている、そんな頼もしいお母さんぶりを発揮していました。

さて2002年11月1日「国営沖縄記念公園水族館」は「美ら海水族館」としてリニューアルオープンすることになりますが、そのオープンを半月後に控えた10月16日、フジの尾ビレが壊死を起こしていることが判明しました。壊死の進行は速く、「このままでは」というので、原因の分からないまま、10月25日 、第1回目の手術が実施されました。壊死した尾びれを削除する手術でしたが、それでも壊死の進行は止められなかったそうです。

植田獣医は、沖縄県立北部病院の嘉陽医師に協力を仰ぎ、11月7日、第2回目の切除手術に臨みました。植田獣医と嘉陽医師の二人で、「フジ」の左右の尾ビレの4分の3を思い切って切除するというものです。

結果、手術は成功し、壊死の進行を止めることができました。ただ尾ビレの4分の3を失い、「フジ」は泳ぐことのできない、ただ浮いているだけのイルカになってしまったのです。

座間味島からの午前のフェリーで那覇港へ到着、美ら海水族館を目指す

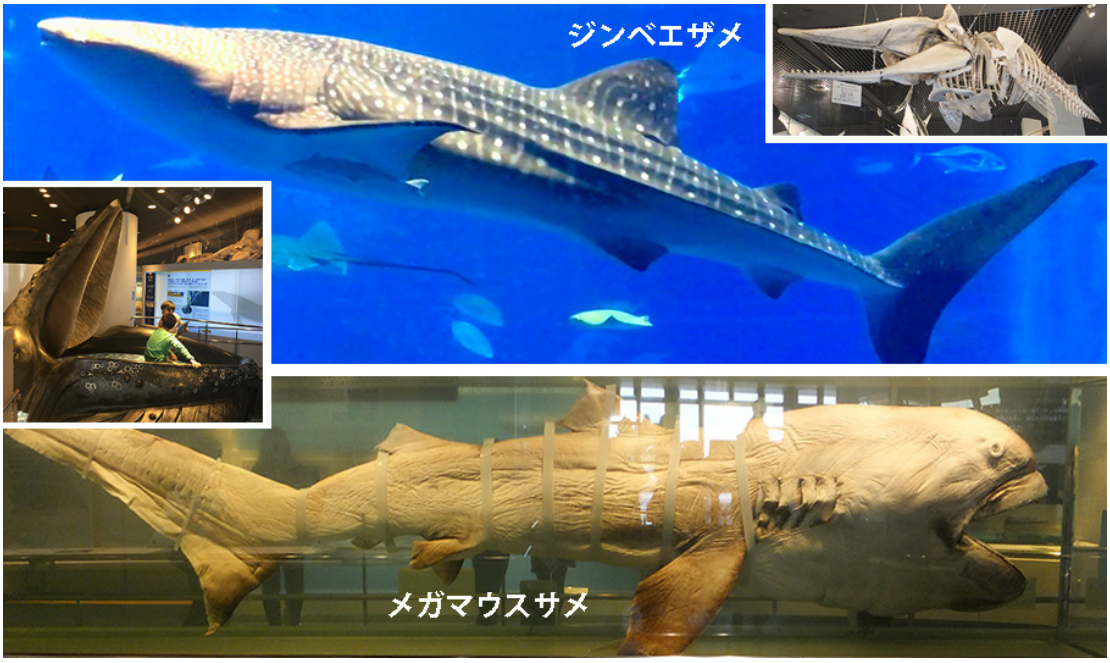
2. フジと古網雅也さん

美ら海水族館は沖縄の北西部、本部（もとぶ）半島の先端近くにあります。これに対し那覇は沖縄の南部西海岸に位置し、那覇から美ら海水族館に行こうと思うと、南北に長く延びた沖縄島のほぼ３分の２をバス移動しなければなりません。その間、ほぼ３時間ちかくをバスに揺られてやっと記念公園前にたどりつくという寸法です。沖縄の最北端から最南端までほぼ400キロ、どうして鉄道がないのでしょうか。

戦前は軽便鉄道もあったといいますが、沖縄戦で破壊されてしまいました。戦後はアメリカの統治下に長くあったわけで、その間、米軍は道路網の整備に精力を注ぎ、沖縄を車社会に変えてしまったということです。今は、那覇市内はモノレールが敷かれていますが、これが隣接する浦添市まで延長される予定で、将来は北部の名護まで計画に入っていると言います。沖縄本島の南北がモノレールで結ばれる日も近いと考えていいのでしょうか。

話が沖縄の交通網の話にそれてしまいましたが、この日、私は、沖縄本島の南、座間味島からフェリーに揺られ、バスに揺られ、揺られ揺られて「美ら海」までやってきたわけです。少しばかり、「なぜ、沖縄には鉄道がないんだ！」と、愚痴っぽくなるのをお許しください。

いくら「船酔いには強いんだ」と胸を張りましても、やはり疲れました。しかも時



美ら海水族館の誇る展示物（世界で初めて長期飼育に成功したジンベエザメ／メガマウスサメの標本）

間は夕方近く、今日は記念公園近くのホテルで、おとなしく一泊することにしました。

翌日、体力も回復し、朝８時半の開館を待ちかねて、美ら海水族館に駆け込みました。

前日、ホテルから獣医の植田さんに電話連絡したところ、明日は終日那覇に出かけているため不在とのこと。「フジ」のことなら、動物管理チームの古網主任に会うよう勧められていました。植田獣医には、大阪から電話取材していることもあり、あきらめざるを得ません。むしろ「フジ」に尾ビレを付ける訓練を直接担当された古網さんに会える、そのことが自分の中で大きく膨らみ、はやる気持ちを抑えて入館した次第です。

右の写真は「フジ」が存命中に使っていたプールです。このプールで、当時、新米飼育員だった「古網雅也」さんと、尾びれを失ったイルカ「フジ」のドラマが展開しました。そして、まさに、ここが古網さんが指定した待合場所というわけです。

このプール前で古網さんの仕事が一段落するのをしばらく待ちます。

ところでこのプール、僕が訪ねた頃は、幼いイルカたちの住みかになっており、こんな看板が出ておりました。

「仔イルカ経過観察中（平成 26 年6月4日生まれ）

①ガラスをたたかないでください。

②カメラ撮影の際にはフラッシュを使用

「フジ」が存命中に使っていたプール

しないでください。

動物への影響を考慮し、最低限の清掃をおこなっています。」

のぞき窓からは好奇心いっぱいのイルカの子どもたちが、目をキラキラさせながら逆に人間たちを観察していました。なんのことはない、こちらが観察されているわけです。

しばらくして古網さんがグレーの作業服で現れました。

本の写真などで見ていた古網さんは、がっちりした精悍な感じの青年でしたが、今、こちらを目指しニコニコしながら歩いてくる姿は、どちらかというと人の良さそうな、ホンワカした温かい感じのおじさん

です。写真で見たような、茶目っ気はあるが、どこか「とがった感じ」が抜けない、そんなイメージはまるっきり感じさせません。

そりゃあ、そうですよね、フジが尾ビレをなくしたのは 15 年も前の話ですものね。それともイルカとずっと付き合っているせいもあるのでしょうか。そうですね、きっとそうに違いありません。

オキちゃん劇場はフジのプールのすぐ横手にある

こちらがそんなことを思っている間にも、古網さんは、歩きながら「フジ」のことや、今は「フジ」の子どもたちが、「オキちゃん劇場」（イルカやオキゴンドーのショー）で頑張ってくれている話をしてくれています。

「オキちゃん劇場」では、一頭のイルカが5メートル近くもあるようなターゲットに向かって驚くようなジャンプを披露していました。ひょっとして、あれは「フジ」の娘、「コニー」なのかも――。

「フジ」のことに話を戻しましょう。

2003 年２月、ブリヂストンは「フジ」の人工尾ビレ開発の意思決定をし、これに伴い、加工品技術開発本部の加藤信吾さん、斉藤真二さんの二人が、神奈川県の八景島シーパラダイスを訪ねました。イルカの皮膚を体感するためです。このときの触感で、二人はイルカの皮膚を、ゴムの硬さでは 70 度くらいと判断したそうです。

そして、その５ヶ月後の７月５日、ブリヂストンの加藤さんと斉藤さんが、「フジ」の尾ビレの型どりのため、初めて美ら海水族館を訪ねることになりました。

このとき、フジの尾びれの型どりが海獣課のスタッフ総出でおこなわれました。

これより古網さんと「フジ」の接触がはじまります。人工尾びれの完成を待つ間、フジが人工尾びれの装着をいやがらないよう「異物の装着訓練」が開始されたのです。

スタッフの一人がテープでリングを作り、それを「フジ」の尾っぽに装着する。次には布をふんどし状にして着けてみる。こう

（映画「ドルフィンブルー」の1シーンです。この中に飼育員の古網さんがエキストラ参加しています。

して少しずつ「フジ」が人工尾ビレをいやがらないよう訓練していくという寸法です。しかし、この訓練に携わった古網さん、頑固な「フジ」に水をかけられたり、なかなかすんなりと言うことを聞いてはくれませんでした。

そして2003年9月20日、人工尾びれ第一号が到着しました。このときは、「フジ」のプールの水を抜いて、人工尾ビレを装着しやすいようにし、装着した後にプールに水を満たすという作戦がとられました。

古網さんが人工尾ビレの装着にチャレンジしますが、水をかけられ反撃される始末。

「まだ古網には無理だ」、そんな声がスタッフの間から起こります。

そこで古参のスタッフが「これ、怖くないよ」と、人工尾ビレを着ける前に、まず「フジ」の目の前に持っていき笑顔で説明します。すると「フジ」は納得したのか、おとなしくしているではないですか。そこですかさず古網さんが古参のスタッフを手伝い、人工尾ビレを靴のようにして履かせ、ベルトで固定しました。

「フジ」は、おとなしくじっとしています。

装着が完了し、プールに海水が戻されます。

ところで普通の水族館では、プールに張る水を消毒して何度も循環させて使いますが、美ら海水族館は、海に面して作られているため、プールに張る海水には苦労しません。文字どおり「湯水のように」海水を使います。このためプールがいつも清潔

で、「フジ」の手術後も、傷口から「ばい菌」が感染することもなく順調に回復することができました。

今、その海水が、「フジ」のプールに満たされていきます。

果たして「フジ」は泳ぐことができるのでしょうか？

大成功です。「フジ」が、尾びれを失ってから初めてのドルフィンキック。尾ビレを上下に振りながら泳いでいます。

ただ問題点が見つかりました。

人工尾ビレ1型の問題点

①全体に厚すぎて水の抵抗が大きくなる。
②フジの尾びれに傷が付いてしまいました。
③ゴムが硬すぎて水となじみにくいよう。
④取り付けがバンドを巻き付ける方式で、時間がかかりすぎました。

たしかに見た目でも、洗練された「イルカの尾ビレ」とは縁遠いようなフォルムです。

これら反省点を踏まえて、早速、2型の製作にかかります。

それから約二ヶ月近くたった 2003 年 10 月の末、早くも人工尾びれの2型が、ブリヂストンの加藤さん、斉藤さんによって持参されました。

これは大失敗！

1型よりも、もっと激しく尾びれを振らないと前へ進まないのです。ゴムの硬さをもっと研究の必要があるようです。さらに人工尾びれがフィットしていないため、隙間に水が入り込み泳ぎにくくなっています。これは型どりの時、「フジ」が暴れたのが原因で、実際のものより大きな型ができてしまったためだと言います。

型から作り直す必要がありました。そこで、獣医の上田さんの友人で大阪の造形家・薬師寺一彦さんが型どりをすることになりました。薬師寺さんは、造形化としての繊細な感覚で、実際にフジの尾びれを手で探りながら彼女にピッタリとフィットする型を作り上げてくれました。

こうして 2004 年 3 月 19 日、ブリヂストンタイヤの加藤さんらが、改良型の尾びれを持って水族館を訪問してくれました。今回は、水族館で亡くなった「フジ」の仲間「トク」の標本を参考にして作った自信作を携えています。ゴムの硬さも 40 度のものと 70 度のものの2種類を用意してきたのですが、どちらも水の中でしなりすぎ、うまく前へ進めませんでした。

このあと、取り付け方法もバンド方式からクロスバンド方式へ。さらに肩当てのパットを付けるカウリング型（かぶせるという意味）へ、ゴムの硬さも一様ではなく、部分的に芯を入れることで硬くしたりと改良が繰り返され試されますが、同時にフジの回復も目覚ましく、病み上がりの弱々し

「フジ」にフィットした人工尾びれが遂に完成

いフジではうまくいっても、完全に勢いを取り戻したフジが思いっきり泳いだりジャンプすると壊れてしまうことが多くなってきました。

2004 年9月 23 日には、尾びれを失ってからできなかったジャンプに初めて成功します。しかし、着水したと同時に新型人工尾びれはバラバラに砕け散り、フジもその破片で傷つくという事故が起こってしまいました。

計画は暗礁に乗り上げます。

古網さんの心の中に、「俺たちは、フジにジャンプを強制していないだろうか」「これでフジがつぶれたら元も子もない」「人工尾ビレが本当にフジのためになっているのだろうか」、そんな疑問が次々と湧き上がってきて、一時は植田獣医に開発の中止を進言したほどでした。

しかし、そんな疑問を吹き飛ばすように、「フジ」は、娘の「コニー」がジャンプする姿を見て、無いはずの尾をしきりに振りジャンプしようとするのです。

獣医の上田さんは決断しました。ジャンプは自発的だ。フジは飛びたがっている。それならジャンプでも壊れない尾びれを目指そう！　古網さんの疑問も吹っ飛び、今度は、古網さんが「フジ」の直接の担当となって、人工尾ビレの開発と平行し「フジ」のトレーニングが続きます。

2004 年 10 月 16 日、カーボンファイバーとグラスファイバーを組み合わせてつかってみましたが、これもジャンプでヒビが入り壊れてしまいました。

2004 年 11 月 21 日のテストでも壊れ

カウリング型人口尾びれが完成し試着

しまいました。

「フジのパワーに負けない尾びれを」、この言葉を合い言葉に開発が続き、ついに2004 年 12 月 18 日、今回は今までにないまったく新しい材料を芯に使った尾ビレが誕生しました。

しかし、今回の尾ビレが、成功してもダメでも、開発は一応切り上げるという決断がされています。

いよいよ最後のチャレンジです。

今では、「フジ」は古網さんを信じ切っており、二人の意気もピッタリ、尾ビレの装着もスムーズに進みます。

スタッフが固唾をのんで見守るなか、ツイスト、続いて回転、そしていよいよ

「ハイジャンプ、行きまーすッ！」

古網さんの声があたりに響き、ついでハイジャンプのターゲットが空高く掲げられました。

「フジ」はいったん水中深く潜るや、勢いをつけ水面を目指します。やがて、水面を割り「フジ」の頭が顔を出したかと思うや、水滴をまき散らしながら灰色のからだ全体が宙空を駆けのぼっていきました。

大成功です。ターゲットを目指し「フジ」の会心のジャンプが披露されました！

開発の開始から実に 1 年と 10 ヶ月、とうとう壊れない「フジ」にフィットした人工尾びれが完成したのです。

この後、「フジ」は 10 年生き続け、子どもたちや障害者たちを励まし続けました。

そして、2014 年 11 月 1 日、感染性肝炎のため、45 才（推定年齢）で亡くなりました。

果たして彼女の人生は幸せだったのでしょうか？　そんなことは人間に分かるはずはありませんが、少なくとも人間や社会を恨んでいたわけではなく、彼女の生きた環境の中で「子どもたち」を育て、「人」との友情を育み、彼女にあたえられた人生を精一杯生き切ったと感じるのです。

イルカと人との関わりについては、ただ「かわいい」だけでは済まされない複雑な問題が絡んでいます。しかし、だからこそ、「人間」が「自然」とどう接し、どう向き合っていったらいいのか、そのヒントをイルカさんが投げかけてくれているように感じてしまいます。

10. 東京都　小笠原／モッチーニと望月昭伸さん

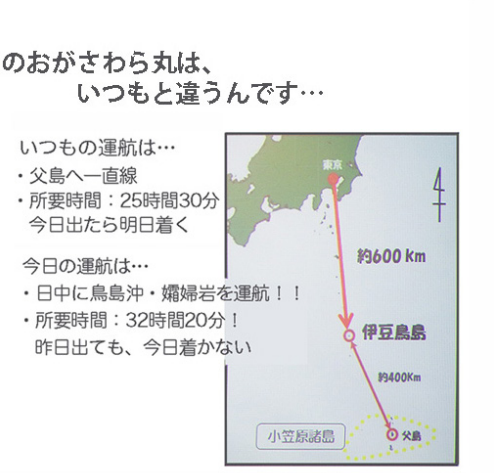
東京竹橋桟橋から小笠原諸島・父島を目指し出稿準備中の「おがさわら丸」

1. 鳥島周回航路

1966 年、ザトウクジラおよびシロナガスクジラが、国際捕鯨取締条約に基づき禁漁となりました。禁漁以降、小笠原諸島へは次第にザトウクジラが戻ってくるようになり、そして 1987 年、写真家・望月昭伸さんが小笠原ではじめてザトウクジラの水中撮影に成功するにいたったのです。

以来、望月さんは、クジラを「天からあたえられた被写体」として、世界のクジラやイルカたちを撮り続けてこられました。

その望月さんが、1999 年 3 月 20 日、小笠原の母島沖でザトウクジラの水中撮影中に行方不明となったのです。事故当初は生存の可能性も伝えられたのですが、結局は、遺体はおろか、愛用のカメラさえ見つけることができず、その生存は絶望視されるに至りました。



今回は、小笠原に、望月さんが無名時

代だったころからの盟友森田さん（小笠原ダイビングセンター）や、ホエールウォッチング協会を訪ね、望月昭伸さんのこと、彼の名前が付けられたザトウクジラ「モッチーニ」のこと等々を紹介していきたいと思います。

2016 年 4 月 19 日 21 時 40 分、竹島桟橋発の「おがさわら丸」に乗船、いざ小笠原の父島を目指します。乗ってみて教えられたのですが、今回は通常の航路ではなく、「鳥島」や「孀婦岩（そうふ）」へと立ち寄り、それら島の周囲を一回りし、その後、小笠原へ向かうというのです。このため、通常 25 時間 30 分の航路が、32 時間 20 分かかるといいます。予約時点から「随分時間がかかるなあ」とは思っていましたが、まさか、こんな特別プログラムになっていたとは気付きませんでした。

おかげで「鳥島」の「アホウドリ」についても、船内のレクチャーや、遠望ではありますが貴重な観察をさせていただき、自然と人間の向き合い方についても深く考えさせられた次第です。

昔、北大路欣也主演の「漂流」という映画を観たことがあります。鳥島に漂着した主人公が、生きるために「すまぬ、すまぬ」と口走りながら「アホウドリ」を棒きれで撲殺していくシーンが忘れられません。この無人島では水にしろ、食料にしろ、無数に生息するアホウドリを殺して手に入れるしかなかったのです。

人間に対する警戒心もなく、おまけに

船上からアホウドリの営巣地が遠望できました

陸ではヨチヨチ歩きしかできないアホウドリは、飢えた漂流者の格好の餌食となりました。

ところが漂流者だけならまだいいのですが、明治にはいるや、羽毛の原料として「アホウドリ」がターゲットになりました。ヨーロッパの羽毛布団の原料として、集団で営巣するアホウドリに目が向けられたのです。こうして「アホウドリ」は日本にとって貴重な外貨獲得手段となり、鳥島だけで推定500万羽の「アホウドリ」が、人間の欲の犠牲になっていきました。

明治期、鳥島にはアホウドリの羽毛採取のため、125人ほどの島民がこの仕事に従事していましたが、1902（明治35）年の鳥島噴火により全員が死亡するという悲惨な事故が起こりました。この後も、牧牛を主体としながらアホウドリの羽毛採取の事業が続けられていましたが、これも1939（昭和14）年の噴火で壊滅します。

やがて太平洋戦争が終わり、1949年、アメリカの鳥類学者が鳥島を調査した結果、一羽のアホウドリも見つけることができませんでした。

これにより、いわゆる「アホウドリ絶滅宣言」がなされたのです。

――――――

ところがです。1951年になって、鳥島で繁殖しているアホウドリが再発見されたのです。

乱獲から転じて「アホウドリ」は、今度は保護される対象になりました。それもつ

鳥島から聟島へのアホウドリの移住計画

かの間、1965 年の火山性群発地震により、保護観察をおこなっていた測候所が鳥島を撤退することになり、この活動も休止することとなってしまったのです。

おがさわら丸は予定通り、翌 12 時 40 分頃、鳥島の見える海域に到着しました。

いよいよ、これから 1 時間かけて鳥島を周回します。

鳥島は全島面積 4.79 ㎢、直径 2.7km、標高は硫黄山で 394 メートルという小さな火山島です。ここにアホウドリの大群が生息し、その羽毛を目当てに、人々が移り住み小さな集落を作っていました。

明治、昭和の噴火活動で、今は無人島になっていますが、周回途中、溶岩が海へ流れ落ちた痕を見たり、かつて島民が住んでいた集落跡を遠望したりと、あっという間に時間が過ぎていきました。

鳥島に残されたアホウドリの営巣地も視認しましたが、昔、映画で見た驚くようなアホウドリの大群とはちがい、群れが細々と生き残っている、そんな感じでした。

このアホウドリの群れを、火山噴火の恐れのある鳥島から安全な地域に移住させようとする計画があります。

選ばれたのは、鳥島から南に約 350 ㎞、小笠原諸島の聟島（むこじま）です。計画は 2008 年から開始され、5 年間で、のべ 70 羽のひなを移送し、死んだ 1 羽をのぞく 69 羽すべてが巣立ったと言われています。さらに 2016 年には、人工飼育個体が初めて聟島での繁殖に成功したと言います。

太平洋にぽっかり突き出した火山島・嫦婦岩

アホウドリたちは、日本の経済発展という人間の都合で殺戮されていきました。それを今度は絶滅から救おうと立ち上がった人たちがいます。それはそれで、すごく感動的で素晴らしいことだと思うのですが、ここへ来る少し前、岡山県美作の鹿の処理場へ行ってきたことがあり、その時のことを思うと素直に喜ぶことができないのです。

鹿肉を処理する工場ですが、そこで美作市の職員の方のお話しを聞かせていただきました。

そのお話しによると、野生の鹿の個体数が減り、美作でも鹿の姿が山から消えてしまったことがあるそうです。そんなとき、子連れの母親鹿があらわれ、やれ保護だ、やれ繁殖だと、県をあげて野生の鹿を保護する取り組みがおこなわれました。そうして起こったのが、野生の鹿が増えすぎ、植林を食い荒らすという「食害」という問題です。その被害は捨ておけず、今度は、保護どころか、鹿に賞金をかけて捕殺するという結果になってしまいました。

アホウドリは、人のいない無人島で繁殖してきました。そこへ人さまが人間の都合で割り込み殺戮の限りを尽くしました。

新たな移住地も、人に荒らされない無人島です。でも逆に、アホウドリが、人の生活する町や村で大繁殖したらどうなるのでしょうか？　人間の生活を脅かさないという暗黙裏の了解のうえに「保護」があるのでしょうか？

孀婦岩から離脱するなり、陽が太平洋に沈んでいった

今、「動物愛護」という「上から目線」でなく、「動物の権利」を考えるという新たな発想が芽生えはじめていると言います。クジラやイルカの問題、鹿の問題、アホウドリの保護等々、これから人間は、自然とどう接していくのかを、本当に考えていく時期に来ているように感じます。

まだ「答え」は霧の中ですが……。

そんなことを思っている内に、おがさわら丸は、鳥島海域を離脱し（14:00）、次なる目的地「孀婦岩（そうふ）」へと向かっていきます。孀婦岩へ到着するのは、２時間後ということです。

ところで、この孀婦岩というのは、鳥島の南約 76km に位置し、標高 99m、東西 84m、南北 56m の孤立した岩の柱です。これを調査したイギリス人は、旧約聖書で神の指示に背き「塩の柱」に変えられた女性に似ていると、「ロトの妻」と名付けました。確かに、映画「ソドムとゴモラ」で見た「塩の柱」に似ています。この命名を意訳し「孀婦岩＝そうふがん」という名称があたえられました。

なお、この孀婦岩、気象庁により活火山とされているそうです。

さて、この孀婦岩への到着、島の周回で二日目のプログラムが終了し、明日の朝は、いよいよ小笠原到着です。

小笠原二見港到着／右の写真は宿泊先の「プルメリアヴィレッジ」

2. 小笠原ダイビングセンター

竹橋桟橋を出航して三日目の朝、2016年４月21日早朝６時、おがさわら丸は予定通り、父島二見港に到着いたしました。まずは小笠原滞在中の宿泊先「プルメリアヴィレッジ」に荷を下ろし一休み。施設にはベッドに冷蔵庫、洗面台、トイレとユニットバスが付いており、食事は本館ヴィラシーサイドの食堂を利用します。洗濯機・乾燥機も共用スペースにあり、一般的な３泊（普通は船中２泊、小笠原村での滞在３泊）の滞在には充分です。

一休みしたあと朝食をとり、いよいよ取材開始です。

真っ先に向かったのが、二見港のすぐ近くにある小笠原ダイビングセンター。写真家・望月さんが小笠原の鯨類撮影のベースとしたダイビングセンターです。

ここのオーナー森田康弘さんは、望月昭伸さんが小笠原のクジラを撮影したいと、小笠原を訪問した頃からの盟友です。その森田さんにインタビューした記事を以下に掲げさせていただきます。

森田さんが小笠原へ来たのは30年ほど前（1985年頃）のこと。その同じ頃、望月さんも小笠原へ来てクジラの撮影を始めたと言います。

この頃、小笠原には、母島にまだ捕鯨基地がありました。ザトウクジラやナガスクジラは早く禁漁になっていましたが、ニタリクジラやイワシクジラについては、母

小笠原ダイビングセンターとオーナーの森田康弘さん／右上は望月さん愛用の同機種のカメラ

島を基地に捕鯨活動が続けられていたのです。

それも、1988 年には捕鯨活動がすべて終了するに至り、その翌年、小笠原でホエールウォッチング協会が立ち上げられました。小笠原をあげて、「捕るクジラ」から「見せるクジラ」へ方向転換することになったのです。

ところで、小笠原ダイビングセンターの先代社長の古賀さんと望月さんは知り合いだったようで、その古賀さんを頼って、望月さんが小笠原へとやってきました。

その頃、望月さんは、マリンダイビング・水中造形センターの専属カメラマンだったのを、2 年ほど前に独立したばかりでした。そして自分のライフワークとして「小笠原のクジラ」を撮りたいと、古賀社長を頼って小笠原へやってきたのだと言います。

当時はまだ、海外のクジラを撮るカメラマンはいましたが、日本のクジラを撮る人間はまだ誰もいませんでした。

そこへ「日本の鯨類を撮るのに一番いいのは小笠原ではないか」と、望月さんがダイビングセンターの先代社長古賀さんにアプローチしてきたのです。

古賀社長も、「来年からは、この小笠原でホエールウォッチングがはじまる。ぜひ一緒に盛り立ててほしい」と、望月さんに協力を約束しました。

これ以降、毎年、一ヶ月から一ヶ月半ぐらい、クジラの生態調査を含めて船を出すことが決められました。その相棒が小笠原

小笠原のホエールウォッチング／右上はホエールウォッチング協会の岡本亮介研究員

ダイビングセンターに勤めたばかりの森田さんだったというわけです。しかも、望月さんが小笠原滞在時は、相棒の森田さんのアパートに居候を決め込むという状態でした。というのも、望月さんは独立してまもなくの頃で、子供さんも小さく、要は取材費用にもこと欠く状態だったのです。森田さんは森田さんで、好きなダイビングで飯を食うため、東京の自動車会社を辞め、小笠原ダイビングセンターで丁稚奉公のように働いていた時期でした。二人ともに金がない。そこで夜は、二人でカップラーメンをすすり、翌早朝には海へ出てザトウクジラを探し撮影するという日々が続きました。

ところが、先ほども述べましたように、ザトウクジラは禁漁になっていたのですが、ニタリクジラやイワシクジラは、まだ獲られており、母島で解体されていた時期があります。ザトウクジラにしたところで、仲間の殺される叫び声が聞こえてくるわけで、そのせいか、今ほどクジラはフレンドリーではなく、人間や船が近づくとサッサと逃げてしまうことが多かったのです。だからクジラを探すのも大変で、そんな中、望月さんが一人「日本のクジラの水中写真を初めて撮るんだ」と勢い込んでいたのだと言います。

そんな頃（1990 年）、古賀さんをはじめ小笠原の有志で、ハワイへ先進のホエールウォッチングを学びにに行くということになりました。そして、その翌年には、今

望月昭伸さんが撮られたザトウクジラの写真（「クジラの棲む青い地球―望月昭伸写真集」から転載

度はハワイの学者さんが、WWF（世界自然保護基金）という組織を通じて小笠原にザトウクジラの調査のために訪問してきたのです。個体識別をおこない、ハワイ、カリフォルニアで観察される個体と小笠原に共通しているザトウクジラの個体で合致するものがいるのかを調査するためだと言います。

そのために尾ビレの撮影や、ザトウクジラの音声調査がおこなわれました。ザトウクジラは、一頭一頭、尾ビレの模様や形が異なります。その尾ビレを観察し、歌うクジラといわれるザトウクジラの歌声を録音し、ハワイ、カリフォルニアと共通の個体がいるかを調べるのです。

小笠原のホエールウォッチングは、このとき来たハワイの専門家から、ホエールウォッチングの仕方、クジラへのアプローチの仕方を教えてもらい著しい進歩を遂げました。望月さんもその一行に同行してクジラへのアプローチの仕方を学んだのです。ただ結論を言うと、小笠原にはハワイ、カリフォルニアと合致する個体は非常に少なく、むしろ沖縄と小笠原で共通する個体が多いことが、今では分かっています。

こうして、スキルアップした望月さんは、

その言葉通り、世界ではじめて日本のザトウクジラの水中撮影に成功し、「クジラは天からあたえられた被写体」とばかり、鯨類撮影の草分けとなっていくのです。

以下の文章は、生前、望月昭伸さんご自身が書かれた文章です。望月さんが亡くなった同じ年の７月、「クジラの棲む青い地球―望月昭伸写真集」（1997 年　コアラブックス発行）に付録として挟み込まれて公開されました。今回、小笠原ダイビングセンターの森田オーナーに取材させていただいた記事を裏付ける内容になっています。

「私が初めて小笠原のザトウクジラの撮影に取りくんだのは、1987 年のことだった。当時、日本では、まだだれもホエルウォッチングをやったことがなく、どうやってクジラを探したらいいのかもわからなかった。地元のダイビングサービスの人と、ほんとうにゼロから始めて、クジラへの近づき方や、撮影の仕方を体得したのである。父島の西側の崖の上で私がクジラを探していたら、“ 自殺志願者がいる ” と通報され、警察官が駆けつける騒ぎとなった。なつかしい思い出である。

私はクジラの撮影ではひじょうにツイていて、初めの年から６頭の交尾集団の撮影に成功した。巨大なクジラの雄たちが雌を争ってくりひろげる戦いのすさまじい迫力。そのときの強い印象が、クジラの撮影が私のライフワークとなるきっかけだったのだと思う。クジラの撮影をしていて、彼らの巨大さを思い知らされるような体験を何度もしている。

あるとき、クジラが私たちの小さなボートの真下で鳴いていた。歌うような不思議な鳴き声が海面から響いていた。水中マイクを通さずにじかに声が聞こえるのはひじょうに珍しいことである。潜水具をつけて水中に入ると、クジラの鳴き声が電気のような衝撃となって、ビリビリと足の先から頭まで走った。まるで海全体が鳴いているようだった。

母クジラの巨体に接触してしまったこともある。私は子クジラが1頭で泳いでいるのを水中撮影していた。好奇心旺盛な子クジラがどんどん私に近づいてきてしまった。そのとき、突然、足の下の深い海から、わーっと母クジラが浮上してきて、私

陸揚げして整備中の「韋駄天Ⅲ」と森田船長の操船する「韋駄天Ⅲ」

と子クジラの間に割りこんできた。私も初めてクジラに対するほんとうの恐怖を感じて、思わず後ずさりをした。しかし、私も、母クジラも避けきれず、母クジラの胸ビレが私の足の裏にふれた。やわらかくしなる、しかし固い感触が、いつまでも私の足の裏に残っていた。」

翌日、森田さんの持ち舟「韋駄天Ⅲ」に乗船させてもらい、小笠原の海へ乗り出しました。そこで、望月さんの遭難について興味深いお話しをお聞きすることとなったのです。

望月さんが撮ったザトウクジラの母子の写真が、小笠原ダイビングセンターに飾られています。この写真も、望月さんの死後発行された「クジラの棲む青い地球―望月昭伸写真集」（1997 年発行）に収録されており、このブログにも転載させていただきました。セーリング中、この写真について森田オーナーから、我々素人が聞いても「なるほど」と胸落ちする話しをうかがいました。

以下に森田さんにお話を伺った要約を記させていただきます。

◇

望月さんはクジラに対して恐怖心を持っていました。潜るときも「気合いを入れないと怖くて撮れない」と常々語っていました。僕は何度も彼と一緒に海の中へ入っていますが、生きものに対してソフトにアプローチする人と、ワイルドに接する人がお

小笠原の海は、まるで夢のなかの出来事のよう

り、望月さんは後者だと思います。

望月さんはクジラに対する恐怖心を押し殺し、自分を奮い立たせ果敢にクジラに向かっていくんです。泳ぎ方も非常に早いのです。僕なんかはスピードを上げるとクジラにプレッシャーをかけてしまうと思い、できるだけゆっくりと泳ぎ、クジラが寄ってきてくれたらオーケーだくらいに思っています。クジラに向かう角度も、我々はクジラと平行に泳ぎ、クジラにプレッシャーをかけないようにします。これに対し、望月さんは、クジラに対し向かっていくんです。クジラの歌声を真似たりもします。それをやると、ワーッと寄ってくるクジラがいたりします。

こういったことを「おもしろがる」クジラも確かにいるし、こういうクジラに出会ったときは、実にいい写真が撮れるんです。

この写真（119 ページに掲載したザトウクジラの母子の写真）なんかもそうですが、ちょっと考えてほしいんです。これ、ザトウクジラの親子なんですけど、４メーターぐらいの距離まで近づいて撮っています。水中の鯨を撮るときはクジラとの距離が遠くても 10 メートルが限度です。これ以上離れると、写真として使い物になりません。

水中では地上みたいに望遠レンズが使えないんです。水の透明度もその年によって違うんですが、透明なときでも水の中は深くなるほど暗いし、望遠を使っていたら、泡や浮遊物ばかりが写って肝心のクジラを

南島周辺、まるで昔観たミュージカル映画「バリハイ」を思わせるような風景

撮ることができないんです。だから望遠ではなくワイドレンズを使い、思いっきり寄っていって撮るんです。

思いっきり寄って撮れた写真は、クジラの描写が、今まで見たことのないような鮮明さで写るんです。それが彼が使っていたカメラとレンズの特性です。

ところが、いつも彼のようなやり方を「おもしろい」と思うようなクジラばかりとは限らないんです。

◇

ところで望月さんの遭難時は、森田さんは同行していませんでした。それでもあえてお話をうかがうと、望月さんの最後の模様を次のように推測してくれました。

「彼は寄り添って撮るカメラマンではない。思いっきりワイドレンズを使い、思いっきり近づいて撮るタイプのカメラマンです。クジラは、足びれを止め浮いているだけの者は敵とみなさないが、スピードを上げ近づいてくる存在は敵とみなす習性がある。遊び心のあるクジラで、それを許すクジラもいるが、執拗に付きまとわれると、胸ビレを大きく振って追い払われる場合だってある。そのときは、ゆっくりな動きなのですが、それでも海の中で電信柱を振り回しているようなもので、しっかり目を開いていれば避けられるのだが、撮影に夢中になっていたりすると、この胸ビレの直撃を受ける場合もある。おそらく望月さんの事故はこういう状況だったのでは、と思われます。」

「韋駄天Ⅲ」に乗船させてもらい、望月さんの最期の様子も、おぼろげながら想像できるようになりました。船上ではザトウクジラを観察したり、水中カメラを船体に沿っておろし、船体を共鳴体にしてクジラの音を録音することもできました。

小笠原の海は、まるで夢のなかの出来事のようで、気づけば５時間近くセーリングしていたことになります。

いよいよ下船――現実に帰る時間がせまってきたようです。

明日は、小笠原海洋センターやホエールウォッチング協会を訪ね、望月さんにちなんで名付けられた、ザトウクジラ「モッチーニ」の足取りを追うことにします。

モッチーニの母親 O-46 の尾ビレ（小笠原海洋センター提供）

3. モッチーニのこと

いきなり「モッチーニ」と言われても、分からない方が大半だと思います。まるで「お餅」をイタリア語で言ったような感じで、僕などは、最初に聞いたときは、マジで「お餅の入ったピッツアか?」と思ったくらいです。

でも、モッチーニといえば、小笠原でもっとも有名なザトウクジラなのです。

前回、日本で初めてザトウクジラの水中写真を撮った望月昭伸さんのことを紹介しましたが、その写真家の望月昭伸さん（愛称モッチ）が、1992 年に、「O -46」と名付けられたザトウクジラの赤ちゃんを撮影しました。そこで、その赤ちゃんクジラの名前を発見者にちなんで「モッチーニ」と名付けたという次第です。

でもクジラの名前って「O -46」という記号風の名前があったり、「モッチーニ」という愛称風の名前があったり、何か名前を付ける基準みたいなものがあるんでしょうか。

小笠原ホエールウォッチング協会の言うには、「ザトウクジラは、親子クジラ以外一定のメンバーで群れを作らないことが知られています。そのため、群れのメンバーが出たり入ったりすることも多々あり、調査時に混乱をきたすことも少なくありません。どのクジラがどの群れにいるかを可能な限り正確に見分ける必要があり、アルファベットでクジラを呼びます。しかし、それよりも、人間の瞬間的な記憶の中で、それぞれの尾ビレや背ビレなどの特徴を利

用したネーミングが、とても有効な場合が多々あります。例えば、背ビレの先にフジツボがついていればフジオ」というように、その場だけでも名前をつけることです。そのうち、何年も続けて見られると、その名前も定着してきます」と言うことだそうです。

納得です。ではモッチーニって、どんな特徴があるのでしょう?

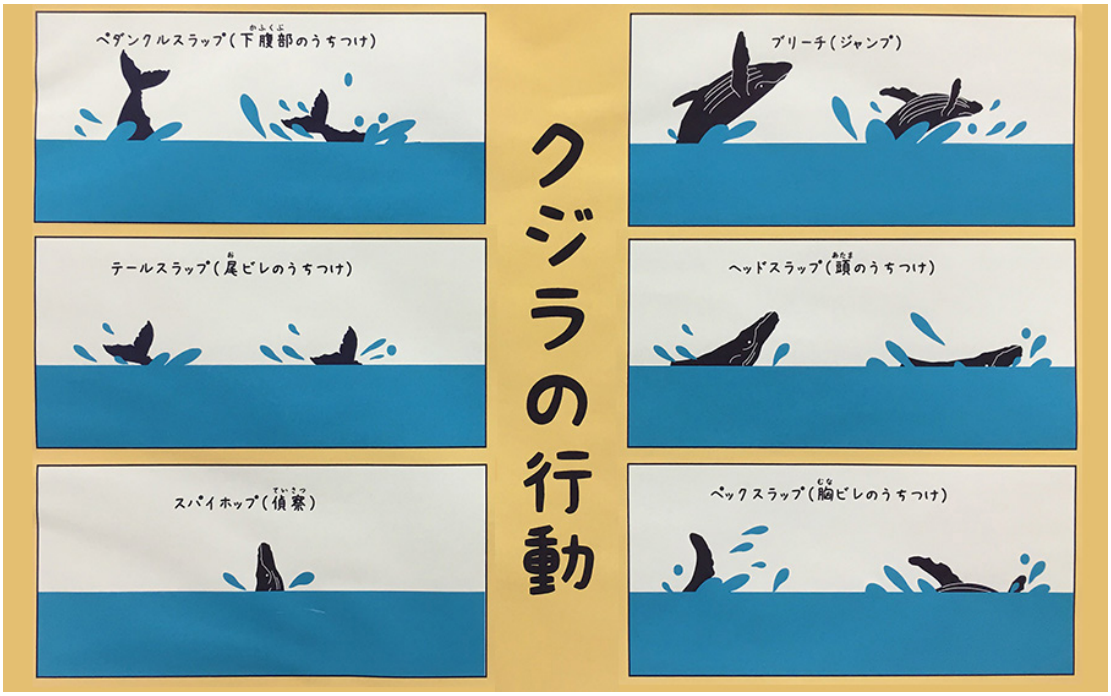
モッチーニを見分けるにはどうしたらいいのでしょうか? その答えが、小笠原ビジターセンターにあるというのでので行ってみることにしました。

小笠原ビジターセンターで開催されている「ザトウクジラ展」、まずは、その展示を見てみましょう。

右は小笠原で見ることのできるおもなクジラとイルカです。筆頭はマッコウクジラ。

石油が掘り出されるまで、マッコウクジラから採れる油が産業革命を支えていました。このため、マッコウクジラを求めて、太平洋をアメリカやヨーロッパの船が行き来し、日本の鎖国もママならぬようになってきます。

このため、小笠原へもロシアやアメリカの捕鯨船で寄港する船が増え、ここ小笠原に住み着く欧米人もあらわれるようになりました。この人々が小笠原の欧米系住民の祖先となっていきます。



次いでおなじみのザトウクジラ。モッチーニも、このザトウクジラの仲間になります。

ところで、ザトウクジラを知る上で重要な数字があると言います。それが「４メートル」という数字です。

まず、ザトウクジラの尾ビレ（テール）の幅が約４メートル。胸ビレの長さが約４メートル。生まれたての赤ちゃんの大きさ（頭から尾ビレまでの長さ）が約４メートル。この４メートルを「４倍した」となれば申し分ないのですが、残念ながらここだけが「４倍」でなく「3.5 倍した」14 メートルが、成長したザトウのだいたいの大きさとなります。

このほか、イルカでは、ハシナガイルカやミナミハンドウイルカ（ミナミバンドウイルカ）のウォッチングを、小笠原では楽しむことができます。

でも、今はザトウクジラだけに集中しましょう。

ザトウクジラのウォッチングをしていますと、時により、彼らのさまざまなアクションと出会うことがあります。下の図では、「ペダンクルスラップ」にはじまる６つのアクションを紹介しています。

「ペダンクルスラップ」は海面に下腹部を打ち付ける行為。

「テールスラップ」は尾ひれを海面に打ち付ける仕草。

「スパイホップ」は頭だけを水面に出し、まわりの状況を観察する仕草。

「ブリーチ」はウォッチングの最大の見

せ場です。ザトウクジラが海面から大きくジャンプし海面に背中から落ちていく様子は圧巻です。背が海面に落ちるや大きな水しぶきが上がり、船からも観客の大きな喚声とため息が上がります。

「ヘッドスラップ」は頭の打ち付け、「ペックスラップ」は胸ビレの打ち付けですが、これは、先の「テールスラップ」とともに、まるでザトウクジラが我々に挨拶しているような、状況により「サヨナラ」してるような印象を見る者にあたえ、ザトウクジラとの距離がグッと近づいたような印象をあたえます。

このほかに「メイティングポッド」と言って、メスのエスコート役（母子のクジラを助け、子クジラの手が離れたとき、次の交尾権を手に入れる）をめぐってオス同士が争うことが多々ありますが、これは圧巻です。僕も沖縄の座間味で、一頭の母子クジラのエスコート役をめぐって三頭のオスが争うメイティングポッドの真ん中に船が入ってしまうという経験をさせてもらいました。船の名も「エスコート号」、佐野船長の操船が巧みで、危機感はありませんでしたが、よくあれで船が沈まなかったと思わせるぐらい激しいものでした。

このことからも分かるように、ザトウクジラはシャチのように一夫一婦制ではあり

2000 年にモッチーニが子連れで発見され、メスであることが確認された

ません。交尾を済ませたオスは離れていき、生まれた子クジラと母クジラを、次の交尾権を持つエスコート役のオスクジラが守るという寸法です。そして子クジラは一年経つと母親から離れていき、母クジラは、エスコートのオスクジラとの間に新たな子をもうけていくという生命のサイクルが続いていきます。

話を戻しましょう。このようなザトウクジラのさまざまなアクションの中で、水中に潜る寸前にテール（尾ビレ）の形状がよく観察されます。このテールの形状が、ザトウクジラー頭一頭、みんな違うのです。つまり、ザトウクジラの個体識別は、このテールの形状を観察することからはじまるというわけです。

前ページの写真は、ビジターセンターにパネル展示されていた「モッチーニ」の尾ビレの形状です。尾ビレの右側部分に半円形の切れ込みがあります。これがモッチーニを見分ける大きなポイントになっています。

いよいよモッチーニのことについて触れるときがきたようです。ただし、僕自身はモッチーニを直接見たわけではありません。見たことがないため、恋心が余計にふくらむのかも知れませんが……。

そうそう、モッチーニは人間にだけに人

気があるわけでなく、オスクジラの間でもモテモテの売れっ子のようです。これは小笠原海洋センター（エバーラスティング・ネイチャー小笠原事業所）の研究員・佐藤隆行さんの受け売りですが、以下、その佐藤さんに取材したモッチーニについて語らせていただきます。

1992 年、望月昭伸さんによって発見されたモッチーニは、1993 年、母親から離れる時期になっても、なぜか母親の「O -46」とともに発見されています。

以後、95 年、98 年、99 年と父島周辺で確認され、2000 年に初めて子クジラを伴って確認されました。この時点でモッチーニがメスであることが確認されたということになります。

モッチーニは、生まれた時からボートなどが周りにいる環境に慣れているせいでしょうか、子クジラを伴っていても、あまり周囲のボートを警戒する様子もなく、湾口や時には湾内で、親子でのんびり水面付近を漂う姿が見られています。

こんなオットリした性格のためでしょうか、小笠原の人から愛され、ザトウクジラの時期になると、「今年もモッチーニが帰ってきた」と、人々は、モッチーニの出現を心待ちするようになっていきました。

以下は、佐藤隆行さんが作成してくれた「モッチーニ」と「O-46」の出現記録です。

（小笠原海洋センターの佐藤隆行さん）

ーモッチーニのプロフィールー

1992 年 0 才
　O-46 の子供として父島で初確認
1993 年 1 才
　母子一緒に父島で確認
1995 年 3 才
　1 頭で父島にいるのを確認
1998 年 6 才
　3 年ぶりに父島でペアでいるところを確認される
1999 年 7 才
　O-54（♂）と一緒にいるのを確認
2000 年 8 才
　子連れを初確認（母島）
2002 年 10 才
　5 頭の群の中に確認
2003 年 11 才／子連れで確認

小笠原海洋センターがモッチーニの消息について最終確認したときの写真（2014 年 3 月 25 日）

2005 年 13 才／子連れで確認
2007 年 15 才／子連れで確認
2010 年 18 才／子連れで確認
2014 年 22 才／子連れで確認

ー0-46 のプロフィール（母親）ー

1990 年／初発見
1992 年／子連れで発見（モッチーニ）
1993 年／モッチーニといるところを確認
1995 年／子連れで確認
1997 年／ペアでいるところを確認される
2000 年／子連れで確認
2001 年／ 3 頭群の中にいるのを確認
2002 年／子連れで確認
2004 年／子連れで確認
2006 年／子連れで確認
2008 年／子連れで確認
2010 年／子連れで確認
2013 年／子連れで確認

上の写真は、小笠原海洋センターがモッチーニの消息について最終確認したときの写真です。

ただこれ以降もインターネットで検索すると、「このごろの小笠原 blog」（2018年1月8日の記事）で「お帰りモッチーニ」という記事を見つけました。

◇

近くにいる１頭が、浮上したまま海面で呼吸を繰り返します。

このクジラも船を見ているようです。

連れのもう１頭が上がってくると、並んで尾を上げて潜っていきました。

と、なんとその連れの尾ビレのフチが半円に欠けています。

モッチーニです！

今年も無事に小笠原まで帰ってきてくれ

ました。

お帰りなさい、会えるのを待っていたよ。

昨シーズンは子育てをしていたので、今年は恋のシーズンでしょう。

また、多くのクジラに囲まれたモテモテのモッチーニを見られるのは嬉しいです。

小笠原・父島の長崎展望台から対岸の兄島を望む景観

旅のおわりに／「いじか物語」と太地町

「いじか物語」は、まだ「本」という形になっていない、僕の頭の中にだけある「物語」です。

その「頭の中にある物語」を、実際の風景の中に追いかけた紀行文がこの文章になります。

物語の初めは、900 キロメートル上空の衛星カメラがとらえた地球の映像から始まります。そこに映し出される映像は、22 世紀半ばの地球の姿。カメラが太平洋上空を捉え、かつて日本があった辺りへとズームインしていきます。

そこには日本列島の姿はなく、断層帯で無数に引き裂かれた島嶼の一群がその名残をとどめている――そこには、そんな風景が広がっているはずでした。

しかし、不思議なことに、衛星カメラが映し出したのは、まぎれもなく在りし日の日本列島そのものだったのです。

カメラがさらに、その紀伊半島のあたりへと近づいていくと、その沖合を海岸線に添うように１艘の小舟が西へ西へと向かっています。

その小舟を追うように、小さなイルカの

イルカの群れ（家族）

群れが見え隠れしています。

これが、僕の頭の中にある「いじか物語」の出だしの部分です。

小舟の中板には、この物語の主人公になる赤子が置かれ、艫（とも）では漁師風の男が疲れ果てた様子で櫓を漕いでいます。

男は石鏡（いじか）のクジラ取り、刃刺しの銛吉、赤子は、これから「いじか」と名付けられる予定の、この物語の主人公です。

物語は、「刃刺しの銛吉」、「いじか」という同じ名を与えられる一人の娘と一頭のイルカ、いじかの育ての母となる「八重」、銛吉と八重の養子となる「カイ」という少年」、ザトウクジラの「アシュラ」と……、人とクジラ、そしてイルカの物語が輻輳し進んでいく構成になっています。

そして、彼らの物語が絡み合う、その発端となる場所が、この本の冒頭で取り上げた、三重県鳥羽市の石鏡であり、更に和歌山の太地（たいじ）へとつながってまいります。

1. 石鏡のクジラ漁と宝永津波

第１章の「石鏡（いじか）漁港とクジラ漁」のところでも書きましたように、宝永大地震（1707 年 10 月）に伴う大津波が起こるまでは、この三重の石鏡でも捕鯨業が盛んに行われていました。

それが地震の起こる前年、宝永３年の

晩秋から翌年にかけて、どうしたわけかザトウクジラの回遊がほとんど見られないという状態が続きました。

この時期、北の海で盛んにエサを食べ溜めしたザトウクジラは繁殖のため南の海へ移動します。この時のクジラは、エサもしっかり食べ、栄養状態も良く、脂ものっておりますから、漁師にとっては格好の獲物となるわけです。

これに対し、南の海で子クジラを産み、子連れで北の海へ帰るクジラたちは、ほとんど絶食状態で、栄養状態も悪く、よほどのことがない限り、鳥羽の漁師たちもこれを狙うことはありません。

この年の春は、そんな北へ帰る上りクジラさえ姿を見せないという有様でした。

ところで、この鳥羽のクジラ組に、銑吉と呼ばれる刃刺しがおりました。

刃刺しというのは、クジラ漁の最終段階で、銛や刀でクジラにとどめを刺す漁師のこと、いわばクジラ獲りの花形なわけです。そんな刃刺しの中でも、彼はずば抜けて勘が良いというのでしょうか、まるで海中でのクジラの動きが見えているように動くのです。

この頃のクジラ漁は、網取り法といって、山見（岬等でクジラの動きを見張り、幡やのろしで船団を指揮する役割）からの知らせを受け、網舟（あみぶね）が、クジラの動きに合わせ、その行く手、行く手に網を張り、

刃刺しの像 / 和歌山県太地町　くじら浜公園

大木（おんぎ）浜 / 今は隠れ浜になっています（三重県鳥羽市）

クジラに何重にも何重にも網を被せ弱らせていき、弱り切ったところで、勢子舟の刃刺しが銛（もり）を打ち込むことになります。

銛はクジラをめがけて投げるのではなく、空中高く投げ上げ、上空からクジラの背へ落ちるようにします。こうすることで、硬いクジラの皮膚に銛を突きさすことができるのですが、銛は長さが大きいもので４メートルを超え、その重さといえば７キログラムにも達します。

これを自在に投げ上げられるようにするため、刃刺しは常日頃から、腕と言わず足腰の鍛錬に余念がありません。

ただクジラも黙って網に突っ込んでいくだけではなく、被された網を振りほどくため、勢いよく海中深く潜り、網から逃れたうえで、息継ぎのため離れた水面に顔を出します。

このとき、いったん潜ったクジラが、どこへ上がってくるのか、このクジラの動きを読まなければなりませんが、銑吉は、海中のクジラの動きが、まるで手に取るように分かるのです。

このため銑吉は、鳥羽のクジラ組で一目置かれる存在になっていました。

さて、話を戻しますが、この年はクジラが一頭も獲れていません。それは、「クジラ漁が不漁のため」というような生易しいものではありませんでした。

昨年の秋口から今年の春にかけて、一頭たりともクジラが姿を見せないのです。

クジラが獲れねば浜の暮らしはなりゆきません。そんな苛立ちが漁師たちに重くのしかかっていた矢先のこと、一組の子連れのクジラの姿が鳥羽の沖合に現れたのです。

南の海で子供を産み、その子クジラを伴い北の海へ帰る親子です。

クジラの捕獲の際、親を狙うのでなく、まず子クジラに「しらせ銛」といって、殺さない程度に軽く銛を打ち、囮（おとり）として湾内まで引いてくるやり方があります。

これによって母クジラを湾内におびき寄せ殺すというやり方です。

刃刺しの銚吉が最も嫌うクジラ獲りのやり方ですが、背に腹は代えられません。

しかもこの時、青峰山（あおのみねさん）・正福寺の住職が、大あわてで大木浜（おんぎのはま）のクジラ小屋を尋ねてまいりました。

勢子舟、網舟等々、捕鯨のための船（鳥羽市立海の博物館・船の収蔵庫）

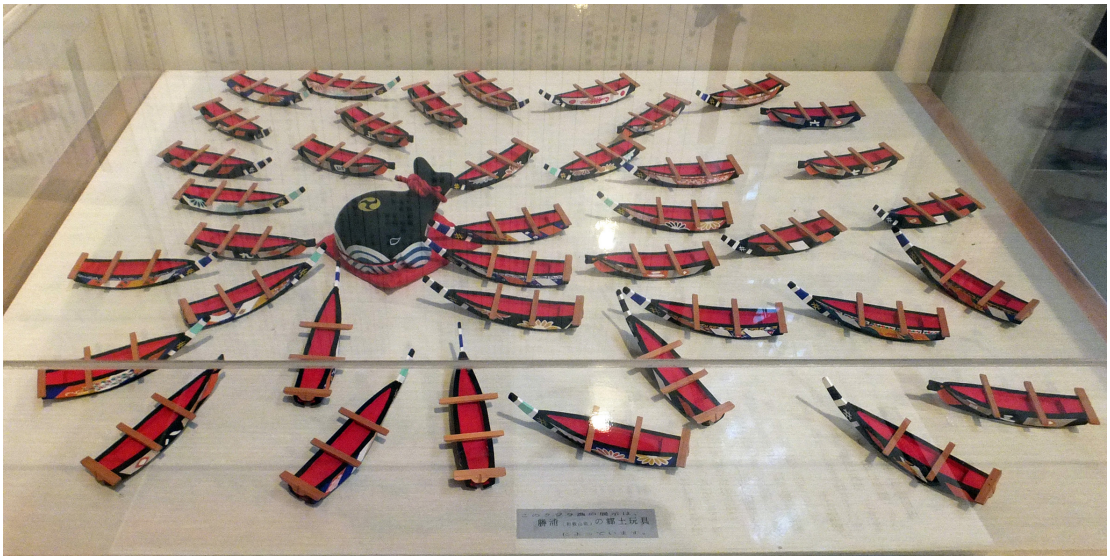
住職は、沖合を通るクジラの母子を夢に見たというのです。母クジラが必死に「今回は見逃してほしい、子を北の海へ届け来年の下りの時期には必ずこの命を捧げます」というのです。

その必死な様子があまりにも哀れで、目が覚めても何か落ち着かず、こうして伝えに来たというのです。

しかし、この知らせは間に合わず、船団は既に出発した後で、その日の夕刻近くには、大木浜に親子クジラの死体が並べられることになりました。

ザトウクジラは母性愛が強く、子供が捕らえられれば、己の命がなくなろうと決して子供の傍を離れようとはしません。

湾内に追い込まれ、無数の銛を受けた母クジラの最期の咆哮（ほうこう）は、とどめの銛を打ち込む刃刺しに、血潮の混じった潮吹



網取り漁法の大詰め／とどめを刺されたクジラは鼻に綱を通され浜へ運ばれる（鳥羽市立海の博物館）

きとともに降り注ぎ、その胸をかきむしります。

この咆哮を漁師や浜の人々のほか、沖合で一頭のザトウクジラのオスが悲しげに聞いておりました。

ザトウクジラの母子には、これを見守りガードする雄が付き添います。

といって、この子クジラの父親ではありません。次の繁殖権を争いで勝ち取った雄が、この母子のガード役をするわけです。しかしこの雄クジラ、ザトウクジラというにはあまりに大きく、全長で 60 尺（18 m）にもなるでしょうか。

彼はその巨体を怒りに震わせ、メスクジラの断末魔の咆哮に答えるように、激しく尾びれを海面に打ち付け、鼻からは低周波の唸り声を出し続けています。

その怒りと悲しみに満ちた鳴き声は、メスクジラの断末魔の咆哮とともに浜の人々の胸を責めさいなまずにはおきませんでした。

刃刺しの銛吉も、浜でその姿を、しっかりと目に焼き付けておりました。

横手では正福寺の住職が「般若心経」を唱え続けていますが、その声を聴きながら銛吉はつぶやくように言い放ちます。

「まるで阿修羅（あしゅら）のようじゃ」

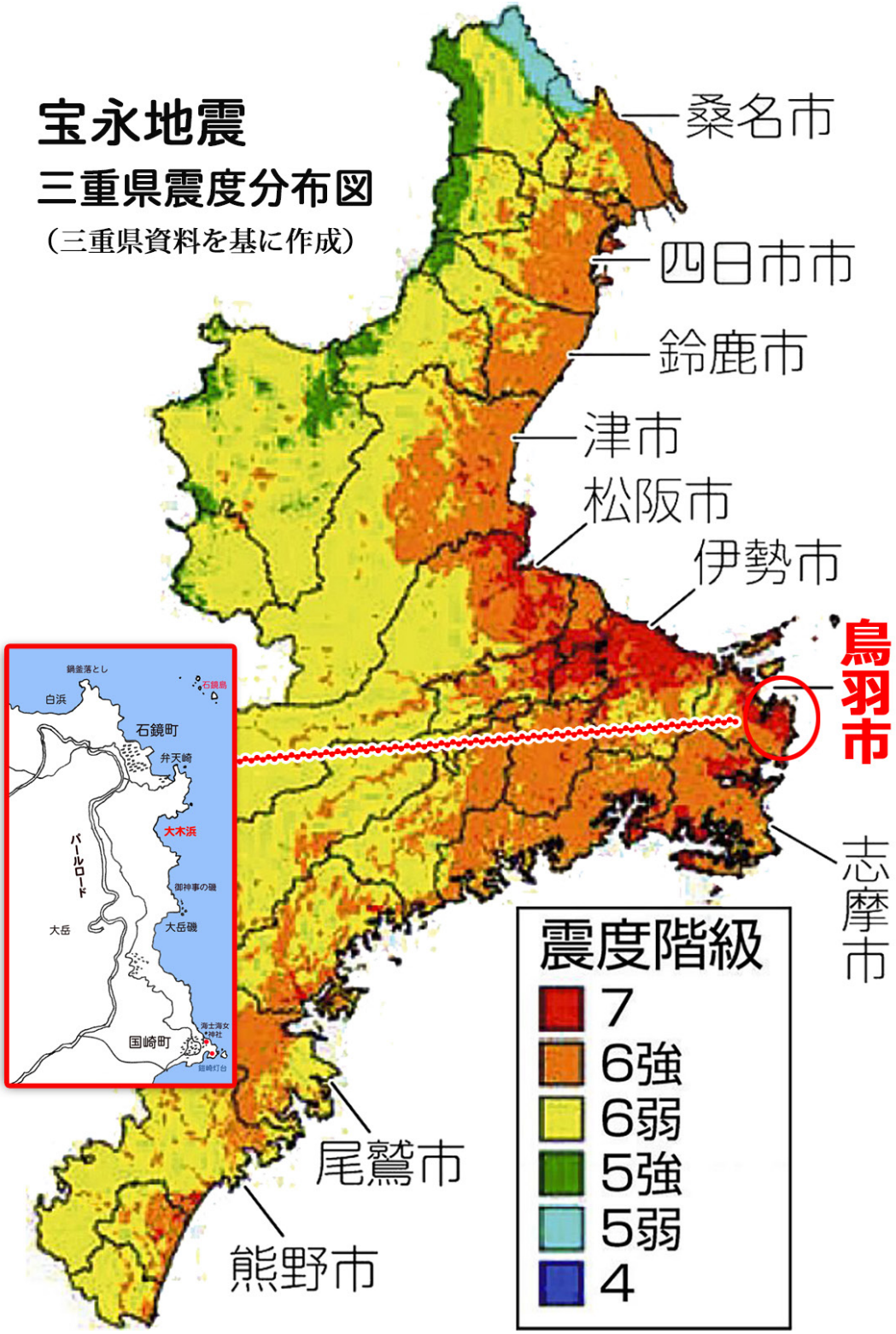
……

この騒動から何日かが過ぎた早朝、銛吉は突然の半鐘の音に目を覚ましました。クジラの出現を知らせる半鐘です。

それも、ただのクジラではなく、銛吉が思わず「アシュラ」と名付けた、あの雄クジラが再び沖合に姿を現したのです。

この後、銛吉ら漁師たちは、このザトウクジラ「アシュラ」の捕獲に船団を出し

宝永地震
三重県震度分布図
（三重県資料を基に作成）



ますが、かえって翻弄され続け、そのさなか宝永地震が発生、クジラも船団もともに大津波に飲み込まれていきます。

銑吉を載せた勢子舟は10メートルを超える津波に運ばれたかと思うや、さらに右舷に生浦湾から押し寄せた波をまともに受け、勢子船は無残に打ち砕かれ、銑吉が気が付いた時は、何処をどう運ばれたものか、舟板にしがみついた状態で相差の村まで運ばれてきていました。

気が付けば、昨日まで人の生活があった場所が、瓦礫の山と化しています。

銑吉は、身体中にできた傷や打ち身にもかまわず、ただ呆けたように瓦礫の山を彷徨っていきました。

虚脱状態の思いのなかに「無慈悲にあの母子クジラを殺した、そのバツが当たったんだろうか」、そんな思いが湧きあがってきます。

「違う、そんなはずがない、あのこととは関係ない」と思うのですが、そう思う端から、あの母クジラの咆哮が胸の中によみがえり、怒りのこもった雄クジラの眼差しがよみがえってきます。

降り注ぐ血しぶき、グォーッという凄まじい断末魔の咆哮、それを見守る雄クジラの怒りに満ちた低周波音。

それらの怒りとも悲しみとも思える音の波にかぶさるように、今にも消え入りそうな、か弱い赤子の泣き声が響いてきます。

「この娘をお願いします……」

目の前に、青白い腕に抱きかかえられ

鳥羽展望台から眺める太平洋

た赤子が差し出されました……

銑吉は、訳も分からず無造作に赤子を受け取ったと思ったのですが、気が付けば抱えたつもりの腕の中には何もありませんでした。

夢か？

でも赤子の消え入りそうな泣き声は、まだ聞こえてきます。

見れば、足元の崩れた建物の傍らに、子供を守るように抱え込んだ女の骸（むくろ）がありました。

銑吉は後先のことも考えず、咄嗟（とっさ）に赤子を我が腕に抱え込んでいました。

懐（ふところ）にそのか弱い命を感じながら、銑吉は何とか千鳥ヶ浜へたどり着きました。

内陸へは瓦礫の山で閉ざされています。海を目指すことが唯一生へ繋がるように感じられたのです。

浜で使えそうな一艘の小舟を見つけ出した銑吉は、自分とこの赤子の運命を「海」に委ねることとしました。海は、少なくとも彼とこの赤子の命を奪おうとしなかったのですから。

銑吉は、傷んだ体を艫（ろ）に委ねるようにゆっくりと漕ぎ出しました。

――――――――――――――――――――

衛星カメラの画像に動きがみられました。漁師風の男が赤子を抱えて海へ飛び込んだのです。

男は生きることをあきらめ赤子とともに死を選んだのでしょうか？

しかし、今、衛星カメラがとらえきれな

相差町の海岸・千鳥ヶ浜

い水面下では、予想もしなかったことが起こっていました。

――――――――――――――――――――

赤子の消え入るような泣き声がイルカたちを呼び寄せたのでしょうか。小舟の周りにイルカの群れが集まりだしたのです。

一頭のイルカが船べりに頭を覗かせ、銛吉に何かを促すように話しかけています。

銛吉には何のことかわからず、イルカを追い払おうとするのですが、その銛吉に別の一頭が体当たりし、彼を海へ突き落としました。

そこで銛吉が見たのは、イルカの母親と幼い子供のイルカの姿でした。

子供のイルカは、母親の乳腺に吻（ふん）（くちばし）を突っ込み、母親の体内に収まった乳頭に吸いつきます。そして吻を抜き出すと、乳腺から勢いよく乳が海へと噴き出していきます。イルカの乳は脂肪分が強く、液体になったチーズのようで、海水にはなかなか混じり合わないのです。

イルカの母親と銛吉の眼が合い、銛吉はすべてを理解しました。

小舟に戻った銛吉は、今度は赤子を抱えるようにして海へ飛び込み、両手でつかんだ赤子を海中で、イルカの下腹に向けて差し出したのです。

イルカの下腹に「小」の字のように刻まれた生殖腺、その片側の乳腺から白い筋となって乳が吹き出します。

不思議な光景でした。そして、忘れられない光景でした。

銛吉の眼からも涙が噴き出し海水に交ざりあって消えていきました。

2. 太地へ

イルカの社会はメス社会です。子供たちも、雄はある年齢に達すると群れから離れて若い雄だけで暮らすようになり、繁殖相手を探すようになります。繁殖相手が見つかれば種だけを残し、雄は群れから離れていきます。

したがってイルカの群れは、大お婆さんが群れのリーダーとなり、その娘たちや、そのまた子供たちで一つのポッドを形成します。新生児は、母親だけでなく、そのおばさんや群れ全体で面倒をみて育てていくわけです。

銛吉と赤子を助けたイルカの群れも、リーダーの大お婆さんの指示で、新たに母となった孫娘の乳を、飢えた人間の赤子に与えようとしたのでした。

それればかりか、銛吉の操る小舟の周りを群れが助けるようにリードし、彼女たちの縄張りの一つである太地沖へと導いてきたのです。

しかし宝永津波の被害は、伊勢湾沿岸から、紀伊半島沿岸、大阪湾から紀淡海峡を遡上し、さらに土佐湾沿岸が最も被害が激しく、九州東部、瀬戸内海沿岸、伊豆半島から房総半島に至る沿岸、さらには八丈島まで、その被害はおよび、この太地の捕鯨業にも壊滅的な被害をもたらしていたのです。

太地の浦だけで、流失・損壊した家屋は 217 軒にのぼり、多くの漁船や漁具が破損・流失し、多くの捕鯨従事者が波にさらわれ、生活が成り立たなくなるという状

太地の古式捕鯨で重要な拠点の一つとなった天然の良港・森浦湾（和歌山県太地町）

況に追い込まれていました。

津波の被害ばかりか、地震の地殻変動により、太地一帯は地盤が沈降し、津波が引いた後も潮が引きにくくなり、その後の復興もままならないという状況だったのです。

大規模な援助なくしては、復興は難しく、太地の捕鯨業も、鳥羽・石鏡の捕鯨業同様に壊滅の道を歩まざるを得なかったのです。

ちなみに石鏡の捕鯨業は「かつお漁」へと移行し生き残っていきました。

しかし、この太地の捕鯨業の復興に大規模な援助、それは資金の貸付はもちろんですが、大規模な労働力の援助まで提供した集団がいたのです。

紀州藩は、後には捕鯨を重要な産業として保護し、「御手組」として藩の公認・直轄事業に組み込みましたが、この宝永津波のころは、捕鯨業はといえば、和田家が率いる個人的な事業であり、しかも藩自体の被害も甚大で、資金援助あるいは人的な援助ができるような状態ではありませんでした。

その頃、クジラが捕獲されると、その浜での解体作業を補助していた集団があります。彼らは大坂は渡辺村で皮革を扱う「太鼓屋又兵衛」配下の者たちです。

エタと蔑称され、動物の皮革を剥ぎ、なめし、太鼓や三味線等の商品に加工する技術集団の人達です。

彼らの中でも、クジラの皮を扱う技能集団は、どうも太地のある一角に定住し、クジラの解体を担っていたようなのです。

太鼓屋又兵衛屋敷跡（大阪市 浪速玉姫公園）

これは僕の想像ですが、宝永津波で太地のクジラ漁が大打撃を受ける以前は、クジラ漁の時期になると、彼らが大坂から移動していたと思われます。

それが宝永津波のため、復興資金を大坂の皮革を一手に扱う「太鼓屋又兵衛」から借り受けることとなりました。そこには、鯨肉以外の骨、髭、皮等々、捨てるような部位を大坂の太鼓屋又兵衛が一手に仕入れ加工し、全国に流通させていたという背景があるようなのです。

彼らは資金援助だけでなく、復興の労働力として大挙して太地に移動し、以前は、漁獲期だけの滞在だったものが、復興後もそのまま定住し、クジラの解体の手助けをしていたのではないか、そのように僕は考えております。

話を戻しましょう。

太地の燈明崎――そこは捕鯨の際、「山見」といってクジラの動きを見張り、船団に幟や狼煙でその動きを知らせ指揮する指令所の一つでした。海抜は60メートルありますから。ここは宝永津波の際も、被害を受けなかったところの一つです。

その燈明埼に、一人たたずみ眼下の海を眺めている女の姿がありました。

彼女はの名はハ重。

彼女は、刃刺しである夫とまだ一歳にも満たない娘が、避難途中に波にさらわれたのです。

以来、毎日のように、半里の山道をこの燈明埼へ上ってきては、夫と娘が帰ってくるのを待っているのです。

そのハ重の目に、イルカの群れに囲ま

燈明埼の山見跡（和歌山県 太地町）

れ、まるでイルカに導かれるように、一艘の小舟が入り江へと入ってくる光景が見えたのです。

青ざめ沈み切っていた八重の顔に赤みが戻り、目にも光が戻ってきます。

八重は、半里（約２キロ）ある入り江への道を思わず走り出しました。

（あの子が、あの子が帰ってくる、あの子が帰ってくる！）

これが銚吉と八重、そして、いじかと名付けられる娘との出会いとなるわけです。

ところで、今、燈明崎という山見の一つが登場しましたが、太地にはこの燈明崎以外に４か所の山見があり、回遊するクジラの発見と、実際のクジラ漁にあたっては、それぞれの山見が連絡し合い、海上の勢子舟、網舟にも指示を出す、捕鯨業の要となる最重要地点があります。

当然、海を見下ろす高台にありますので、宝永津波の際は、太地の人達の避難所となったことが察せられます。

ちなみに現在判明している山見を紹介しておくと、「燈明埼・海抜約 60m」、それに次の「梶取崎・海抜約 20 ～ 30m」、この二つが、太地の山見のうちで最も重要な山見になります。

続いて「高塚台連絡所・海抜約 30m」、ここは山見というよりも、名前通り山見間の連絡を中継する地点のようです。

最期の「向島・海抜約 3m」、ここには「大納屋」が置かれ、クジラ舟の保管修理、クジラ網や漁具の保管修理が行われ、地方から流れてきた刃刺しの住まいがあります。

岩門（せきもん）和田の東屋敷跡（和歌山県 太地町）

これは僕の推測ですが、後にはクジラの解体に携わるエタといわれる人達も、この地に住んでいたのではと思われます。

そして、流れ刃刺しを夫に持つ八重の住まいも、また、この辺りにありました。

ただ一番高い頂上部分に上っても３ｍ程度であり、当時は知らず、今現在は藪に覆われ、見晴らしは良いとは言えません。宝永津波の際、八重の夫をはじめ、この山頂を目指し逃げた人たちは、波に呑まれ助かりませんでした。

八重はといえば、たまたま実家のある岩門（せきもん）に帰っており、高塚台連絡所へ逃げ一命を取り留めました。

岩門は、紀伊風土記に「山を切り開きて門をなす」と言われており、太地捕鯨の創始者和田家の東屋敷と言われたところで、その門の内側には、5000 坪に及ぶ屋敷構えが広がっていました。

八重の両親は、この和田の東屋敷に夫婦共に奉公しておりました。

「なぜ娘を連れてこなかったのか？　連れてきていれば、あの子だけでも助けることができたのに」……

その思いに責めさいなまれ、八重は、毎日のように燈明埼へ上り、帰らぬ二人を待つこととなったのです。

向山に祀られた弁財天（宝永津波の後に移設）

入り江に面してある向山（和歌山県 太地町）

二か所の山見「燈明埼」と「梶取埼」、そして「高塚連絡所」の位置関係

入り江に面して大納屋のある「向島」

燈明崎の狼煙台

梶取崎の山見

高塚台連絡所

3. 太地捕鯨業の復活

銚吉の漕ぐ小舟は、イルカの群れに守られながら、こうして太地の入り江へ到着しました。

生き残った浜の人達が入り江へ駆けつけ、舟の中に倒れ込んでいる銚吉と赤子を助けようとします。

「生きちょるぞーッ」

「何ちゅうこっちゃ、ややまでおる！」

浜の漁師たちをかき分けて、息を切らせた女が小舟に駆け寄ります。

「八重さんや、みんな、どいたれ！」

浜の人達は、これで八重も正気付くのではと思いました。

主人と娘を波にさらわれた八重の目には、この小舟で、二人が自分のもとへ戻ってきたように思われたのです。

八重の正気は戻ることはありませんでした。それでも両親や和田の親方の計らいで、銓吉は八重と所帯を持ち、太地の刃刺しとして暮らしていくこととなったのです。

銓吉は、二人の娘となった赤子に、自分たちのルーツである石鏡（いじか）を名前として与えました。同時に、同じイルカの乳をのんだいわば乳兄弟ともいえるバンドウイルカの子供にも同じ「いじか」の名前を与えたのです。

二人を助けたイルカの群れも太地の沖合で暮らすようになり、しばらくの間、太地の人々の生活を支えるようになっていきました。

クジラ漁が復活するまでの間、春（３月～5月頃）と秋（9月～10月頃）には、黒潮に乗って訪れる魚の群れをイルカたちが入り江へ追い込んでいき、それを漁師た

ちが網で捕らえる。網からこぼれた魚たちをイルカがエサとして食べる、そんな人とイルカの共生が、この太地で実現していたのです。

その要にいたのが銛吉でした。

漁に出た銛吉たちは、まずイルカの群れを探します。イルカの群れを見つけると、船べりを叩いて漁の準備ができたことをイルカに知らせます。するとイルカたちは魚の群れを探し、発見するやリーダーが大きくジャンプして銛吉に知らせます。

「おばやんが飛んだ、行くでぇ！」

漁の開始です。

イルカたちが魚の群れを入り江に追い込み、銛吉たち漁師が網で魚の群れを掬い上げます。網からこぼれた魚たちをイルカたちが食べるという寸法です。

しばらくの間、こうした人とイルカの共生が太地の浜を支えており、自然、銛吉も太地で大きな存在となっていきました。

その頃、和田の親方自ら復興資金調達のため、大坂は渡辺村「太鼓屋又兵衛」のもとへと旅立ったのです。

資金の借入は順調に進み、資金ばかりか大勢の人的資源の協力が約束されました。

今迄はクジラ漁の時期にだけ解体作業を助けていた「エタ」と蔑まれていた人たちが本格的にその一翼を担うようになり、食肉以外の骨や革、髭、油といったクジラの部位の大部分を太鼓屋が仕入れ全国に流通させるようになっていったのです。

大がかりな復興計画がスタートし、銛吉も漁以外の時は、率先して「エタ」の人たちと力を合わせ働くようになっていきました。この太地では、身分制度の外に置かれた人たちが、幾分のぎくしゃくはあった

ものの浜の人たちと共存することになったのです。

「イルカ」と「ヒト」、「身分制度の枠を超えたつながり」、一時のユートピアが太地に出現した感がありました。

やがて失われた漁具や網、そしてクジラ舟さえも新造され、クジラ漁が復活される体制が整っていきました。

4. 解体場の「みなし児」

その日は見事なザトウクジラが獲れ、二艘の持左右舟（もっそうぶね）に曳かれて太地湾の入り江に入ってきました。

高塚連絡所からの知らせを受け、飛鳥神社前の浜では、すでに受け入れの準備が整っています。

その様子を、太地のクジラ博物館所蔵「捕鯨絵図」等の図録で見ていきましょう。

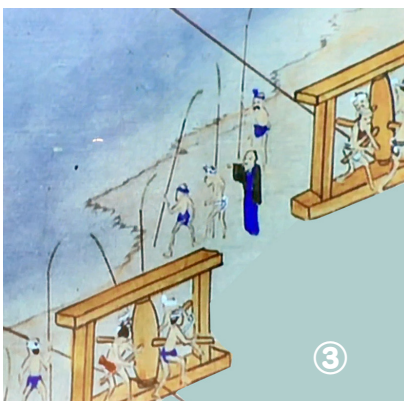
重しの樽を付けた網に何重にもに絡めとられ、幾本もの銛を背に受けたクジラは、刺水夫（さしがこ）によってとどめが刺されます。

同時にクジラには「鼻切り」が施され、移送のために縄が鼻に通され、クジラの両端に横付けられた二艘の持双舟に固定されます。

クジラは絶命すると海底に沈んでしま

網取り法での捕鯨（捕鯨絵図／くじらの博物館）

鯨の引き上げを待つ（捕鯨絵図／くじらの博物館）



捕獲し曳航されてきた鯨を轆轤を使って浜へ引き上げる（捕鯨絵図／くじらの博物館）

うため、絶命寸前にこの作業が行われるのです（図①）。

太地浜には入り江に面して「飛鳥神社」が建てられています。解体作業は、この飛鳥神社の前で行われるのですが、それは、ただ単にクジラを捌（さば）くという以上に、クジラの命をいただくという神事にもなっているためです。

太地浜には、クジラの到着を見守る浜の人達が集まっています（図②）。

浜には海に面して「かぐらさん」といわれる轆轤（ろくろ）が３台設置され、男たちが取りつき、この轆轤を回しています。

持双舟で運ばれたクジラは浅瀬で大きく切り分けられ、それが轆轤で浜へ引き上げられることになります（図③④）。

轆轤は、クジラを浜へ引き上げるためだけでなく、⑤図を見ていただいて分かるように、クジラの皮を剥ぐ作業にも使われていました。

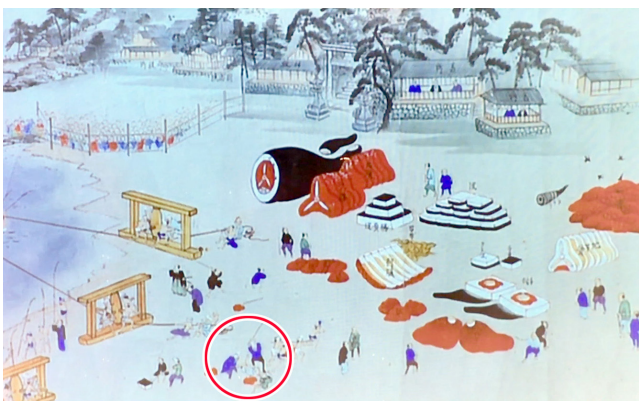
図⑥をみてください。赤マルで囲った部分を右側に拡大しています。

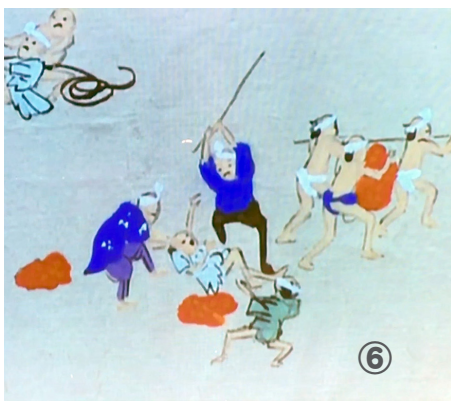
小さな男の子が棒で折檻され泣き叫び、傍には大きな肉の塊が転がっています。

クジラの解体には「エタ」と呼ばれる身分的に差別された人たちが、その作業を手伝います。その際、骨についた端肉などを勝手に持ち帰ることは黙認されていまし

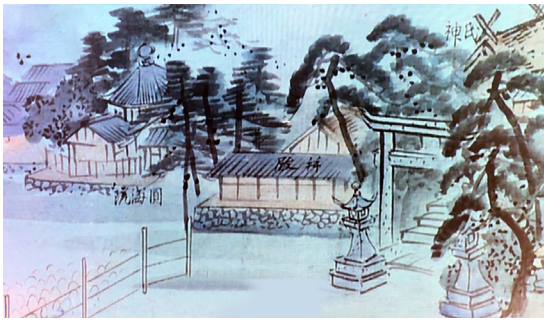
鯨の解体（紀州熊野浦捕鯨図屏風／和歌山県立博物館）

鯨の皮を剥ぐのも轆轤が使われる（勇魚取絵巻）

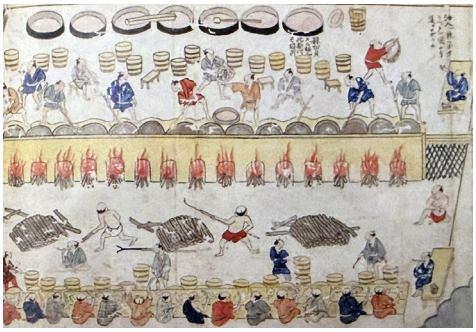




飛鳥神社前の浜で解体される鯨・鯨の肉を盗もうとした子供が折檻されている（捕鯨絵図／くじらの博物館）



「捕鯨絵図」に描かれた飛鳥神社と今の飛鳥神社（右の写真）



「五島における捕鯨沿革図説」（長崎文化歴史博物館蔵）に描かれた大納屋の内部

た。この子もそんな「エタ」の家族の子なのでしょうか？　それにしても、傍に転がっているのは、端肉とも言えない大きな肉の塊です。浜の漁師たちにとっても、とても黙認できるものではありませんでした。

勢子舟から降りたばかりの銑吉の目に、この光景が飛び込んできました。

入り江の対岸の向島には、大納屋があって、切り分けられた鯨肉の処理や脂肪を炊き込んで油を取り出す加工施設があります。このため、「エタ」の人達も、この向島の山の一角に細々と暮らしています。

また、地の漁師でなく地方から流れてきた刃刺したちの住まいも、この向島と定められていました。住まいする区域は隔てられていましたが、それでも銑吉の耳には、聞くともなく、「エタ」の人達の暮らしぶりが、それとなく伝わってきます。

折檻されている子は「カイ」と呼ばれる子で、母親は、大納屋の復旧作業中に起こった事故で寝たきりになっていました。

銑吉は、この子の母親が男たちに交じって太地の復興に力を貸してくれたことを浜の男たちに話し、

「エタちゅうたって、この子の親は太地の者（もん）には恩のある女子（おなご）やぞ。その子が母親のためにくすねようとしたんや、黙って見逃したらんかい！」

銑吉はカイを助け、鯨肉とともに母親のもとへ送り届けようとしました。

しかし、銑吉が小屋へ着いた時には、女はもう亡くなる寸前でした。そして、

「この子をお願いします」

その一言をを言い残して息を引き取っていったのです。

銑吉の脳裏に石鏡での出来事が、ザトウクジラの断末魔の咆哮(ほうこう)とともに思い起こされました。

銑吉はカイを八重といじかが待つ小屋へ連れ帰りますが、八重は、まるで今までも自分の子供であったように、

「いじか、お兄ちゃんが帰ったよ。」

「今までどこにおったんや、泣いてんとこっち来て、元気な顔を見せんか。」

こうして、誰も血はつながっていない、それでいて仲の良い不思議な家族が、この太地に誕生したのです。

5.「いじか」と「イジカ」

宝永津波の傷跡が「太地」から拭い去れつつあります。それとともに捕鯨業も復活し、イルカと人が共働した世界でも珍しい漁業も忘れられていこうとしています。

同様に身分差別を超えた共働も影を薄くし、一瞬の夢のように出現したユートピアも、これもまた捕鯨業の復活とともに消えていく運命にありました。

ただ銑吉と八重の夫婦の中に、いじかとカイの兄弟の中に、そして、いじかとイルカのコミュニティのなかに、そのユートピアは、かすかに残されていました。

「いじか」と、その乳兄弟の「イジカ」の絆(きずな)は、今も健在です。

太地の浜でも、イルカの乳を飲んだ「いじか」の話は、「イルカに育てられた娘」

大納屋置かれ、渡り刃刺しやエタの人たちが住まいしたと思われる向島

という尾ひれを付けはしましたが、人々に伝えられ、銑吉一家と、沖に群れをつくるイルカたちの存在は、何か不思議なものを見るように、人々の心の底に残っておりました。

あるクジラ漁の時です。勢子舟が海底から突き上がってきたナガスクジラに真っ二つにされるという事故が起こりました。

ナガスクジラは、続いて二番船の横っ腹にも突進し、二艘の勢子舟を沈めるや、再び海底深く潜り、網をかわして逃げ去っていきました。

大方の乗員は助け上げられましたが、どうしても勢子（漕ぎ手）の一人が見つかりません。あきらめかけたその時、イルカたちの鳴き声が湧きあがるとともに、その勢子が髷を一頭のイルカに咥えられ引かれて来たのです。

イルカに助けられた勢子は、仲間から鯨鈎で舟へと引き上げられました。

このことがあって以降、銑吉一家は、向島の小屋に住みながら、太地の人たちとはどこか一線を引くような存在になっていきました。それは疎まれたり、毛嫌いされたりするのでなく、共に働きながら、頼りにしながらも、どこか自分たちとは違うような、何か畏怖に近いようなようなものを、浜の人たちは感じていました。

今日も「いじか」と「カイ」の兄妹が小舟で沖へ漕ぎだしています。

舳先に立った「イジカ」の口元から、かん高い指笛の音が発せられるや、沖合では一頭のイルカが、その指笛に応えるように大きなジャンプを繰り返しました。

入り江で遊ぶバンドウイルカ

6. アシュラとの死闘

銑吉と「いじか」が太地へ来て、既に10年が過ぎようとしています。

「カイ」も15歳になり、次の漁では父親について初のクジラ漁を体験することになります。と言っても、同じ舟に乗るわけではありません。

父親の銑吉は、勢子舟の三番船に「刃刺し」として乗り込みますが、「カイ」は、捕鯨の際に使われる網や樽を回収する樽舟（たるぶね）に見習いとして乗り込むことになります。

巨大なクジラを仕留めるため、山見からの指示を受けながら、網舟がクジラの行く手に網を張り巡らし、そこへクジラを追い込んでいきます。網にはクジラの動きを鈍らせるため重しとなる樽が無数につけられています。クジラがその網を被ったら、漁師たちはその網を断ち切り、更に次の進路に網を張り巡らせ、何重にも何重にも網を被せクジラの動きを鈍らせ弱らせていきます。

クジラのほうも、この網から抜けるため、素早く海中深くに潜り網を外そうとします。

海中に潜ったクジラが次にどこに息継ぎのため姿を現せるか、その進路を読み網舟を配置しなければなりません。

クジラと漁師の頭脳戦になるわけです

勢子壱番船

勢子参番船

勢子弐番船

網船

樽船

持左右船（もっそうぶね）

横網船

が、この使い捨てられた網や樽を回収するのが樽舟の役割になります。

樽舟には通常二、三名が乗り組みますが、その多くが一線を引いた老練な水夫（かこ）たちです。そして捕鯨業の次世代を担う子供たちも15歳になるや、この樽舟に同乗し樽を回収する作業をしながら捕鯨のイロハを学ぶことになるのです。しかも樽舟は、捕鯨の様子を眺め渡せる安全な場所にいるため、子供たちは、安全に捕鯨の全体像を把握し学べるという寸法です。

そして、銑吉の子「カイ」にも、その機会は意外と早くやってきました。

その日の早朝、浜に半鐘が鳴り響くとともに、燈明崎に狼煙が上がり、沖にクジラの存在が知らされます。

向島の中継地で銑吉が燈明埼を見やると、そこには沖にザトウクジラが現れたことを知らせるべく浅葱色（あさぎいろ）の幟がひらめています。

銑吉の傍に控えていた「カイ」が、

「お父（と）やん、ザトウや！」

「上（のぼ）りクジラやな、どうやら子連れやぞ」

「どうするんやろな？」

二人は急ぎ浜へ向かいましたが、ここしばらくの不漁のせいもあって、浜では出漁が決まり、その準備が始まっていました。

普段なら上りクジラは子連れで気も荒く、栄養状態も良くないため見逃すことが多いのですが……。

銑吉は鳥羽でのことを思い出し、嫌な予感がしました。

「カイよ、今回は見送れ」

「いやじゃ、行く！」

「ほうか、ほしたら樽舟やいうて気ぃ抜いたらいかんぞ。六じぃの言うこと、よぅ

ザトウクジラのブロー（潮吹き）

聞くんやぞ!」

勢子舟（せこぶね）が水夫（かこ）たちに担がれ海へと運ばれていきます。

クジラ舟は船足を早めるために桐油や鯨油が船底に塗られています。

また船体を遠くからでも識別できるよう、多彩な模様が施されていますが、これも漆が使われ水面との摩擦が最小限に抑えられています。

このため舟は浜を引きずるのでなく、担いで海へ運ばれるのです。

網舟が先行し、続いて勢子舟、持双舟と続き、最後に樽舟と、総勢二十艘近い船団が次々と沖立ちしていきます。

樽舟のうち一艘は老練な六兵衛が船頭を務めますが、カイはその見習いとして乗り組むことになり、船団の後方で、はじめて捕鯨の全体像を、その目で見ることになるのです。

「カイよ、いじかはどうしちょる?　連れていけって、ごねんかったか?」

舟が沖に出たころ、六兵衛が気になって尋ねます。

普段から、人の好い六兵衛は、いじかから樽舟に乗せてくれるよう、何かある度にうるさくせがまれており、今回の沖立ちに際し、あまりにいじかが静かなもので、かえって気になっていたのです。

「六じぃ、わしはここじゃ、ここにおるぞッ!」

船尾の筵（むしろ）がいきなり跳ね上げられ、そこに隠れていたいじかがヌーッと顔を出しました。

「こりゃあ、たまげたのう。ここまで来たら帰れとは言えんしのう。」

沖立ちで慌ただしい中、舟が向島の傍

燈明崎の狼煙（のろし）場跡

を通る際に泳ぎ着いたに違いありません。

「ほんまに、しゃあないガキやなぁ」

言葉とは裏腹に、六兵衛は面白がっている風にも見えます。

「カイ、しっかり見張っとけや！」

「六じぃ、すまんのぅ」

沖合では、子連れのザトウクジラの網張りがすで始まっているようです。

「六じぃ、見てーっ！」

いじかが、張られた網の方ではなく、その外側を指さして叫んでいます。

見れば、網で囲われた縄張りの外側の海面が思いっきり泡立ち、いきなり巨大なザトウクジラが姿を現したのです。と思う間もなく包囲網の一番外枠の網舟に向かい凄まじい勢いで突き進んでいきます。

六左衛門は「ささやき筒」を口元に持って来るや、あらん限りの大声で叫びます。

「七番にザトウが突っ込むぞッ！」

母子クジラの追い込みに気がとられていた陣立てが、一斉に身震いするかのように崩れようとしています。

網舟七番船の水夫たちが一斉に海へ飛び込むや否や、舟はザトウクジラの正面からの体当たりを受け真っ二つに避けてしまいました。

勢子舟の三番船でこれを見ていた銑吉が呻くように呟きます。

「アシュラや……！」

「そのまま一番に突っ込むぞーッ！」

アシュラの波を切り裂くような音に、銑吉の叫び声が被ります。

網舟一番船の乗り手たちは、逃げる間もなくアシュラの体当たりで舟と共に海へ放り出されました。

二重に網を被ったアシュラは、勢いよく

ザトウクジラの母子

海中深くに潜り網をかわします。

「二番や、二番の真下から来るぞーッ！」

アシュラの動きを読んだ銛吉が「ささやき筒」を口元に当て叫びます。

次の瞬間、二番の網舟が海面から大きく持ち上げられ海面へ叩きつけられます。

ザトウの母子に逃げ道が開かれました。

アシュラは母子を先導し逃げていくかに思われました。

……が、アシュラは戻ってきたのです。

勢子舟の四番、五番、六番船が陣立てする右翼を狙っているかのようです。

アシュラが右翼に狙いをつけたかと思うや、そのまま海中へと潜ります。

「いかん、こっちへ来るぞ！」

銛吉は、アシュラが海中で方向を変え、左翼の一番、二番、三番の勢子舟を狙って来ると読んだのです。

銛吉の読みは的中しましたが、それよりもアシュラの動きが勝ちました。

陣列の中央にいた三番船は、アシュラの背に持ち上げられ空中高く上がったかと思うや、次には勢いよく海面にたたきつけられました。

一番、二番船も打ち砕かれ、海は凄惨な修羅場と化しました。

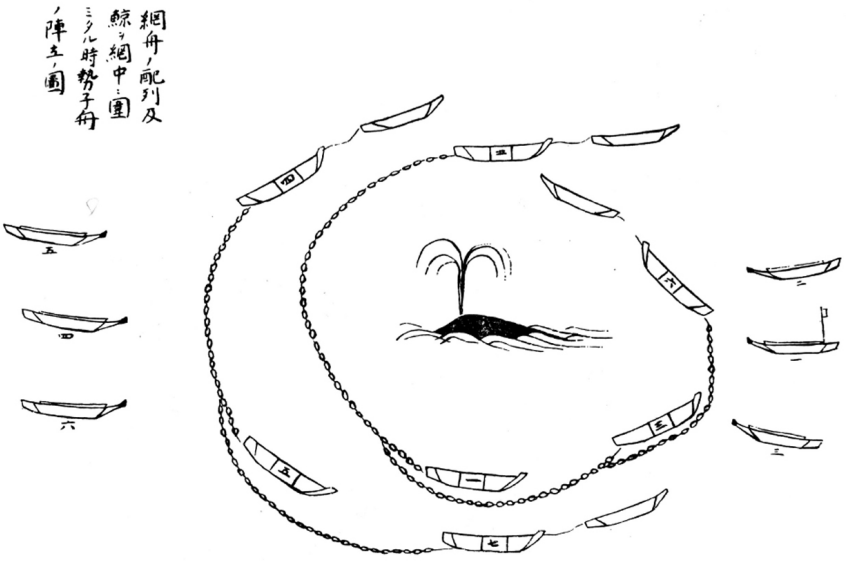
「お父―ッ、お父がやられた！」

いじかとカイを乗せた樽舟が必死になって現場に向かいます。

同時に周りにいた勢子舟、持双舟、樽舟等、残った舟の一群が海に落ちた水夫（かこ）たちの救助に向かいます。

救助に向かった舟にもアシュラの執拗な攻撃はやみません。

海に投げ出されたいじかの目に悠然と去っていくアシュラの姿が焼き付きました。



古式捕鯨における網舟の配列および勢子舟の陣立ての図（太地くじらの博物館）

7. 漂流

激しい揺れで海へ投げ出されたいじかに救いの手が差し出されました。

カイです。樽舟には六じぃの姿もなく、カイがただ一人、青ざめた顔で呆然としていますが、それでもしっかりといじかの手を握り救い上げてくれたのです。

カイはいじかを引き上げるや、二人してその場にへたり込んでしまいました。

……

「お父(とう)や、お父を探さなあかん。」

気を取り直したいじかが舳先に仁王立ちになり、思いっきり指笛を鳴らします。

やがてにぎやかな鳴き声と共に、イジカ（いじかの乳兄弟）を先頭にイルカたちが群れになって集まってきます。

こうしてイルカの群れも加わって銓吉の捜索が続きます。以前のナガスクジラの事件の時も、もう駄目だと思われた水夫をイルカたちが助けてくれました。

そう思えば、（必ず見つかる、きっと見つかる）、そう自分に言い聞かせるのですが、そのうち陽も落ち、気が付けば、周りにはあの喧噪も消え去り舟の一艘すら見つけることはできません。

どうやら気が付かないまま、黒瀬川（黒潮）の流れに捉われてしまったようです。

ついに銓吉が見つかることもないまま、いつしか、いじかもカイも疲れこんで寝込んでしまっていました。

そうして何日流されたでしょうか？

いつしか時間の感覚もなくなりました。

ただ（お父はきっと無事に太地へ帰っていて探しに来てくれる）、その思いだけを頼りに流されている毎日でした。

悠々と離れいくザトウクジラ

わずかに積まれていた水も非常食も今では底をつきました。

ただイルカの群れが、舟に伴走するように付き添ってくれています。

ある夜、いじかは、波の音にふと目が覚めました。それとも夢の中なのでしょうか？　真上には天の川を中心に無数の星々輝いています。

（浜でも、こんなにたくさんの星は見たことがなかったなぁ……）

すると流れ星でしょうか、一筋星が流れ、いえ、その星は自分に向かって進んでくるのです。そして自分の中へ吸い込まれていきます。

そしてまた一筋、また一筋、次から次へ、星が降るように自分に向かって飛び込んできては、また自分の中に吸い込まれていくのです。

星は、銚吉となり、八重となり、カイの母となり、カイとなり、六じぃとなり、浜の人たちとなり、無数のイルカたちとなり、そしてまだ見ぬ生みの母親となって、いじかに微笑みかけては、自分の中へ消えていきます。

いじかは、例えようもない温かさというのでしょうか、やさしさというのでしょうか、今まで感じたことのないような安心感を身体中に感じていました。

いじかとカイを乗せた樽舟は、相模湾をイルカたちの群れに先導されるように南伊豆の浜辺（弓ヶ浜でしょうか?）に到着しました。

見ていた漁師の話では、まるでイルカの群れが小舟を引いてきているようだったと言います。

果てしない太平洋の夕暮れ（小笠原丸船上から）

それもその筈です。樽舟の舳先には、クジラ網の一部が絡まっており、それをイルカの群れが交互に引いてきたようなのです。

この後、いじかやカイがどうなったかは分かりません。

しかし、この一帯では、一時期イルカと人間が共働して漁をしていた時期があるようなのです。

今ではそれも忘れられてしまいましたが、ただ不思議な言い伝えが残されています。

太地では「クジラが一頭とれれば七浦栄る」という言い伝えが残されていますが、この地区では「クジラが一頭とれたら七浦枯れる」と、真逆のことが言われているのです。

8. 結び

衛星からの画像は「南伊豆」の岬あたりを捉えています。

衛星カメラがどんどんズームしていくと、年老いた「いじか」が、こちらを見上げて微笑んでいます。

突然、画面は消え去り、そこに残っているのは太平洋の海面だけでした。

――――――――――――――――――――

「ミラ、どうかしたのか?」

「なんでもない! 画像に日本が見えたような? いじかっていう女の人を見たの?」

「バカ言うなよ! ミラの《ふるさと》だから無理もないと思うけど、日本は50年前に太平洋の底だぜ。」

「わかってるの。」

(でも、何かとても懐かしい気が……)

これで大阪の大宝からはじまった「クジラと人との関り」を追いかける「僕の旅」は、いったんは幕を閉じることになります。

この続きは「来世」へと持ち越しです。

アメリカの西海岸か、カナダか、はたまたオーストラリアか？

それを知る術はありませんが、来世は、きっと地球のどこかで、クジラやイルカたちと「地球」や「宇宙」のことを語りあっていると思います。

では、そんな未来を信じて、この「クジラ紀行」を終わらせていただきます。

幸か不幸か、この一文と出会われた方は、来世また読者になっていただける方と信じて、その時も、小さな小さな「声」だとは思いますが、ぜひ耳を傾けていただけるようお願いする次第です。

この小さな声は、2026 年の初夏、日本の、紀伊半島の中にある「奈良」という地域から発信されています。

人とクジラのいる風景　― 日本編 ―

初版発行　2026 年 6 月 28 日

著　　者　　桐 生 敏 明
装　　幀　　桐 生 敏 明
発　　行　　編集工房 DEP
奈良県北葛城郡広陵町馬見北 4 丁目 14-7
TEL 0745-55-8522　FAX 0745-55-8440
印刷・製本　　Kindle ダイレクト・パブリッシング

© Toshiaki Kiryu, Printed in Japan 2026

沖縄・座間味／エスコート号佐野船長提供